長崎県文化財調査報告書　第161集

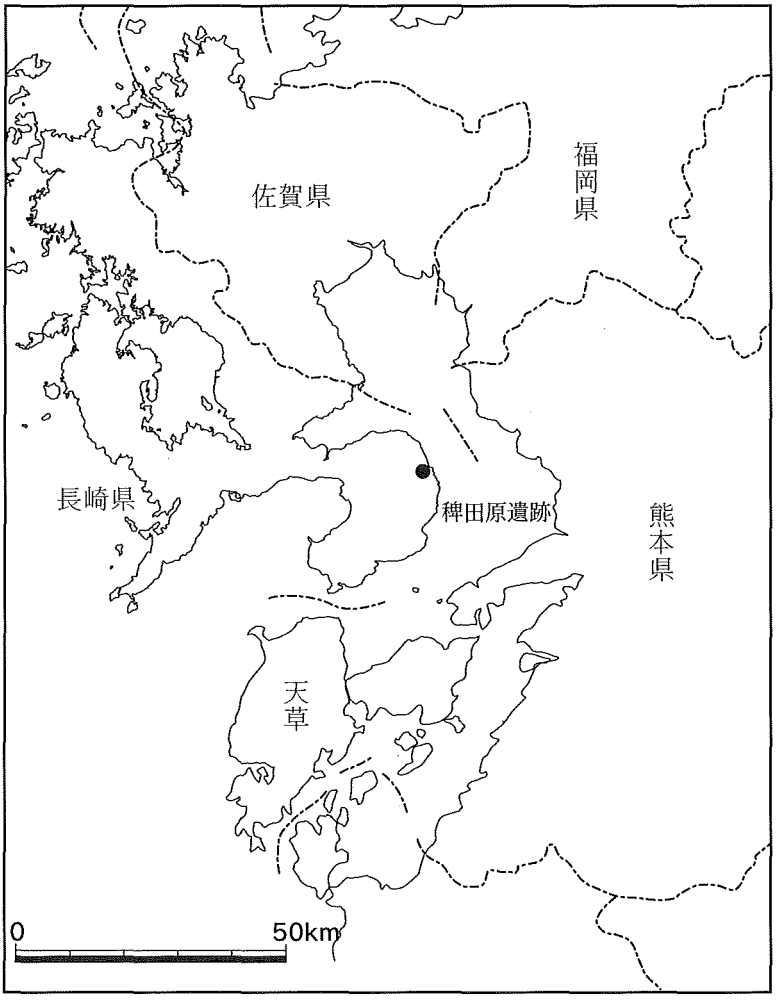
稗田原遺跡Ⅴ

２００１年

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第161集

稗田原遺跡Ⅴ



遺跡位置図

2001年

長崎県教育委員会

3区　ベルト

7区　南壁 セクション

発刊にあたって

本書は,島原市の礫石原松尾停車場線と県道野田島原線の拡幅工事に伴って実施した島原市稗田原(ひえたばる)遺跡の発掘調査報告書です。

本遺跡は,これまで各種開発事業に伴い,４回の調査を実施してきましたが,それぞれの調査の結果,縄文時代から中世までの遺物･遺構を多く確認し,この地域が古くから継続して利用されていたことが判明いたしました。

特に縄文時代の晩期の遺跡としては,島原半島のこの時代を研究するうえで欠かせない遺跡の一つとして位置づけられる成果を得ることができた他,県内でも稀少な古墳時代の住居址も検出されるなど,遺跡の重要性をさらに高める発見がありました。

過去の調査により,稗田原遺跡はさらに広範囲に広がることが推測されており,今後も地域の方々の理解と協力をいただきながら文化財保護との調整を図って参りたいと思います。

21世紀は今以上に科学技術が発達することが予想されますが,科学技術の進歩は私達の祖先の功績の上に成り立っていることを思い起こさねばなりません。科学技術が日進月歩で進むいま,私達は遠い祖先の足跡に戻って,過去の実績から将来へ向かっての指針を模索していかねばなりません。

そのためにも文化財に対する理解と愛護の精神を深めるための学習の場や機会が必要となっていくものと思われます。

最後にご協力いただいた関係者の皆様にお礼申し上げるとともに,今回の稗田原遺跡で行われた発掘調査成果が学術資料として活用され,文化財の愛護に役立つことを念じて発刊のあいさつといたします。

平成１３年３月３１日

長崎県教育委員会教育長
木村　道夫

例　　言

1．本書は、一般国道礫石原－松尾停車場線拡幅工事に伴って実施した長崎県島原市稗田原町に所在する稗田原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は長崎県教育委員会が主体となり、長崎県教育庁文化課がこれを担当した。調査関係者と調査期間は以下の通りである。

調査関係者	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	福田　一志
		文化財調査員	竹中　哲朗
調査期間	平成12年５月８日～６月３日		

3．本書の執筆は福田と竹中が分担で行い、分担は以下の通りである。

「１、調査に至る経緯～７、遺物各節 ３）土師器・須恵器」　・・・・竹中
「７、遺物各節 ４）鉄製品 ５）中世以降の遺物・石製品 ６）石器」・福田
「９、まとめ１）土器について」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・竹中
「９、まとめ２）石器について」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・福田

「８、自然科学分析」については、古環境研究所（株式会社 本社埼玉）に依頼し、貴重な分析成果を報告していただいた。

4．遺物の整理・実測は、松尾美代子・幸田芳江・木場真奈美・砂崎素子・黒川英子・山内麻紀・濱本秀美の協力を得、拓本・トレースなどの図面整理は、渡辺洋子・斉藤いづみ・小林利恵子・竹中が行った。

5．遺物の写真撮影に際しては、土器片については本田秀樹（長崎県文化課）の協力を得て竹中が、石器については福田が行った。

6．セクション図や遺物実測図の標記は以下の通りである。

セクション図

網：砂礫　　斜線：石など

実測図

・土器片は小片が多いため1/2縮尺を基本としているが、1/3縮尺としているものもある。
・石器は2/3縮尺を基本としている。
・各遺物の出土地区と出土層位などは本文中で示している。

7．自然化学分析は古環境研究所（株式会社 本社埼玉）に依頼した。分析項目と分析資料の概要は以下の通りである。

分析資料：５区溝状遺構（SD04）底面出土炭化木材　　数量：１点
分析項目：放射性炭素Ｃ１４年代測定（AMS法）

8．本書の編集は、竹中による。

本　文　目　次

1．調査に至る経緯・・1
2．遺跡の地理的・考古学的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
3．調査履歴・・・7
4．調査の方法と遺構の概略・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
5．土層観察・・13
6．遺構各節
　1）　SD01・・・14
　2）　SD02・・・15
　3）　Pit01・Pit02・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　4）　SD04・・・17
7、遺物各節
　1）　縄文土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　2）　弥生土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
　3）　土師器・須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　4）　鉄製品・・37
　5）　中世以降の遺物・石製石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
　6）　石器・・・38
8、自然化学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
9．まとめ
　1）土器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
　2）石器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

挿　図　目　次

第１図　周辺の主要遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第２図　周辺遺跡時代別分布図・・・・・・・・・・・・・・4
第３図　稗田原遺跡全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第４図　縄文時代早期土器・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第５図　古墳時代前期住居址と出土遺物・・・・・・7
第６図　Ａ地区検出遺構配置図・・・・・・・・・・・・・8
第７図　Ｂ地区検出遺構配置図・・・・・・・・・・・・・9
第８図　稗田原遺跡12年度調査区配置図・9～10
第９図　3区ベルト土層図・・・・・・・・・・・・・・・・11
第10図　土層比較柱状図・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第11図　1区SD01と出土遺物・・・・・・・・・・・・・14
第12図　8区・9区SD03と出土遺物・・・・・・・・・15
第13図　2区Ｐｉｔ01・3区Ｐｉｔ02・・・・・・・16
第14図　4～6区SD04・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第15図　縄文時代早期土器・・・・・・・・・・・・・・・・18
第16図　縄文時代晩期土器①・・・・・・・・・・・・・・19
第17図　縄文時代晩期土器②・・・・・・・・・・・・・20
第18図　縄文時代晩期土器③・・・・・・・・・・・・・21
第19図　縄文時代晩期土器④・・・・・・・・・・・・・23
第20図　縄文時代晩期土器⑤・・・・・・・・・・・・・24
第21図　縄文時代晩期土器⑥・・・・・・・・・・・・・25
第22図　縄文時代晩期土器⑦・・・・・・・・・・・・・27
第23図　縄文時代晩期土器⑧・・・・・・・・・・・・・28
第24図　弥生土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第25図　１区SD01出土土器・・・・・・・・・・・・・30
第26図　８区・9区SD01出土土器・・・・・・・・・30
第27図　層位出土土師器①・・・・・・・・・・・・・・・32
第28図　層位出土土師器②・・・・・・・・・・・・・・・33
第29図　層位出土須恵器①・・・・・・・・・・・・・・・35
第30図　層位出土須恵器②・・・・・・・・・・・・・・・36
第31図　中世陶磁器・石製品・鉄製品・・・・・・・37
第32図　石器①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

第33図　石器②・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第34図　石器③・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第35図　石器④・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第36図　縄文晩期前葉の石器組成・・・・・47

表目次

第１表　周辺遺跡地名表　2p
第２表　過去の調査　5p
第３表　層位別比較表　11p
第４表　遺構別比較表　12p
第５表　土層比較表　13p

図版目次

図版①　51p
1）3区ベルトセクション　2）7区南壁セクション　3）8区南壁セクション　4）12区南壁セクション
5）9区南壁セクション　6）10・11区南壁セクション　7）10南壁セクション
8）11区南壁セクション
図版②　52p
1）1区SD01検出状況　2）5区SD02 検出状況　3）7・8区SD03 検出状況
4）8区SD03検出状況　5）8区SD03土師器坏 出土状況　6）9区SD03須恵器坏 出土状況
7）10区SD03検出面　8）10区SD03検出状況
図版③　53p
1）6区南壁セクション・SD04断面　2）6区SD04検出状況　3）6区SD04遺物出土状況
4）4・5区SD04検出状況　5）2区Ｐｉｔ01土器片出土状況　6）4区3層砥石出土状況
7）15区北壁セクション　8）13～15区Ｐｉｔ群検出状況
図版④　縄文時代晩期土器①　54p
図版⑤　縄文時代晩期土器②　55p
図版⑥　縄文時代晩期土器③　55p
図版⑦　縄文時代晩期土器④　56p
図版⑧　縄文時代晩期土器⑤　57p
図版⑨　縄文時代晩期土器⑥　58p
図版⑩　弥生土器・土師器①　59p
図版⑪　土師器②　60p
図版⑫　須恵器①　61p
図版⑭　須恵器②　62p
図版⑮　縄文時代晩期土器底部　土師器・須恵器　中世陶磁器・石製品・鉄製品　63p
図版⑯　石器①　64p
図版⑰　石器②　65p
図版⑱　石器③　66p

1、調査に至る経緯

今回の調査契機は、広域農道(グリーンロード)と国道251号線とを結ぶ一般県道礫石原－松尾停車場線道路改良工事に伴うものである。改良工事は道路の拡幅整備を目的として、調査対象面積は約1、035㎡であった。まず、拡幅部分の約650㎡を調査し、その後現在利用されている現道部分を調査する予定であった。しかし、拡幅予定部分と現道部分とは高低差が約1m近くあり、現道部分は水道やガスなどの生活ラインの配管工事が行われている経緯もあり、すでに包含層などは隠滅していると判断できた。そのため今回の報告内容は、拡幅部分約650㎡の発掘調査成果である。

2、周辺の地理的・考古学的環境

1)地理的環境　(第1図)

稗田原遺跡は島原市礫石原付近から広がる扇状地扇端部に位置する。北に広がる中野・中原・三ノ沢から有明の湯江川周辺そして国見の土黒川周辺にいたるまで、標高100m以上には中尾川や湯江川などの主要河川による深い谷が、100m以下には小河川による浸食谷が見られ、沿岸部にかけて細長い丘陵が幾つも横たわっている。中世以前はその丘陵に沿い、多くの入り江が発達していたものと思われる。稗田原遺跡は標高約15～45mを測るが、小河川による浸食谷は見られず比較的平坦な地形を呈する。その平坦面を中心に東西約600m南北約400mにわたり遺物散布が確認される。

2)考古学的環境　(第1表・第2図)

島原・有明・国見の3市町村でこれまでに発見された遺跡の数を時代別で見ると縄文時代62,弥生時代39,古墳時代42,古代19,中・近世33となり[註1],以下に標高を中心に整理していく。

縄文時代では標高約420mの魚洗川E地点を最高として,まんべんなく遺跡が見られ,10～100mと250m以上の二つに集中している。標高250m以上の代表は礫石原で,東西約800m南北約1kmに広がる晩期後半の礫石原式土器の標識遺跡で配石遺構などを検出している[註2]。標高20m周辺では,筏・小原下・畑中で御領式～黒川式併行期の土器がみられ,中田では御領式,大野原では三万田式から御領式併行の土器がそれぞれ主体を占める[註3]。晩期でも後半に位置付けられる突帯文土器は100m未満に位置する三会下町海中,稗田原,長貫でも確認される[註4]。

弥生時代では50m未満に遺跡が分布し,なかでも青銅器を出土した景華園[註5]周辺に集中し,土黒川流域に次の集中区が見られる。景華園遺跡の墳墓群に対して一野遺跡では弥生時代後期に属する竪穴住居2棟が検出されている[註6]。

古墳時代では標高50m以下に古墳がみられ,その墓域に対応するように居住域の候補遺跡が周辺に分布する。一野では5世紀代から古墳が集中し周辺には松尾・上中野・山ノ内などの居住域の候補があり,土黒川周辺でも5世紀代から住居跡がみられ,6世紀代の古墳が多く分布する[註7]。とくに土黒川流域では,5世紀代の竪穴住居を検出した上篠原で陶質土器が,高下古墳で馬具や金銅製品がみられる[註8]。一野でも馬具や鉄刀などが出土しており[註9],12年度の調査[註10]では肥後に分布の中心が見られる埋葬施設が確認され,有明海を媒体にした交通・交流が発達していることが確実となってきた。海上交通の発達に伴った広域交流が標高50m以下への集中した立地を促しているのであろう。しかし前期では,稗田原で住居址1棟が,佃で大型掘建柱建物1棟が発見されたが[註11],比較的高所である百花台や肥賀太郎などで布留式併行の土師器が出土し[註12],高所にも遺跡が存在し中期以降の状況とは異なっている。

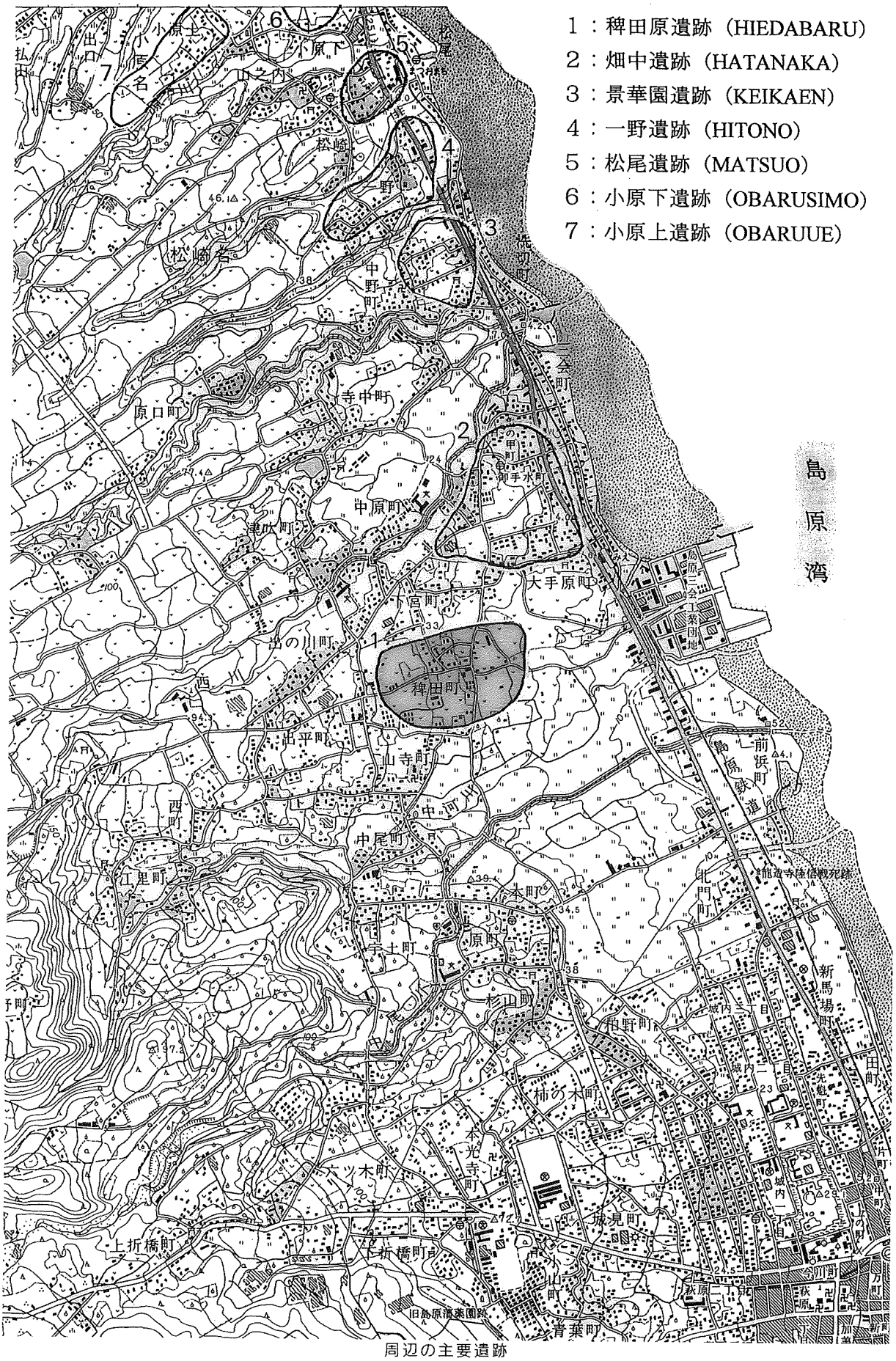
古代では五万長者を中心に土黒川流域に集中し,条里遺構も確認されている。松尾周辺に次の集中が見られ,稗田原周辺ではまばらな分布状況である。

以上のまとめとなるが,弥生時代から古代にかけての流れを大きくみていくと,景華園周辺から土黒川周辺に集中区が移動しており,島原半島の古代を考える上では重要な動きと考えられる。

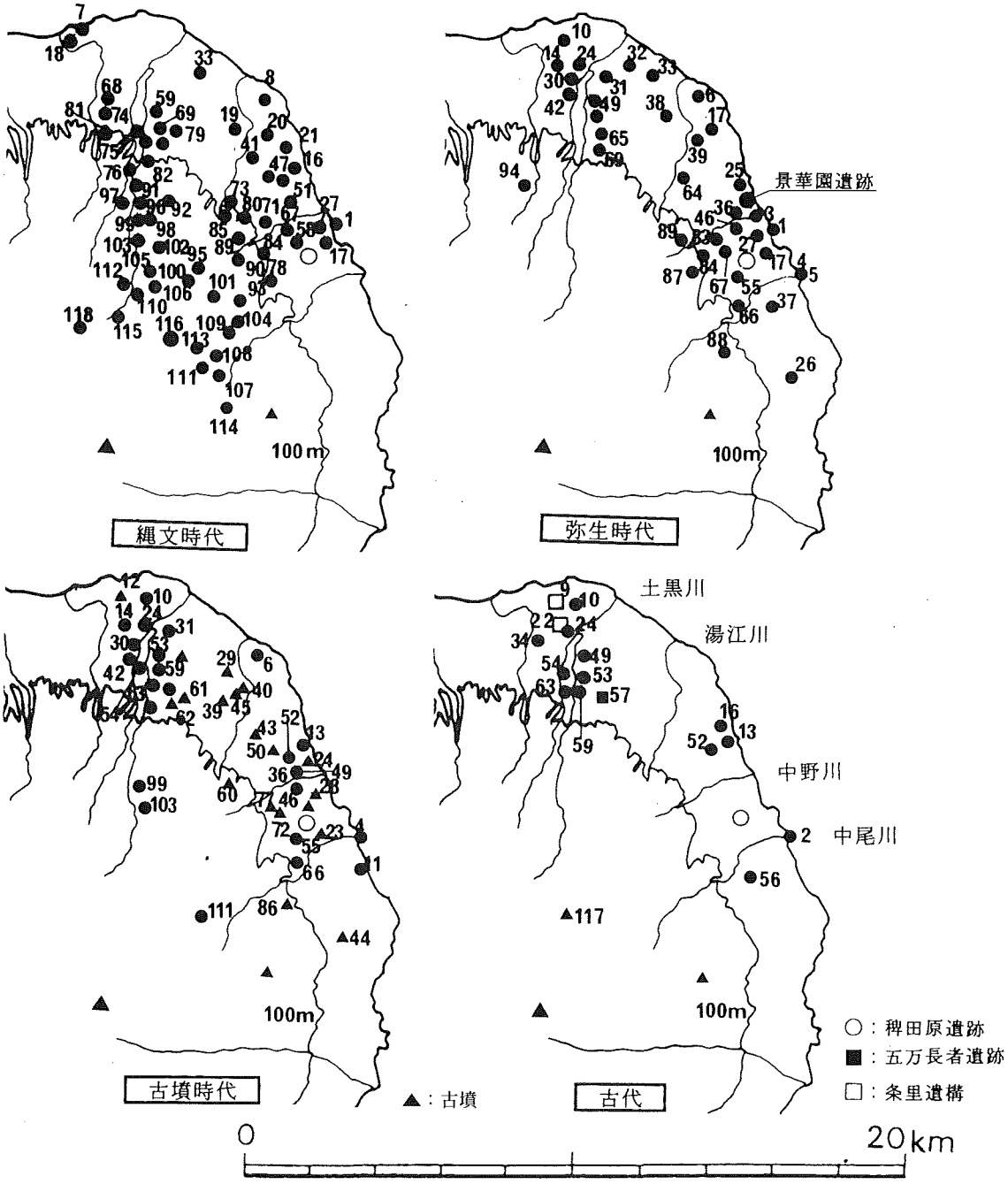
第１表　周辺遺跡地名表

NO	名称	所在地	種別	標高	時期
1	三会下町海中	島原市三会町（海中）	包蔵地	0	縄文・弥生
2	大手浜	沖田畷新田町大手浜	包蔵地	0	古代
3	中野川	島原市中野町中野川河床	包蔵地	0	弥生
4	沖田海中	島原市前浜沖田	包蔵地	0	弥生・古墳
5	沖田	島原市前浜町沖田	包蔵地	5	弥生
6	妙法塚	有明町池田名字妙法塚ほか	包蔵地	5	弥生・古墳
7	筏B	国見町東里名字筏	包蔵地	8	縄文
8	中田	有明町大野名・中田ほか	包蔵地	10	縄文
9	六ノ坪条里	国見町今出名字六ノ坪	条里	10	古代
10	龍王	国見町今出名字龍王	集落跡	10	弥生～古代
11	沖田畷	沖田畷新馬場町・北門町	祭祀	10	古墳
12	筏古墳	国見町東里名字筏	古墳	10	古墳
13	松尾	有明町松崎名字松尾	包蔵地	15	古墳・古代
14	佃	国見町神代己1075～1077	包蔵地	15	弥生・古墳
15	西川古墳	沖田畷亀の甲町	古墳	19	古墳
16	小原下	有明町三之沢名字和田	包蔵地	20	縄文・古代
17	下宮	島原市下宮町園田，焼木	包蔵地	20	縄文・弥生
18	筏A	国見町東里名字筏	包蔵地	20	縄文
19	久原	有明町久原名久原	包蔵地	20	縄文
20	大野原	有明町大野名東ほか	墳墓	20	縄文・弥生
21	才木	有明町東空閑名古字馬場	包蔵地	20	縄文
22	真正寺条里	国見町川原田名字真正寺	条里跡	20	古代
23	長塚古墳	島原市山寺町字長塚	古墳	20	古墳
24	樋ノ口	国見町川原田名字樋ノ口	集落 条里	20	弥生～古代
25	一野	有明町三之沢字野田ほか	包蔵地	20	弥生・古墳
26	上の原	島原市白土町	包蔵地	20	弥生
27	畑中	島原市中原・亀の甲ほか	包蔵地	25	縄文・弥生
28	大塚古墳	島原市中原町大塚	古墳	25	古墳
29	庄司屋敷古墳	有明町庄司屋敷釘崎名	古墳	25	古墳
30	篠原	国見町篠原名字下篠原	包蔵地	25	弥生・古墳
31	十園	国見町馬場名字十園	包蔵地	25	弥生・古墳
32	多比良馬場	国見町馬場名字中田町	包蔵地	25	弥生
33	戸田向原	有明町戸田名字向之原	包蔵地	30	縄文・弥生
34	赤城	国見町神代中ノ坪	集落 城館	30	古代
35	六人道横穴	有明町久原名平山	古墳	30	古墳
36	上中野	島原市上中野町ほか	包蔵地	30	弥生～古代
37	道田	島原市本町道田	墳墓	30	弥生
38	庄司屋敷	有明町庄司屋敷釘崎名	包蔵地	30	弥生
39	甘木	有明町大野名甘木門前	包蔵地	30	弥生
40	平山古墳	有明町久原名字後久原	古墳	31	古墳
41	温泉神社台地	有明町大野名甘木門前	包蔵地	35	縄文
42	上篠原	国見町篠原名字上篠原	包蔵地	35	弥生・古墳
43	拂山横穴	有明町東古閑拂山	古墳	40	古墳
44	笹塚古墳	沖田畷上の原３丁目ほか	古墳	40	古墳
45	塔ノ鼻横穴	有明町久原名平山	横穴	40	古墳
46	寺中B	島原市尾崎，湯の元ほか	包蔵地	40	弥生・古墳
47	小原上	有明町三之沢名字小原	包蔵地	45	縄文
48	稗田原	島原市稗田町	包蔵地	45	縄文～古代
49	小中野B	国見町多比良字小中野	集落跡	45	弥生～古代
50	国土神社裏横穴	有明町大三東小原上	横穴	45	古墳
51	上一野	有明町三之沢名字上一野	包蔵地	50	縄文
52	山ノ内	有明町三之沢名字松崎上	包蔵地	50	古墳・古代
53	杉ノ元	国見町多比良字杉ノ元	集落跡	50	古墳・古代
54	矢房	国見町工黒宮田名字矢房	集落跡	50	古墳・古代
55	山崎	島原市山寺町字山崎	包蔵地	50	弥生・古墳
56	熊野神社	島原市原町熊野神社内	製鉄跡	55	古代
57	五万長者屋敷	国見町高下名字平野山	包蔵地	55	古代・瓦
58	三会中学校	島原市下富ほか	包蔵地	60	縄文
59	松尾	国見町多比良字松尾	包蔵地	60	縄文 古墳 古代
60	山ノ内上横穴	有明町山ノ内上	古墳	110	古墳
61	八反田古墳	国見町高下名字八反田	古墳	60	古墳
62	金山古墳	国見町金山名字鬼塚	古墳	60	古墳
63	石原	国見町工黒宮田名字石原	集落跡	60	古墳・古代
64	上松高野	有明町大野字上松高野	包蔵地	60	弥生
65	金山	国見町金山名字鬼塚	包蔵地	60	弥生
66	釘原	島原市字土町釘原	包蔵地	70	弥生・古墳
67	津吹	島原市津吹町三段畑	包蔵地	80	縄文・弥生
68	大広野	国見町山ノ上名字大広野	包蔵地	80	縄文
69	専正寺	国見町高下名字専正寺	包蔵地	80	縄文・弥生
70	胡麻壺	国見町高下名字胡麻壺	包蔵地	80	縄文
71	原口B	島原市原口町，屋敷高野ほか	包蔵地	80	縄文
72	鬼の家古墳	島原市出の川町出の上	古墳	80	古墳
73	下源在高野	有明町大野名字下源在高野	包蔵地	90	縄文
74	堀ノ口	国見町山ノ上名字堀ノ口	包蔵地	90	縄文
75	猪之瀬	国見町多比良金山猪之瀬	集落跡	90	縄文
76	水口田	国見町土黒下八斗木	包蔵地	90	縄文
77	人塚古墳	島原市出の川町字人塚	古墳	90	古墳
78	坪浦	島原市西町坪浦	包蔵地	95	縄文
79	清水山	有明町戸田名字清水山	包蔵地	95	縄文
80	灰ノ久保	有明町三之沢名字灰ノ久保	包蔵地	100	縄文
81	土井下	国見町山ノ上名字土井下	包蔵地	100	縄文
82	中島	国見町金山名字中島	包蔵地	100	縄文
83	寺中A	島原市寺中町大野別れ道	包蔵地	100	弥生
84	長貫B	島原市仁田平ほか	包蔵地	105	縄文・弥生
85	上源在高野	有明町大野名字上源在高野	包蔵地	110	縄文
86	小塚古墳	島原市六ツ木町辰ノ元	古墳	110	古墳
87	南楠沢	島原市南楠沢	包蔵地	130	弥生
88	折端	島原市下折橋町	消滅	130	弥生
89	原口A	島原市尖石，原口上ほか	包蔵地	140	縄文・弥生
90	長貫A	島原市長貫町楢高野	包蔵地	140	縄文
91	小ケ倉A	国見町金山名字堀囲	包蔵地	150	縄文
92	森岡	有明町戸田名字横道	包蔵地	160	縄文
93	尻無	島原市広高野町尻無	包蔵地	160	縄文
94	赤松	国見町上古賀名字赤松	包蔵地	160	弥生
95	下油堀	島原市油堀町下油堀	包蔵地	165	縄文
96	小ケ倉B	国見町金山名字堀囲	包蔵地	170	縄文
97	栗山	国見町八斗木名字栗山	包蔵地	180	縄文
98	小ケ倉C	国見町金山名字堀囲	包蔵地	185	縄文
99	百花台A・B・C	国見町金山名字堀囲	包蔵地	190	縄文・古墳
100	上油堀	島原市油堀町上油堀	包蔵地	190	縄文
101	大タブ沢	島原市広高野町大タブ沢	包蔵地	205	縄文
102	一本松	有明町大野名字一本松高野	包蔵地	210	縄文
103	百花台D・E	国見町金山名字堀囲	包蔵地	220	縄文・古墳
104	立野	島原市立野町弓弦	包蔵地	230	縄文
105	百花台F	国見町金山名字堀囲	包蔵地	240	縄文
106	二ツ石	有明町戸田名字地蔵辻	包蔵地	255	縄文
107	平の山B	島原市平の山　北千本木町	包蔵地	260	縄文
108	平の山A	島原市北千本木町平の山	包蔵地	270	縄文
109	弓弦	島原市立野町弓弦	包蔵地	280	縄文
110	魚洗川A・B	国見町金山横道上	包蔵地	285	縄文
111	肥賀太郎	島原市」肥賀太郎北千本木	包蔵地	290	縄文・古墳
112	魚洗川C	国見町八斗木名字上原	包蔵地	295	縄文
113	馬渡	沖田畷立野町馬渡	包蔵地	310	縄文
114	矢櫃	島原市南千本木町矢櫃	包蔵地	330	縄文
115	魚洗川D	国見町金山名横道上	包蔵地	330	縄文
116	礫石原	島原市礫石原町有明町大野	集落	340	縄文
117	礫石原古墓	島原市礫石原町甲	墳墓	350	古代
118	魚洗川E	国見町矢筈75林班3－31	包蔵地	420	縄文

『長崎県遺跡地図』より


1：稗田原遺跡（HIEDABARU）
2：畑中遺跡（HATANAKA）
3：景華園遺跡（KEIKAEN）
4：一野遺跡（HITONO）
5：松尾遺跡（MATSUO）
6：小原下遺跡（OBARUSIMO）
7：小原上遺跡（OBARUUE）
島原湾
稗田町
中原町
大手原町
寺中町
原口町
中野町
松崎
中尾町
山寺町
出平町
宇土町
杉山町
柿の木町
六ツ木町
上折橋町
下折橋町
城見町
青葉町
新馬場町
北門町
前浜町
島原鉄道
旧島原港楽園跡

周辺の主要遺跡



第２図　周辺遺跡時代別分布図

註　１『長崎県遺跡地図－島原市･南高来郡地区－』長崎県埋蔵文化財調査報告書第111集長崎県教育委員会1994　２古田正隆『礫石原遺跡』百人委員会埋蔵文化財報告第七集1977　３古田『筏遺跡発掘調査報告』国見高等学校社研部･国見町教育委員会1969ほか　長崎県教育委員会「小原下遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅶ』1984　４古田『島原市の海中干潟遺跡』百人委員会埋蔵文化財報告第二集1974　長貫遺跡調査団『長貫遺跡緊急調査概報』島原市教育委員会1986　５古田『三会中野景華園遺跡』島原市教育委員会1963　尾上博一「島原市景華園遺跡出土の中細形銅矛」西海考古創刊号西海同人会(長崎)1999　６有明町教育委員会『一野遺跡』1992　７小田富士雄「長崎県高下古墳」『九州考古学研究　古墳時代編』学生社1989　８諫見富士郎『上篠原遺跡』長崎県立国見高等学校考古学研究部1988　９古田「一野遺跡調査概報」長崎県土木事務所1960　10平成12年度調査　報告書刊行予定(12年度3月)　11長崎県教育委員会『原始･古代の長崎』通史編1998　12長崎県教育委員会「肥賀太郎遺跡」『長崎県埋蔵文化財集報ＸⅢ』長崎県埋蔵文化財調査報告書第97集1990

3,調査履歴

1)過去の調査　(第3図)

稗田原遺跡には遺跡中央付近(標高約28m)を起点として東西南北に県道が通り,拡幅工事に伴う発掘調査が,平成4年度から長崎県教育委員会を主体として行われてきた。道路関係の調査は今回で7回目である。また,遺跡の現状はジャガイモやニンジンなどの野菜畑やミカンなどの果樹園が大部分を占めており,新農政事業として灌漑排水の整備が行われ,それに伴う確認調査も平成4年度から長崎県教育委員会を主体として行われている。また,県営住宅建設に伴う確認調査も,島原市教育委員会を主体として平成6年度に行われている。発掘調査の結果については,順次報告書が刊行されており,県道関係では今回で5冊目となる。これまでの調査をまとめると以下のようになる。

第2表　過去の調査

	調査面積	主な遺構	主な出土遺物	備考
第1次調査	350㎡	竪穴式住居址1棟(古墳時代前期)、溝状遺構3、柱穴群	布留式土器・縄文時代早期押型文土器、南九州円筒形土器、晩期土器・石器	註1
第2次調査	650㎡	近世建物跡1棟、幅2mの溝状遺構1	中世～近世にかけての青磁・陶磁器、須恵器、土師器、縄文時代早期土器・石器	註1
第3次調査	200㎡	溝状遺構2(古代)	青磁、瓦器、須恵器、土師器、縄文土器	註1
第4次調査	1270㎡	柱穴群(古代)、集石遺構	陶器、弥生土器、縄文時代晩期土器	註2
第5次調査	1340㎡	溝状遺構3、土石流路5条、柱穴・土坑群(中世中心)、集石遺構	陶器、青磁、滑石製品、瓦器、須恵器、土師器、縄文時代晩期土器、早期円筒形条痕文土器、旧石	註3
第6次調査	220㎡	旧河道1条	陶磁器、滑石製品、須恵器、土師器、縄文時代晩期土器、中期土器	註4

遺跡範囲はおよそ280haを測り,これまでの調査面積は約4,6haで,全体のおよそ1,7%である。このような制約された面積であるが,以下のように多くの考古学的成果を得ている。

2)過去の調査で検出された遺構・遺物　(第4図・第5図)

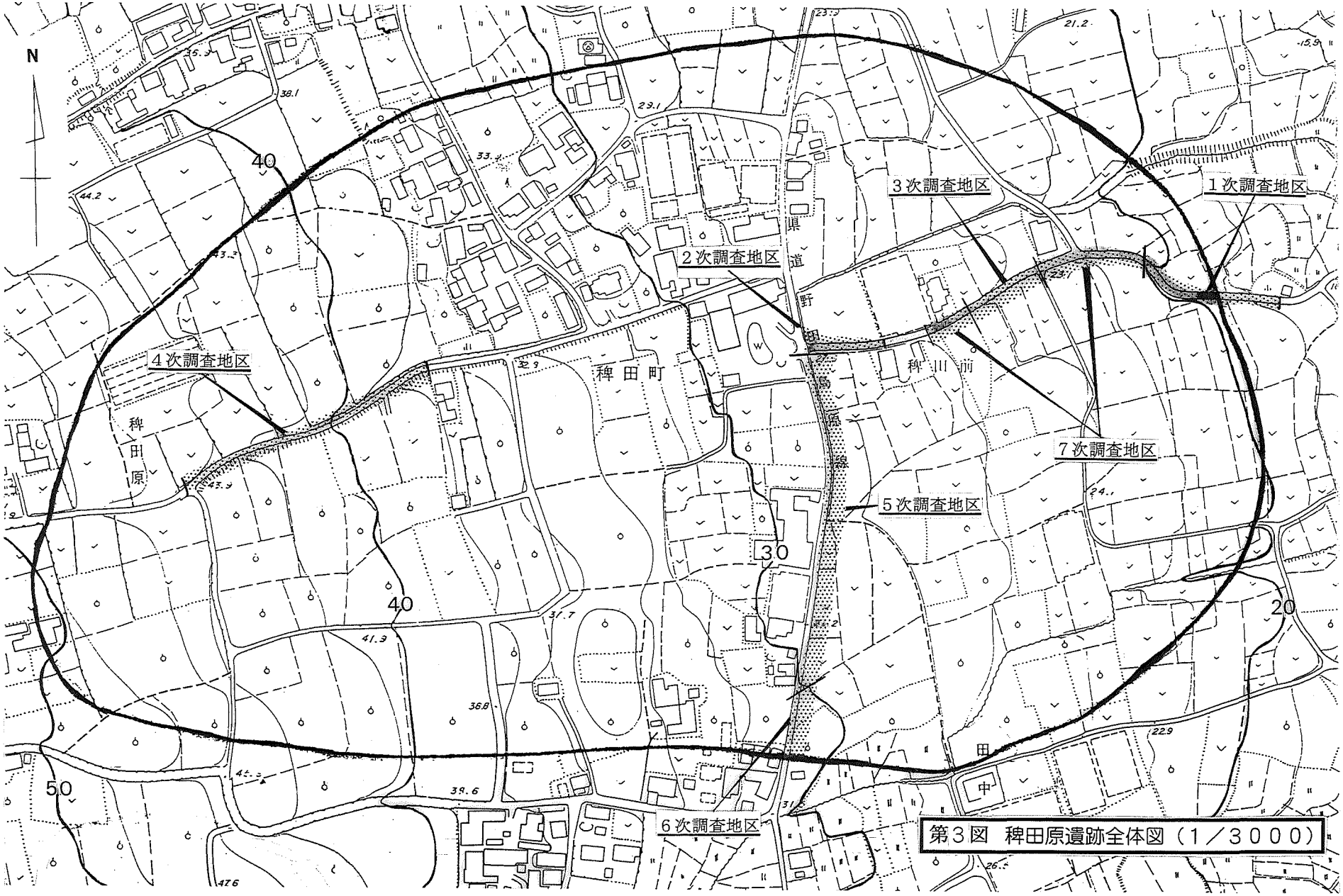
遺構で注目されるのは,1次調査で発見された古墳時代前期の竪穴式住居(第5図)である[註1]。一辺4.3mを測り,床面からは古墳時代前期の標識となる布留式併行の土師器が出土し,島原半島の土師器編年で重要な位置を占める。出土土師器には甕,高坏,小型丸底壺などがあり,一括遺物として良好な資料である。

ほかに火砕流路が確認されているが[註3・4],溝や河川などの窪みに流れ込んだものと思われ,多数発見されている。溝や河川などに角礫を主体とした土砂と同時に古代の土師器・須恵器が流れ込んでおり,火山性地形である島原半島ならではの遺構である。5次調査においては角礫を主体とした土砂の流れ込んだ溝状遺構3条を検出しており,403号河道とされたものは幅約550cm深さ約20～60cmを測り,今回の調査区である北東方向に向って流れ込んでいる。

遺物で注目されるのは,第4図の押型文土器,円筒形条痕文土器などがあり,南九州との広域な交流が行われていたことが想像される。また,中期から後期にかけての坂の下式の特徴をもつ土器も出土している。しかし,最も多く出土しているのは縄文時代晩期の土器である。黒川式並行段階の土器から刻目突帯文土器までを含む包含層(1次・3次)と刻目突帯文土器を含まない包含層(4次)[註2]が確認されている。また,旧石器時代ではナイフ型石器と台形石器が見られる[註3]。(5次)

古代では4次調査において土石流路出土の須恵器に高台内面に段をもつものや輪状つまみをもつ蓋などがみられる。それらは,いわゆる荒尾産[註4]須恵器に多くみられる特徴とされており,対岸との交流が想像される。今回の調査でも同様な特徴をもつ高台付坏などを確認している。

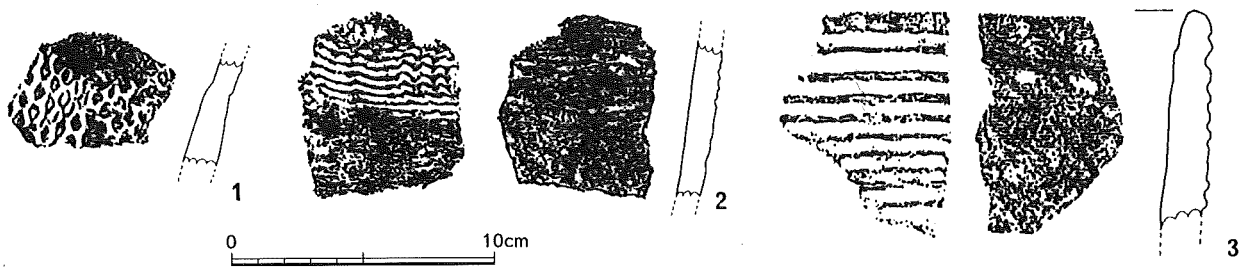
中世貿易陶磁や国内産の広域流通陶器が確認されており[註5],稗田原遺跡周辺は引き続き注目されていたようである。



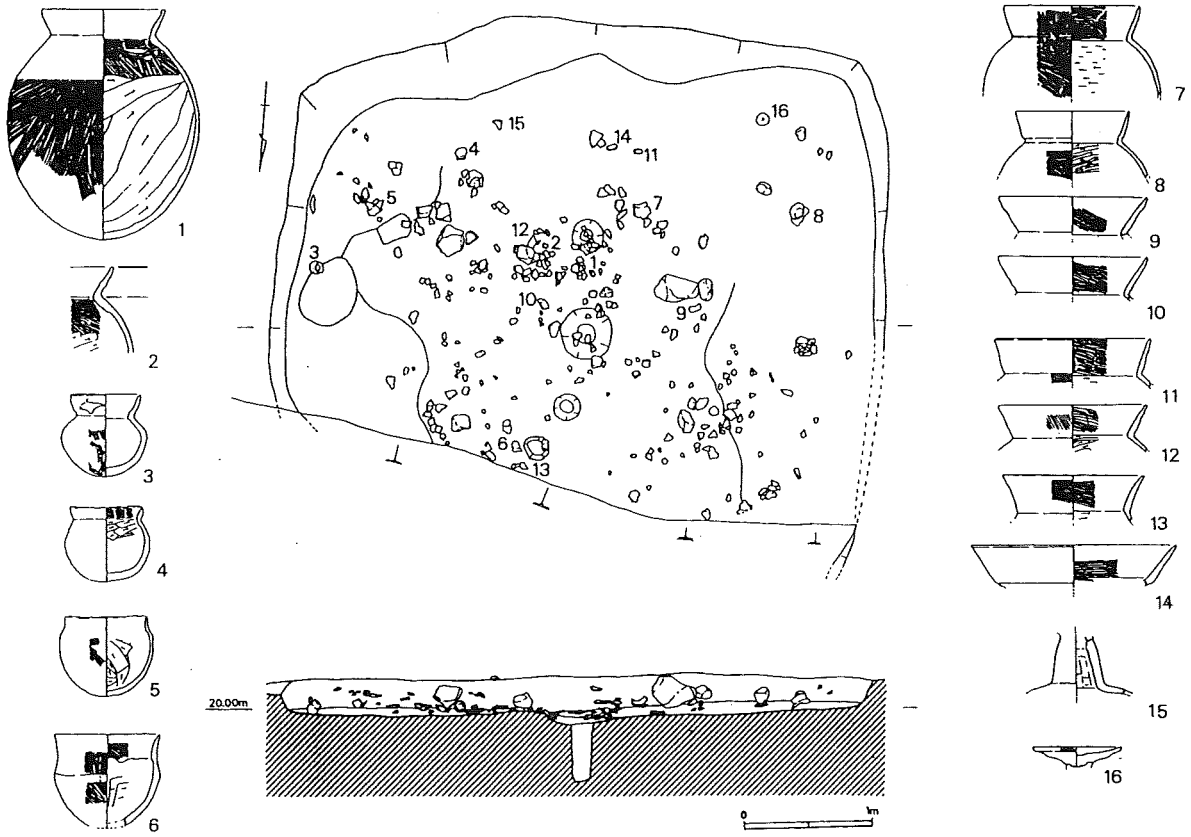
第3図　稗田原遺跡全体図（1／3000）

これまでの調査範囲は遺跡全体の1,7%にすぎないが,旧石器時代から中世まで連綿と生活空間として利用されていたことを想像でき,今後も注目すべき重要な遺跡である。

註1 村川逸朗・古門雅高・福田一志『稗田原遺跡Ⅰ』長崎県教育委員会　1997
2 村川『稗田原遺跡Ⅱ』長崎県教育委員会　1998
3 川口洋平・宇土靖之『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県教育委員会　1999
4 網田龍生「荒尾産須恵器の特徴」第11回九州土器研究会発表資料　1999
5 川口『稗田原遺跡Ⅳ』長崎県教育委員会　2000



第４図　縄文時代早期土器（1～2：『稗田原Ⅰ』より，3：『稗田原Ⅲ』より）



第５図　古墳時代前期住居址と出土遺物　（『稗田原Ⅰ』より）

4,調査の方法と遺構の概略

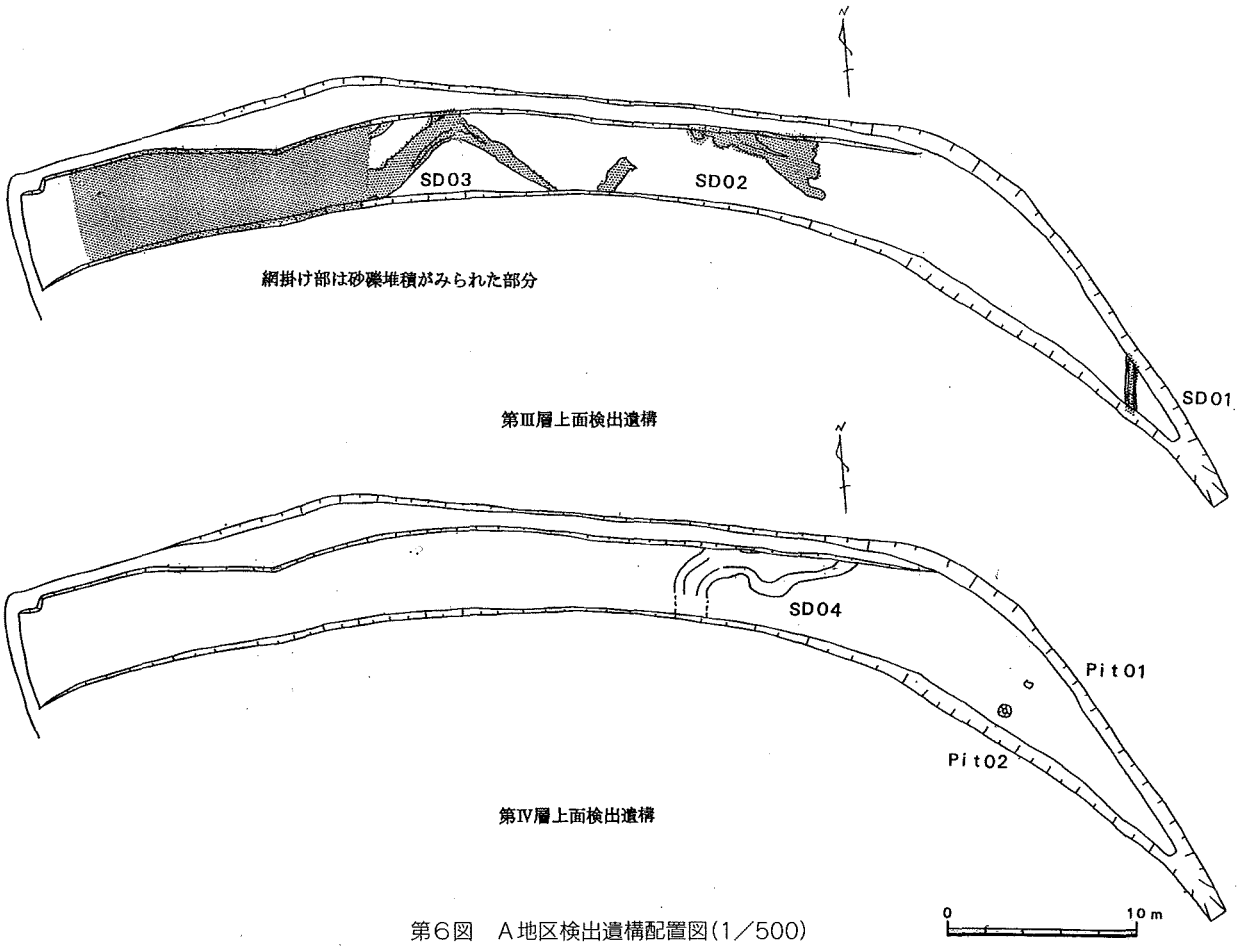
1)調査の方法　(第8図)

今回の調査対象地は３次調査区をはさんで２箇所に分かれている。そのため,東側をＡ地区,西側をＢ地区とし,磁北を基準に任意の５Ｍ方眼を設定した。各調査区は約25㎡の面積をもち,各地区で相互に層位を確認しながら遺構の検出や遺物の検出を行った。

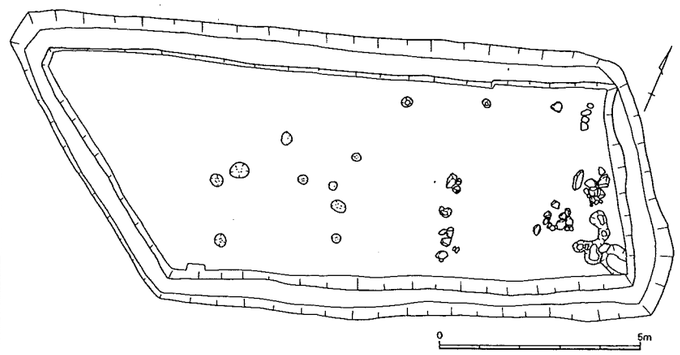
2)検出遺構の概略　(第6図･第7図)

Ａ地区では第1層中ほどから第2層上面にかけて火砕流堆積物などの砂礫土が確認されている。(第6図)とくに１区では1b層中で南北方向の溝１条(SD01),４～８区でも２層中ほどから３層上面にかけて角礫を主体とした砂礫土が堆積した溝状遺構(SD02･SD03)が検出された。覆土には土師器片･須恵器片が多く入り込んでおり,熱により土器表面に砂が密着しているものもみられ,火砕流などによる被熱作用の要因が想定できる。10～12区でも砂礫堆積が確認されたが明確な形状とならず,全体的に南西から北東の方角へ流れ込んでおり幅の広い火砕流もしくは土石流の一端かと思われる。また,この付近では何度も土石流などが発生したようで,2層や3層は削られていた。(図版①６～８)5次調査の様子から今回確認した砂礫堆積も,土石流もしくは火砕流などによる短期的な産物と考えられる。３層中では2～3区にかけてＰｉｔ01･Ｐｉｔ02が検出され,４層上面では4～6区にかけて溝状の窪み(SD04)が検出された。

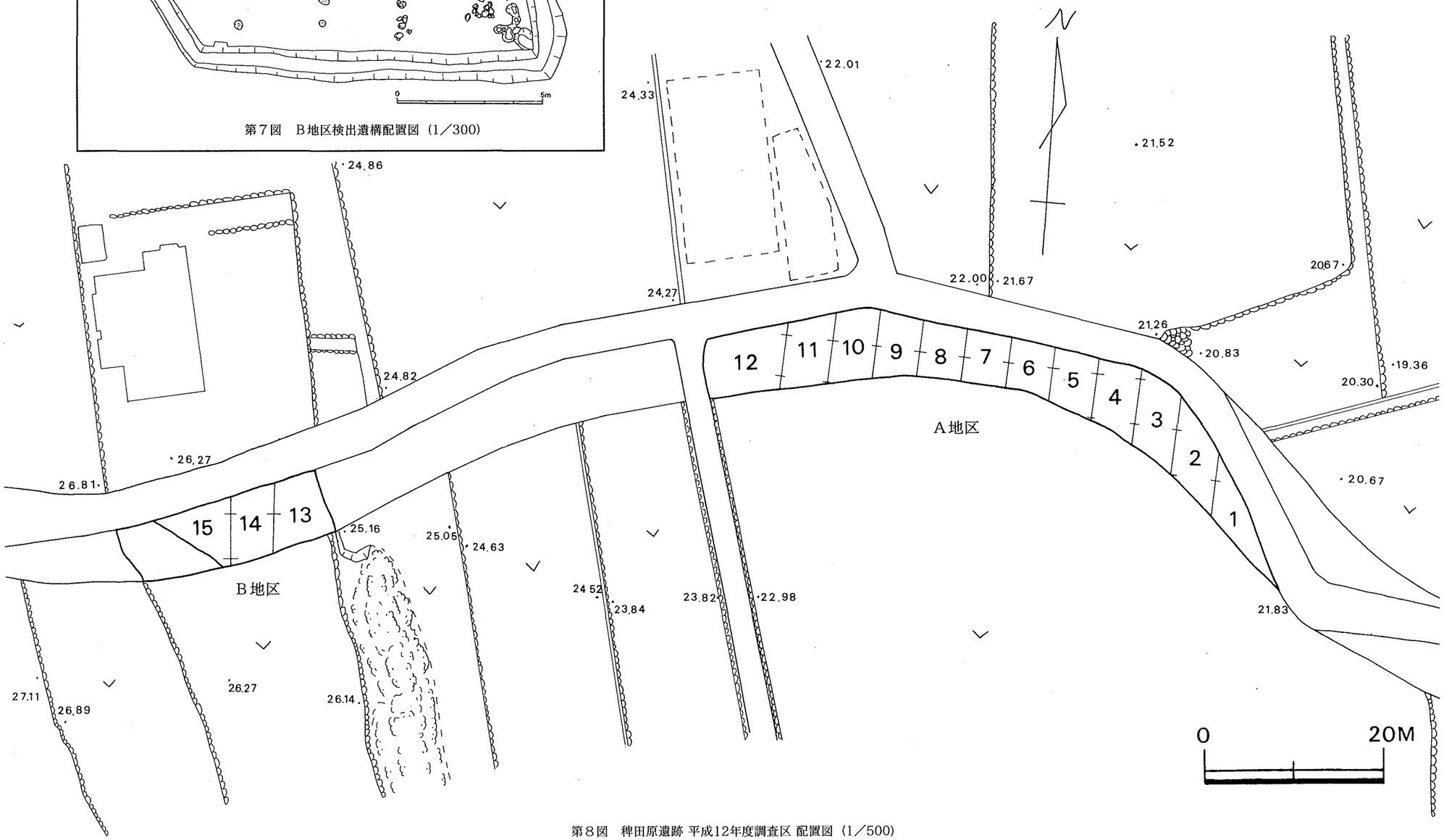
Ｂ地区では２層の一部と３層が土石流や火砕流などで完全に失われていた。(図版③７)２層中から４層まで掘り込まれたＰｉｔ群を検出したが,明確な時期の判断はできなかった。また,掘り方も明確なものではなく,覆土の共通性や配列などの規則性は認められず,出土遺物も見られなかった。



第６図　Ａ地区検出遺構配置図(1／500)



第７図　Ｂ地区検出遺構配置図（1／300）

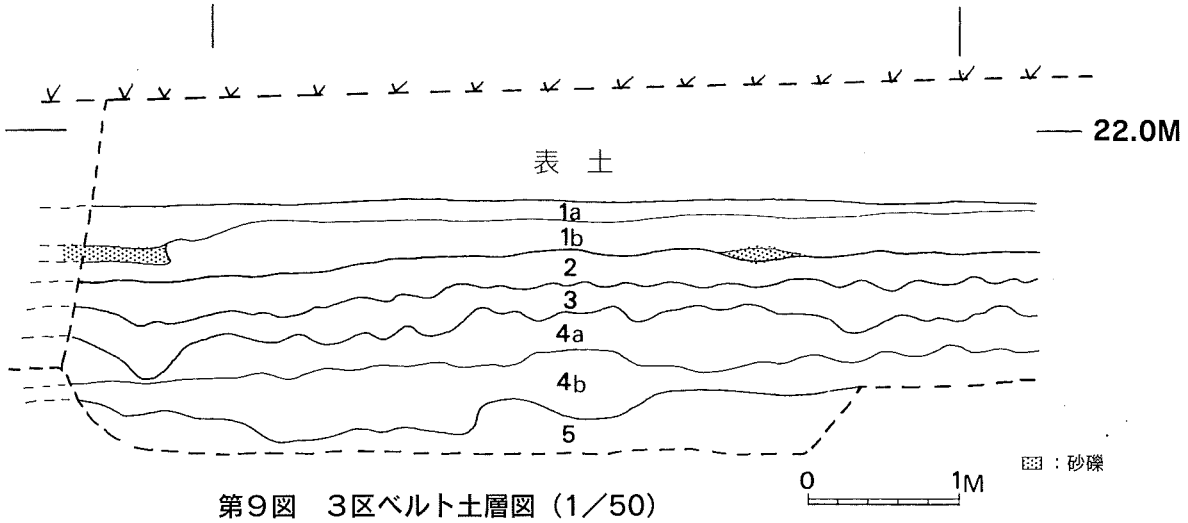


第８図　稗田原遺跡 平成12年度調査区 配置図（1／500）

5,土層観察

1)土層観察　(第9図・第3表・写真図版①)

今回調査した範囲内では以下のように分層でき,出土遺物も層毎に偏りがみられた。



第9図　3区ベルト土層図 (1／50)

1 a:明黒褐色混礫砂質土･･･縄文時代,古代,中世の遺物を含む。

1 b:茶褐色混礫砂質土･････古代の遺物を中心として含む。

2:黒褐色混礫粘質土･････縄文時代,古代の遺物を含む。

3:暗褐色粘質土･････････縄文時代晩期の遺物のみを含む。

4:青灰色砂質土･････････遺物を含まない。(六ツ木火砕流)

5:明茶褐色粘土･････････遺物を含まない。(アカホヤ)

第3表　層位別比較表

	精製晩期		粗製晩期		弥生土器		土師器		須恵器		陶磁器		石器		鉄器
表土	3	1%	0	0%	1	5%	56	13,08%	37	18%	15	38%	6	14%	3
1a層	9	4%	25	5%	5	25%	173	40%	66	32%	17	47%	4	9%	1
1b層	12	5%	4	0,08%	5	25%	42	10%	17	8%	7	17%	2	5%	0
2層	73	35%	127	28,02%	7	35%	158	37%	79	40%	0	0%	6	14%	0
3層	119	55%	299	66,9%	2	10%	1	0,02	4	2%	0	0%	25	58%	0
総数	216		455		20		430		203		39		43		4

1層は古代から中世の遺物が混在しているが古代を中心としたものである。1 b層中の遺物は古代を中心としたものである。2層中の遺物は古墳時代から古代を中心としている。3層については弥生土器・土師器・須恵器が少量混入しているが,縄文時代晩期の純粋な包含層である。

第4表は遺構毎の出土遺物の概数であるが,砂礫堆積とした遺構は2層上面で確認され,中世以前の遺物を含まないことから,古代を中心とした時期に砂礫とともに堆積したものと考えられる。砂礫堆積は円礫を含まない角礫ばかりのもので,土石流や火砕流などのような極端に短い堆積作用によると思われる。古代において幾度か雲仙岳を要因にした土石流や火砕流が想定できる。過去の調査でも同様な砂礫堆積が確認されている。とくに今回の調査で9～11区において確認されたものは帯状に長く検出され,3・4層を浸食して北東に流れ,第5・6次で検出された土石流もしくは火砕流の痕跡に進路が近い。おそらくおなじような進路で幾度か土石流もしくは火砕流が生じていたのであろう。

SDとしたものは４層上面で確認された溝状遺構である。西から南へほぼ90度の角度で曲がっているが,それより南では蛇行しており自然流路である可能性も残る。出土遺物は縄文時代晩期のものに限られ,3層中に縄文時代晩期の生活面が想定できる。

第４表　遺構別比較表

遺構	精製晩期		粗製晩期		弥生土器		土師器		須恵器	陶磁器	石器		鉄器
砂礫堆積	5	4%	13	3%	9	43%	434	100%	42	0	4	5%	0
PIT	0	0%	5	1%	0	0%	0	0%	0	0	0	0%	0
SD	125	96%	403	96%	12	57%	0	0%	0	0	70	95%	0
総数	130		421		21		434		42	0	74		0

２)過去の調査との比較　(第4表･第10図)

今回と同様な土層観察は,過去の調査でも行われているが調査区が広範囲にわたり,また火山性地形特有の火砕流･土石流などの堆積により若干の混乱が生じている。以下に今回調査分を規準とし,過去調査の土層について整理したい。

稗田原遺跡では過去に火山テフラの分析が地学的な見地から分析されている[註1]。その成果によれば,今回調査時に確認した4層が約4000年前の六ツ木火砕流にあたる。六ツ木火砕流はしばしば炭化木片を含むという指摘も今回の調査で3･4区で確認している。また,それを覆う3層は縄文時代晩期の遺物包含層であり,考古学的な年代も合致してくる。この木炭片が多く出土する青灰色砂層が鍵層となる。

今回の調査では4層(六ツ木火砕流)下の明茶褐色粘土層では燈色のアカホヤの細粒が確認された。アカホヤは6700～6300年前と確認されているので,年代的にも層位的にも合致する。

今回調査の土層観察ともっとも近似する調査は平成３年に行われたものである[註1]。上記の六ツ木火砕流を規準として過去の土層観察[註1･2･3]と今回の土層観察とを比較してみよう。

第5表に見るように過去の調査においても土石流の堆積により,縄文時代晩期の遺物包含層や古代の遺物包含層は浸食され失われているケースが多い。このことが各調査において土層観察の混乱を生じた要因であろう。これまで県教育委員会による７回の調査が行われているが,今回がもっとも包含層の保存が良く縄文時代晩期包含層(３層)ならず古代の遺物包含層(２層)も良好であることが確認できる。また,六ツ木火砕流以下の土層については,基本的に混乱はみられない。

問題となるのは,古代から中世･近世･現代までの第２層以上の層位である。各調査地点によって状況が異なり,土石流や火砕流などによる遺跡内での相異がみてとれる。

今回の調査では9区以西で4層以上の2次･3次の堆積が複雑に行われた部分があり(図版①),分層が難しい状況であった。おそらく古代から現代における火砕流などによる短期的な堆積作用の繰り返しと思われた。また,B地区では3層がほとんど見られず1b層の堆積も見られなかった。(図版①)B地区では,1a層と2層の堆積の二時期にわたり火砕流などによる削平作用がはたらいていることを物語っている。A･B地区は50m程しか離れていないのだが,遺跡内でも2層以上は小範囲で複雑な堆積を見せると思われる。

註１ 村川『稗田原遺跡Ⅱ』長崎県教育委員会　1998

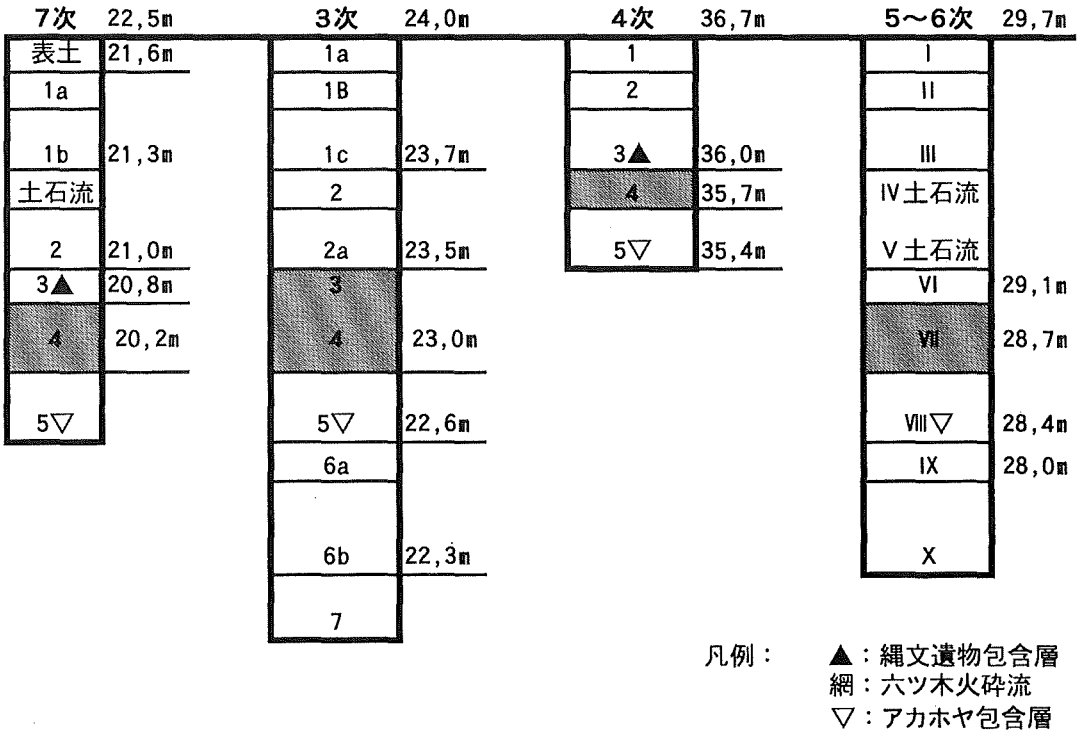
２ 村川逸朗･古門雅高･福田一志『稗田原遺跡Ⅰ』長崎県教育委員会　1997

３ 川口洋平･宇土靖之『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県教育委員会　1999

川口『稗田原遺跡Ⅳ』長崎県教育委員会　2000

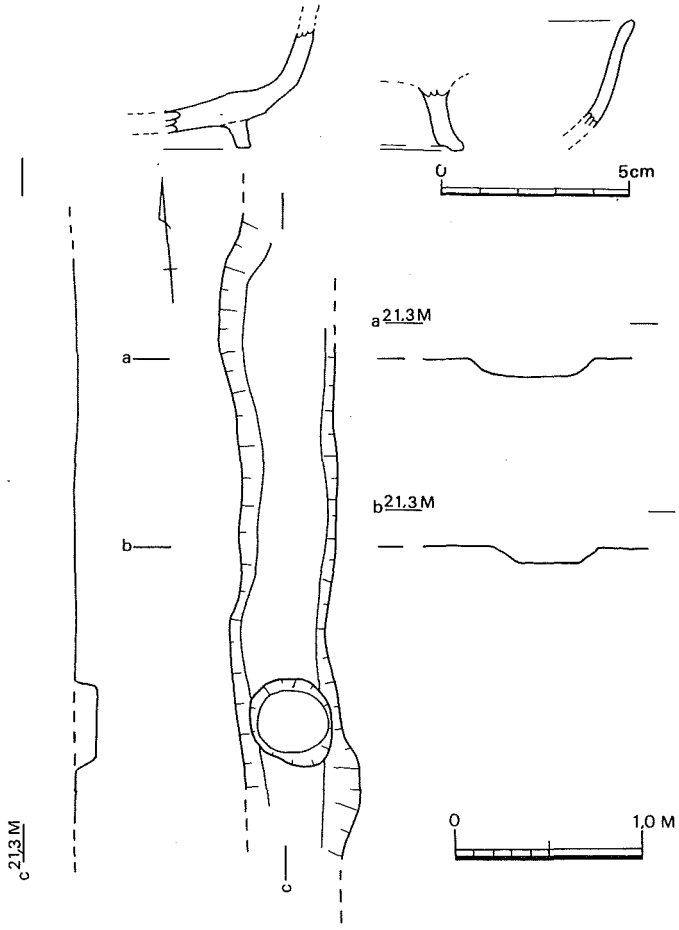
第５表　土層比較表

今回（7次）	3次調査	4次調査	5～6次調査
表土	1a：表土層	1：表土	Ⅰ層　表土
	1b：混礫茶褐色砂質土層		Ⅱ層　耕作土
1a：明茶褐色混礫砂質土層	1c：灰白色砂質土層	土石流・火砕流による浸食	Ⅲ層　客土（a～b極暗褐色砂混シルト質土層　）
1b：茶褐色混礫砂質土層	1d：混礫暗褐色砂質土層		Ⅳ層　整地層
1b下層から2層中にかけて砂礫堆積（火砕流）がみられ、須恵器・土師器が出土	2：灰褐色砂質土層（須恵器・土師器が出土）		Ⅴ層　土石流堆積層
			Ⅵ層　土石流堆積層
2：黒褐色混礫粘質土（縄文時代～古代の遺物包含）	2：黒色砂質土層（古代・縄文晩期の遺物）	2：黒色砂質土層（弥生・古墳時代遺物包含層）	土石流・火砕流による浸食
3：暗褐色粘質土（縄文時代晩期包含層）	縄文晩期の包含層が想定できる	3：暗茶褐色土層（縄文時代晩期包含層）	
六ツ木火砕流			
4：青灰色砂質土	3：灰褐色砂質土層（火山性の砂）4：明白色砂礫層（火砕流堆積物）	4：黄灰色砂層（六ツ木火砕流）	Ⅶ層　六ツ木火砕流堆積層
5：明茶褐色粘土	5：明黄褐色粘質土層＝百花台Ⅱ層縄文早・前期	5：黄褐色粘質土層（アカホヤ）	Ⅷ層　アカホヤ火砕流堆積層
未発掘	6a：淡黄色褐色土層5～6bとの漸移層	未発掘	Ⅸ層　漸移層
	6b：暗黒褐色硬質土層		Ⅹ層　カシノミ層
	7:灰黄褐色土層（白色火山性小礫多い）		



第10図　土層比較柱状図

6,遺構各節



第11図　1区 SDO1（1／40）

1)SD01(第11図)

1区の1b層上面で確認された溝で,検出面で幅62～50cm,深さ約10cm,検出長は約3mを測る。主軸ラインは磁北から東に6度を指向する。断面は逆台形を呈し,底面はほぼ水平(標高約21mライン)となる。底面の幅は45cmから30cmと一定ではないが,検出面での平面プランに従っている。調査区北端で東に屈曲するように平面プラン底面プランともにまがっている。

南端では直径約45cm深さ約10cmの円形のピットがみられ,底面プランも直径約35cmを測る円形である。溝壁面を切っているように検出され,溝に伴うものか溝の機能が停止した後に掘り込まれたものか不明である。溝とピットの覆土は両者とも角礫を主体とした砂礫土であり,内部からは土器片が多数出土しており被熱し砂礫が密着しているものも見られた。このため溝とピットは同時に埋没した可能性が高い。覆土中からは高台付坏や内面黒色土器の破片などが混在しているため,古代でも新しい時期に埋没したものであろう。

2)SD02・SD03(第6図・第12図・図版②)

5区から10区にかけてSD02やSD03などの不整形の溝が複数確認された。そのほとんどが1a層中から1b層中にみられ,一部2層にも掘り込まれている。その状況から1a層や1b層が堆積する間に溝などに複数回の砂礫土の流れ込みがあったと思われる。溝の覆土はいずれも角礫を中心とした砂礫土であり,土師器や須恵器の小片を多数含んでいる。土器には摩滅したものが多く,被熱し砂礫の密着したものがある。

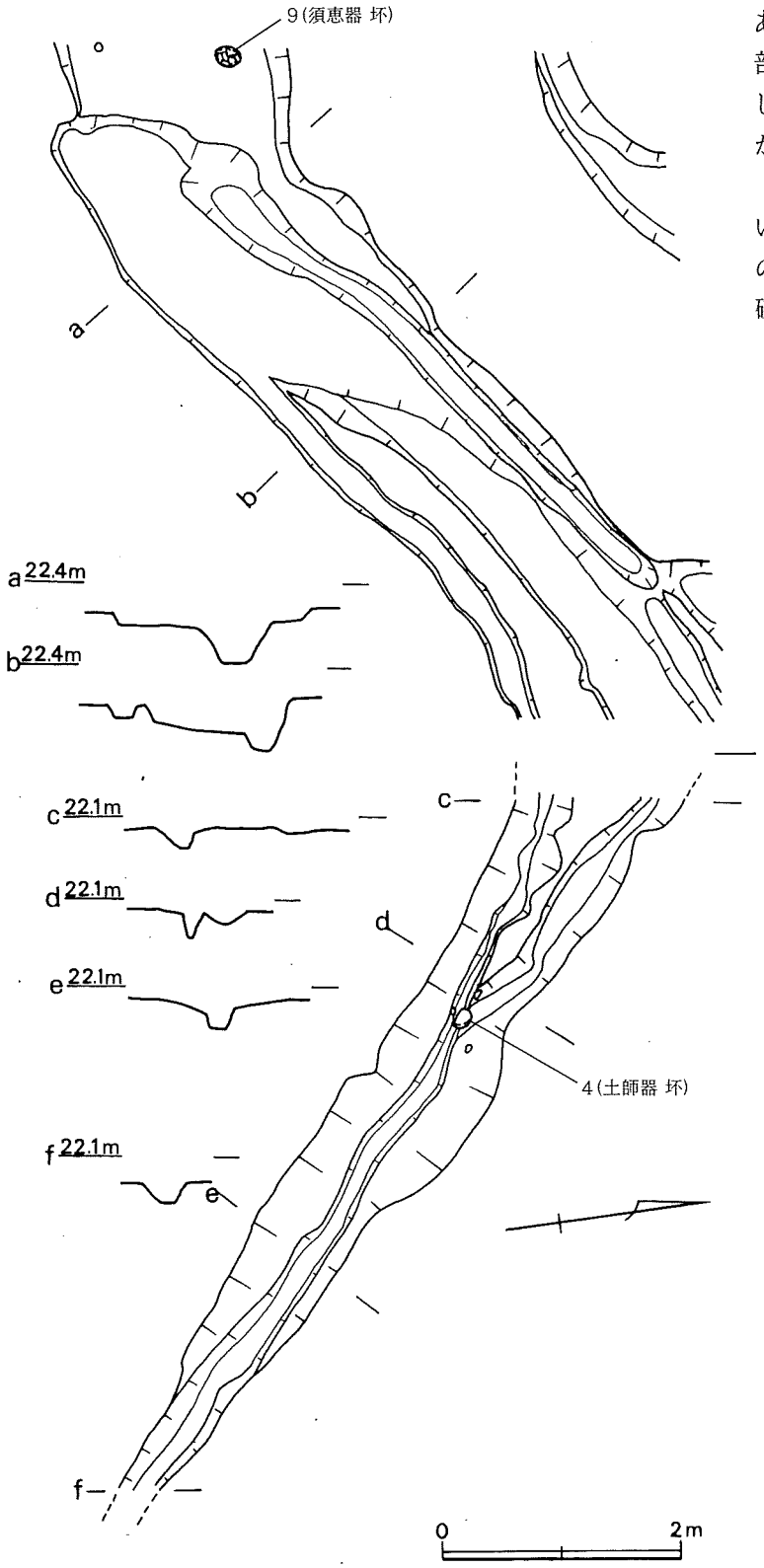
SD02(第6図上)は1a層から1b層中程まで掘り込まれており,検出面では長軸約7,5m幅は2,5～0,5mと一定しない。底面のレベル差は約10cmを測り,東側が徐々に低くなっている。長軸ラインは磁北から西に約60度ふれている。

SD03は7区から9区にかけて確認された溝で,7区の主軸ラインは磁北から東に40～45度ふれており,8区では逆に磁北から西に40～45度ふれている。9区では主軸ラインは再び磁北から東に40～45度ふれている。それぞれの地区で直角に交わるように溝は検出されている。覆土はいずれの地区でも角礫を主体とした砂礫土で,混入する小片はほとんどが摩滅しており,被熱し砂礫土が密着したものがある。

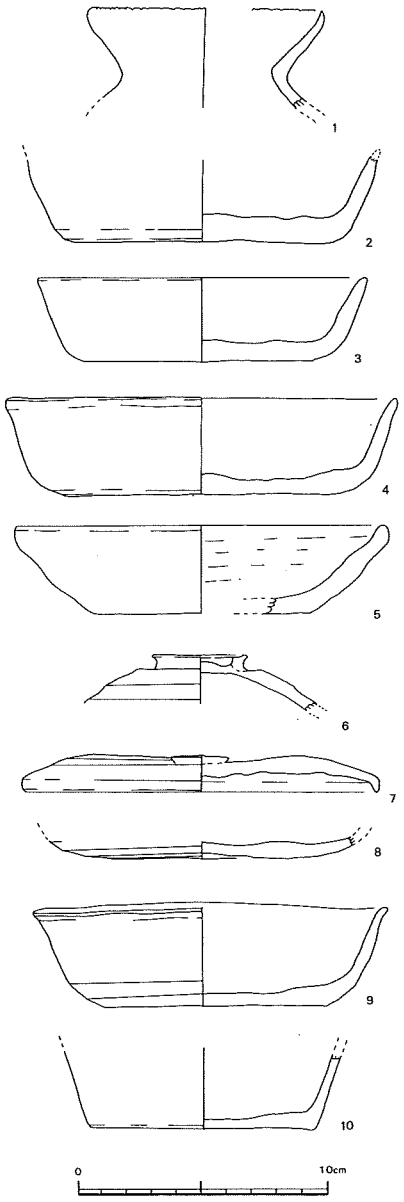
9区での平面プランは幅約1,2m～1,4m,深さは一定せず最深で50cm,最も浅い部分で約10cmを測る。底面レベルで見ると北東の方向に低くなっており,幅も広くなる。その一端が8区の溝に繋がり,他は直進していると思われる。8区溝内西端では完形の須恵器坏(9)が底を上にして出土している。 (↗15P右上へ)

8区での平面プランは幅約90cm～25cmを測り,9区との境では二股であるが,約1,7m南で合流する。合流部分では土師器坏(4)が底部を上にして出土し,周辺では土師器の小片が散在している。

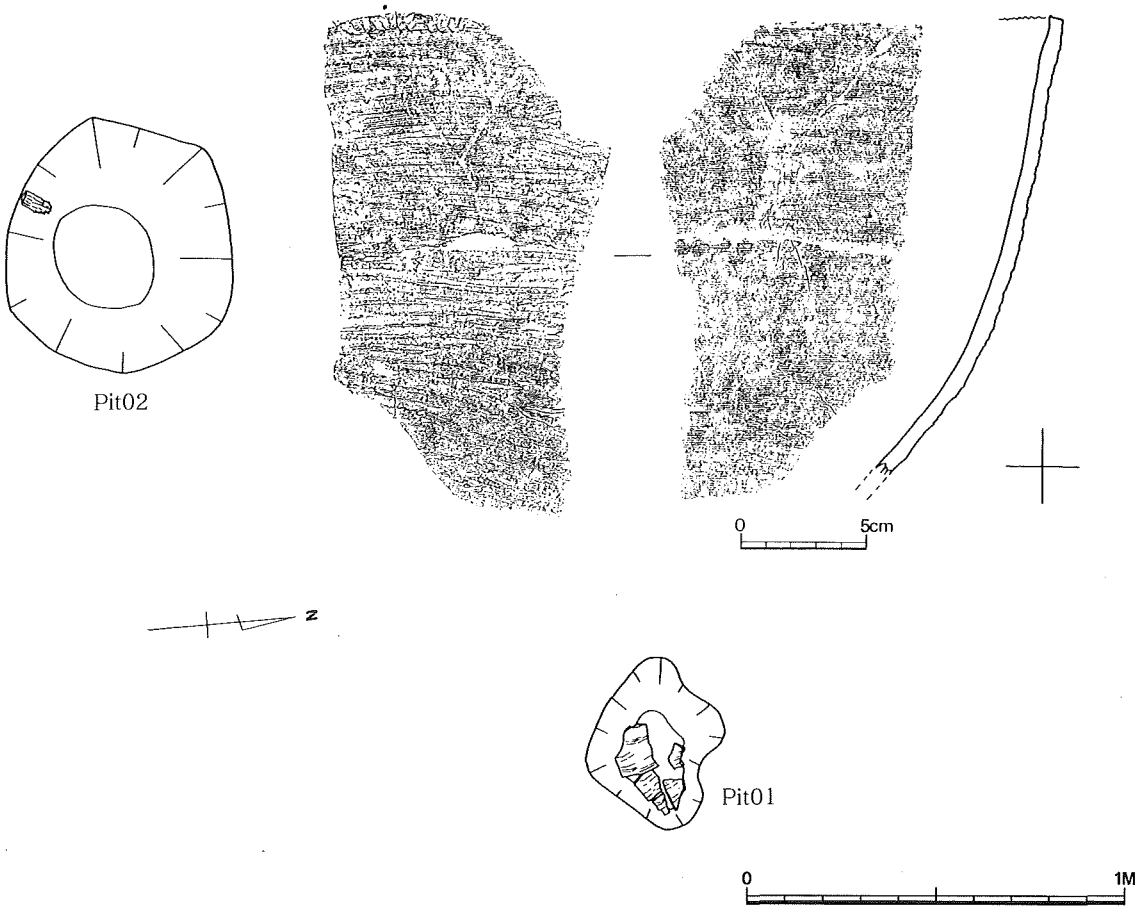
全体的な平面プランの把握が難しいが,溝を主とした遺構が存在し,その中に火砕流堆積物と考えられる砂礫土が流れ込んだ状況である。



第12図　8～9区 SDO3



第12図　出土遺物 (1／3)



第13図　2区 Pit01,3区 Pit02

1～10は覆土内出土の土師器・須恵器であるが,完形品は9で,他は50%以上の残存率を示している。1の壺の口縁部片は摩滅しているが他の土師器・須恵器は摩滅が少ない。このことから溝の埋没時期は,これらの摩滅が少ない土器の示す時期にあるものと思われる。

3)Ｐｉｔ01・Ｐｉｔ02　(第13図・図版③)

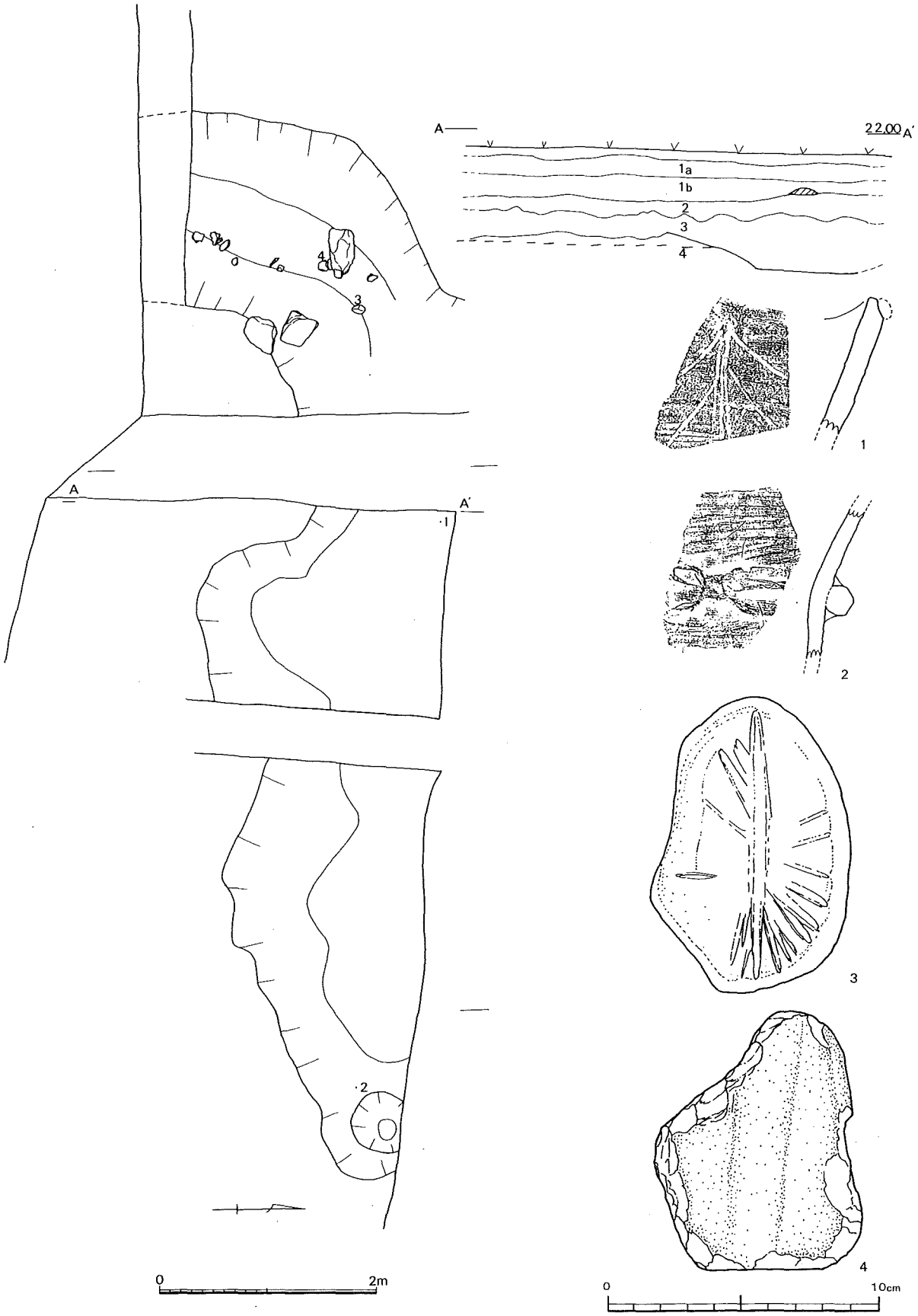
Pit01は１区西隅で３層まで掘り込まれており,長軸45cm短軸35cmの不整形を呈する。覆土には砂礫土がぎっしり詰まっており,底面で縄文晩期土器片が出土した。深さは約10cmで,土器片は接合できるが完形とならず,うち離れてあった一片は部分的に摩滅している。(図版③) 土器片を埋める何らかの行為が想定できる。覆土中には土師器小片が含まれていたが,時期を決定できるものはみられない。

Pit02は直径約65cmを測る円形プランを呈し,すり鉢状に狭くなり底面プランでは直径約25cmほどを測り,覆土には2層と同色の黒褐色土が充填しており,炭化物と土師器小片2点,黒曜石片1点を含んでいた。2層を中心とする時期に掘り込まれたと思われる。

4)SD04　(第14図・写真図版③)

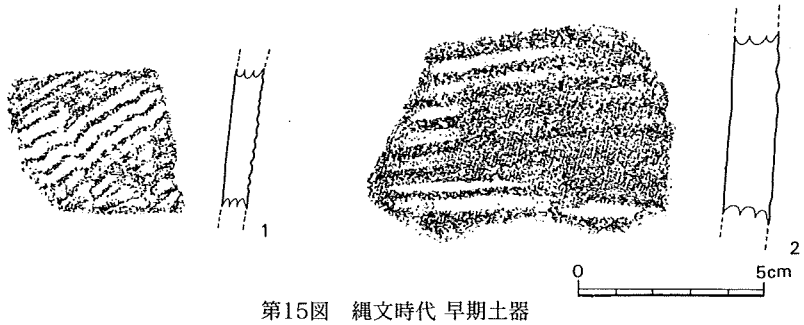
４～６区で4層に掘り込まれた溝状遺構である。6区では南から東にほぼ直角に曲がるプランを呈するが,5区以東では不明瞭である。北側半分が調査区外にあたるために,最終的にどのような平面プランとなるかは不明である。検出長は東西約9,63m幅約1,75m6区での幅平均約1,9m深さ約40cmを測る。覆土は3層を主体とし縄文時代晩期土器片や石器を含み,底面直上では土器片(1·2)や石器(3·4)がある。

また,４区SD底面で検出された炭化木材の放射性炭素推定年代は六ツ木火砕流である４層の年代に近く,六ツ木火砕流によく含まれるという炭化木材と考えられる。



第14図　4・5・6区 SDO4

7,遺物各節



第15図　縄文時代 早期土器

1)縄文土器　(第15図)

縄文時代早期土器で,1は細めの条痕文,2は太めの条痕文をそれぞれ表面に施している。1の条痕文は一つの単位縦約0.4cm横約1.8cmを測る波状で,斜位に施されている。器厚は約1,2cmを測る。2の条痕は1cm当たり3～4本,1本の幅は約3～4mm,8本が確認でき,器厚は約0,8mmである。両者ともに摩滅が激しく,2は11区1層,1は10区3層の出土である。

第16図～第23図は縄文時代晩期後半の土器片であり,口縁部片,胴部片,底部片,リボンなどの装飾の付いた土器片,内外面とも丁寧に研磨される精製土器片などに分けられる。

第16図(3･5:SD04,4:Ｐｉｔ01,6･7･8:3～4区3層)

第16図には大形の土器片を図示した。3～5は直立する口縁部をもつ粗製深鉢で,3は波状口縁だが,他は水平な口縁部を呈する。4はPit01出土で,深さ17,5cmを測り,底部にかけ緩やかに湾曲している。6は表面を刷毛状工具で調整した後,横位の沈線を約2,5cm間隔で施している。7･8は浅めの深鉢で,7の口縁部は玉縁状で,水平な口縁形態である。8は口唇部外面が薄くつくられ,緩い波状を呈する。

第17図(10～21:2～5区3層)

口唇部が薄く作られるタイプで,器厚は10で口唇部約0,3cm,口縁部下部で約0,8cmを測る。いずれも直立に近い口縁部で,水平な単純口縁である。胴部から直にゆるく外反するものが多いが,11と12はやや丸く内傾する。18には口唇部下約2,1cmに直径約7mmの丸く浅い凹みが内面に見られる。

表面の調整は刷毛状工具で横位に細い条線が施されており,内面は条線を施した後に丁寧になで,滑らかに仕上げている。しかし,18の外面は横位に削られており,口唇部には削りが見られずなでにより調整される。内面の調整には条線が残るものもあり,9では横位の条線が口縁部にみられ,18では部分的に条線をなで消している。色調は内外面とも暗赤褐色を基本とし,18のみが明赤褐色である。胎土は雲母粒･石英粒などを含んでいる。

22･23は胴部の屈曲部片であり,屈曲部分を境に表面調整が変化している。特に22は明瞭で段を境に上に横位の荒い条線が,下になでが施されている。22は2区3層,23はSD04覆土出土である。

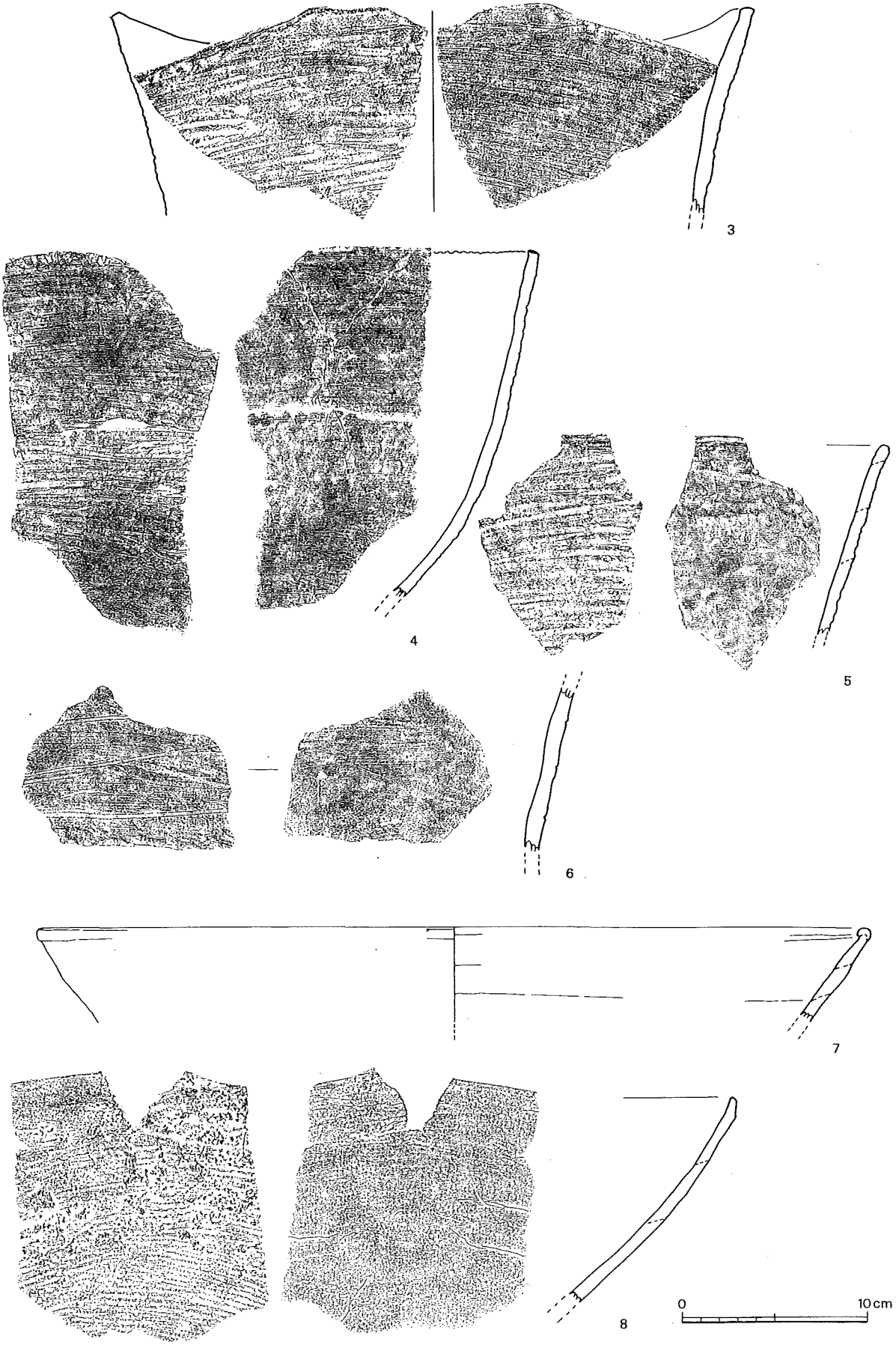
第18図(29･33･36･39:SD04,他:2～5区3層)

第18図は24～31･34･37は口縁部断面が方形になるものである。器厚は27で口唇部で約0,5cm,口縁部で約0,7cmを測る。いずれも直に外反する口縁形態で,29のみ口唇部がやや外反する。口縁部は水平に造られ,波状口縁となるものは見られない。

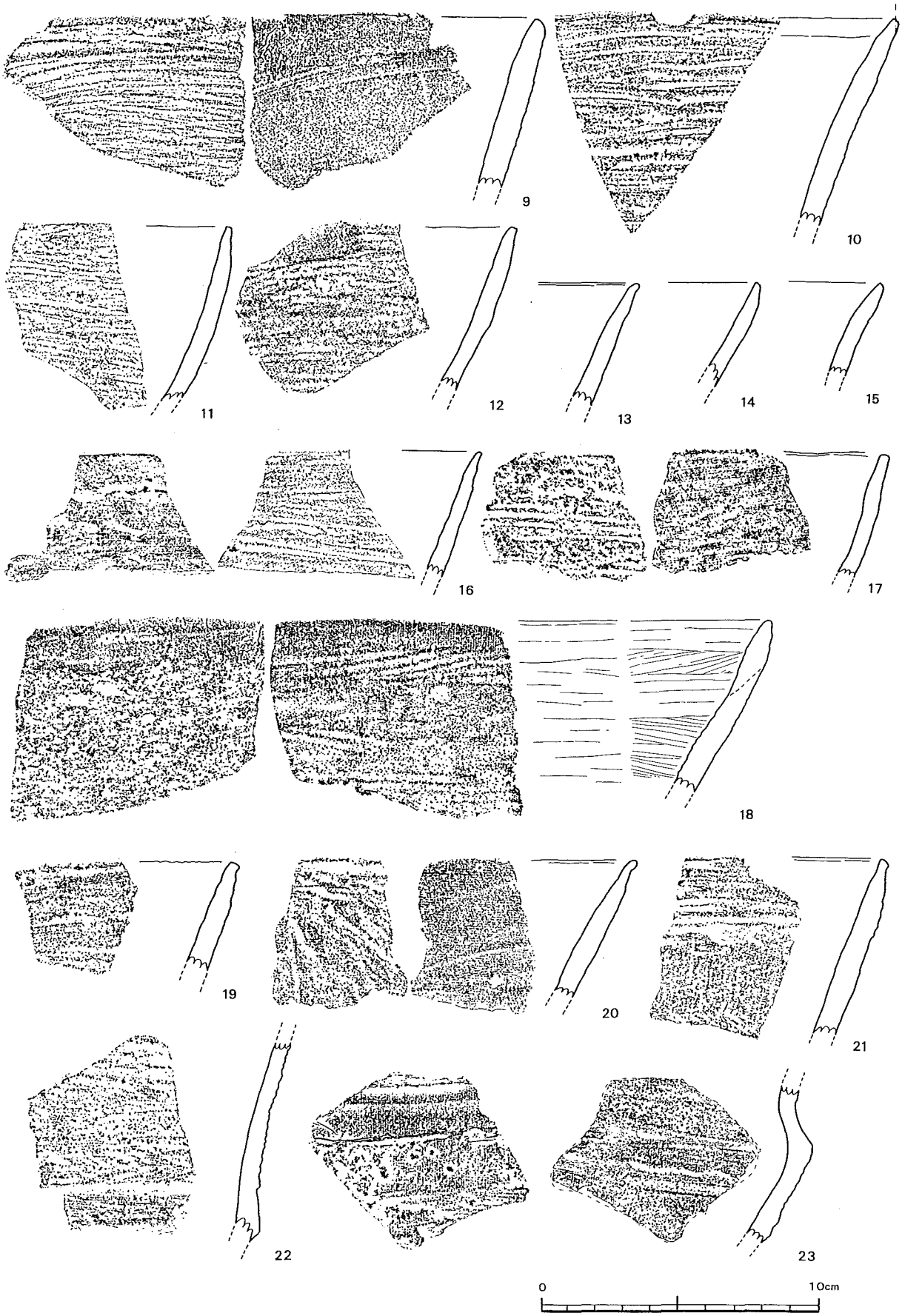
外面の調整には横位の条線がみられるが,28や34には斜方向の条線がみられる。30は粘土紐の接合痕が口唇部下に横位の沈線となってみられる。内面の調整には条線がみられないもの(24･27･29･～31･34)と,みられるものとがある。30は特に丁寧になでられ,28では斜方向に荒い条線がみられる。

37は内外面ともに条線がみられない口縁部片で,口縁部下約4,5cmに直径約1,4cmの補修孔が穿たれている。内外面両方から穿っているが,かみ合わず外面からのみの穿孔となっている。

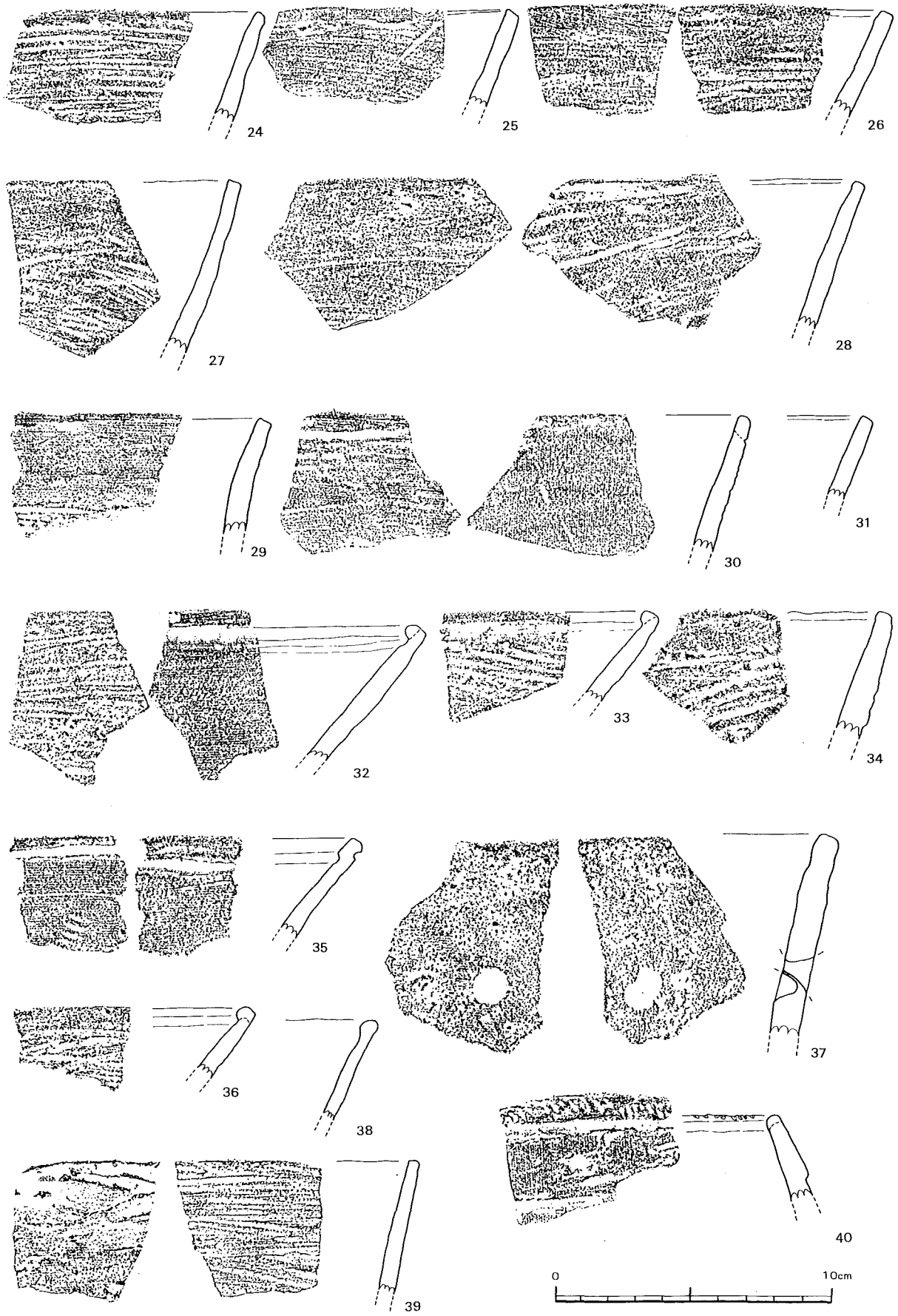
色調は24～26･30が暗赤褐色を呈し,27～29･31･34･37は暗褐色である。胎土には雲母粒,石英粒がみられる。



第16図　縄文時代 晩期土器①（1／3）



第17図　縄文時代 晩期土器②



第18図　縄文時代 晩期土器③

32·33·35·36は玉縁状の口縁部をもち,大きく外反し,浅めの深鉢と思われ,口縁部に最大径があるものと思われる。玉縁には,口縁部内面に粘土紐を巻きつけ玉縁にしたもの(32·33·36)と,内外面に凹線を施し玉縁に似せたもの(35)とある。外面調整は条線が施されるが,35の外面には一切条線がみられず,工具の触ったと思われる短い刷毛状の痕跡がのこる。内面の調整には丁寧ななでが施されたものと思われ,内面は精製土器のように滑らかである。色調は32以外は暗赤褐色を基本とし,32は比較的明るい赤褐色である。胎土は雲母粒·石英粒を含む。

38·39は極端に薄い口縁部片であり,38で約0,5cm,39で約0,6cmの厚さを測る。38は内外面ともにナデが施されているが,39は外面に荒いなでがみられ,内面に横位の条線が施されている。色調は内外面ともに明褐色を呈し,焼成が良くやや硬質である。40は内傾する口縁部片で,口唇上面に約1,5cm幅の刷毛状の工具で刻みが施されている。また,口縁部下約2,5cmに段をつくり,それを境に器厚が増している。色調は外面が褐色を呈し,内面は黒褐色であり,胎土に雲母粒·石英粒を含む。

第19図(45:SD04底面直上,41:51区砂礫土中,43·47:1～2区3層,他:44～46区3層)

第19図は横位の沈線や凹線の施された口縁部片である。44は若干上に盛り上がる横位の沈線をもち,口縁部下約1,2cmから施されている。間隔は約0,8cmを測り,5本が確認できる。口縁部にかけて,若干薄く造られており口縁部で約0,6cm口唇部で約0,4cmの厚さである。

45·46は口縁部下約1,2cmの点から下方向と斜め下方向に沈線を施しており特徴的である。45では下方向に3本,その左右の斜め下2方向に1本ずつ沈線がみられ,その中心には直径約1,0cmの丸い粘土板を張りつけていた痕跡がみられる。また,口縁部下約4,5cmから横位の条線が施されている。沈線のはじまる点を最大高として山形口縁の形態をとる深鉢である。46は1点から斜め下4方向に沈線がみられる。口唇部を欠いており口縁部の形態は不明である。おなじく山形口縁の形態をとると思われる。

47は口縁部内外面に凹線を施し,玉縁口縁に似せている。外面には口縁部下約2,1cmから沈線がみられ2本が確認でき,幅は約1,8cmを測る。48·49は下に盛り上がりをもつ横位の沈線をもつ口縁部片である。48は口縁部にかけて薄くなり,49は断面方形に近く厚みは変化していない。沈線は48では口縁部下約2,4cmから,49では約2,6cmから施される。48ではその間隔が大約2,0cmを測るが,左方向にすぼまる傾向にあり,文様的には45や46の続きであると思われる。

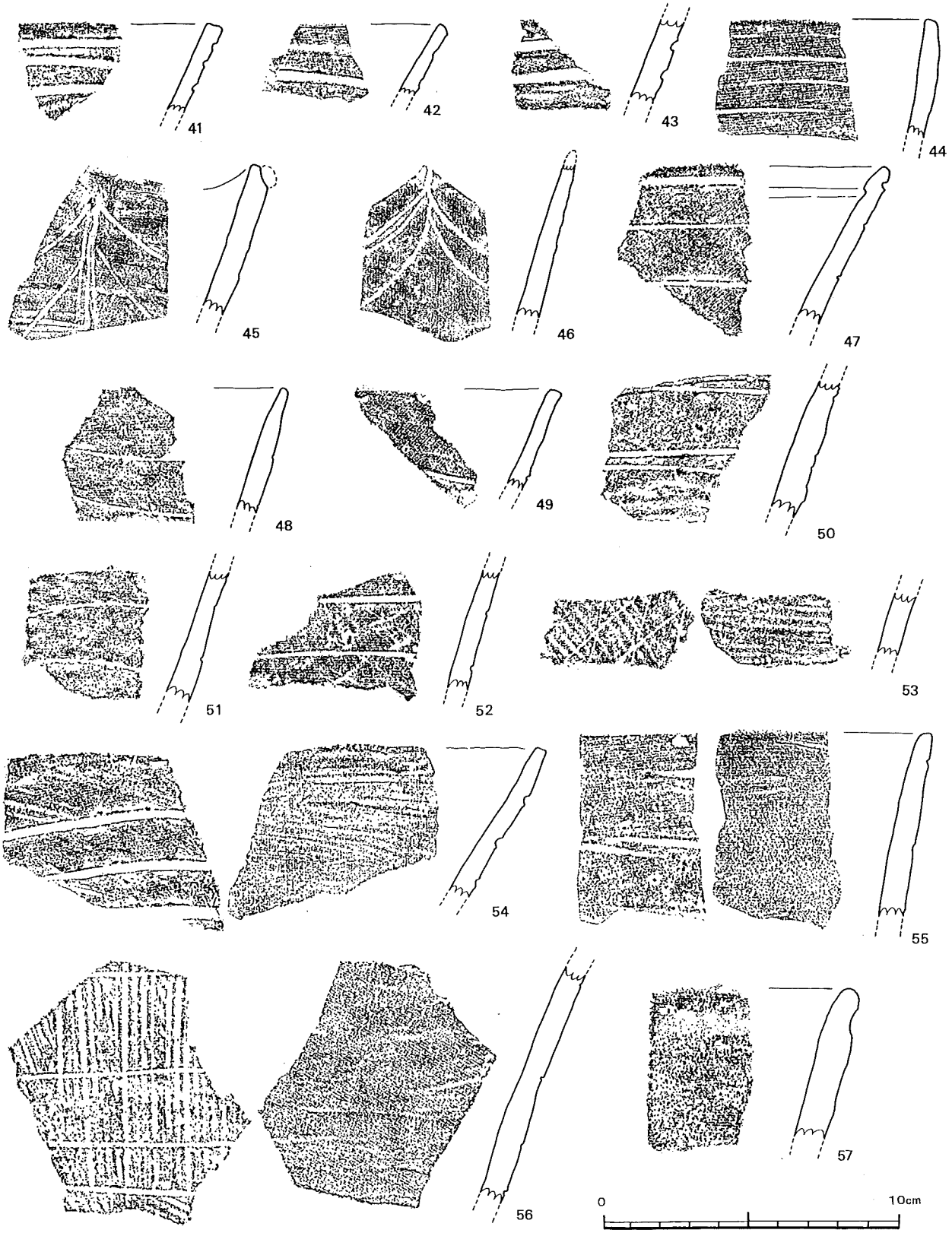
50～52·54は上に盛り上がりをもつ横位の沈線がみられる口縁部片である。間隔は50が約2.0cm,51が約2.0cm,52が約1.7cmを測る。54は口縁部下約2.0cmに右上がりの沈線が3本確認できる。斜位の条線を施した上から,幅約1.5cm深さ約1.5㎜の凹線を施しており,内面には横位の条線がみられる。

53は外面に斜位の条線を施した後から,斜位の沈線が交わって施され,その間隔は約1,2～1,5cmを測る。ちょうど長軸約3,5cm短軸約1,3cmの菱形ができる。内面には横位の条線がみられる。55はほぼ直立する口縁部片で,口縁部下約3,5cmから3本のみじかい沈線がみられる。間隔は約2,2cmを測るが,一番上の沈線は途切れている。内面は丁寧になでられる。56は縦位の条線の上から,破片の中央以下に偏って横位の沈線が3本確認できる。内面は横位の幅広のなでが施されており,丁寧に仕上げられている。57は口縁部下約0,7cmに幅約0,8cmを測る横位の凹線がみられる。指などで施しており,稜線は明瞭ではない。

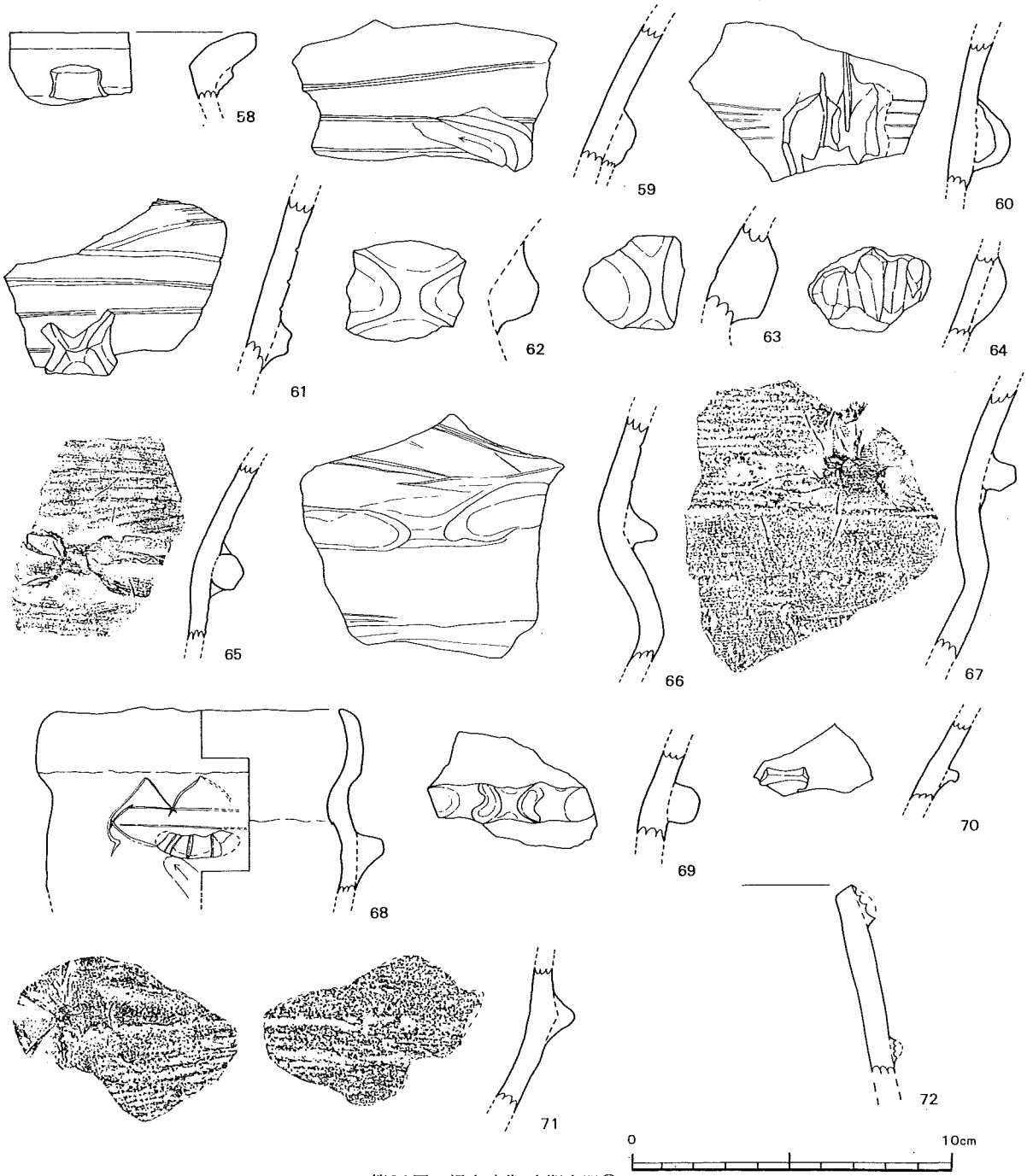
41～43は口縁部に横位の凹線を施しており,畑中遺跡などでみる晩期前半の特徴を残している。しかし,畑中出土例とは違い,極端な波状口縁とならず,タガ状の口縁形態もとらず,薄い器壁で直立する口縁形態を呈する。また41は11区砂礫土中の出土であるので,2次堆積に伴う遺物である。数的にも横位の沈線を施す土器片は図示した以外にも多数あるが,凹線を施すのはこの3例のみである。

第20図(65:SDO4底面,78:SD04,59～64·67～69:3～5区3層,66·72:1a層,58:表土)

57は口縁部近くに横約1,8cm縦約1,1cmのリボン状装飾を貼り付ける。口縁部近くで「く」の字に外反し,その屈曲部分に貼付する。59は右から左に粘土塊を押しつける鰭状装飾である。胴部近くに沈線が施された後に貼りつけている。



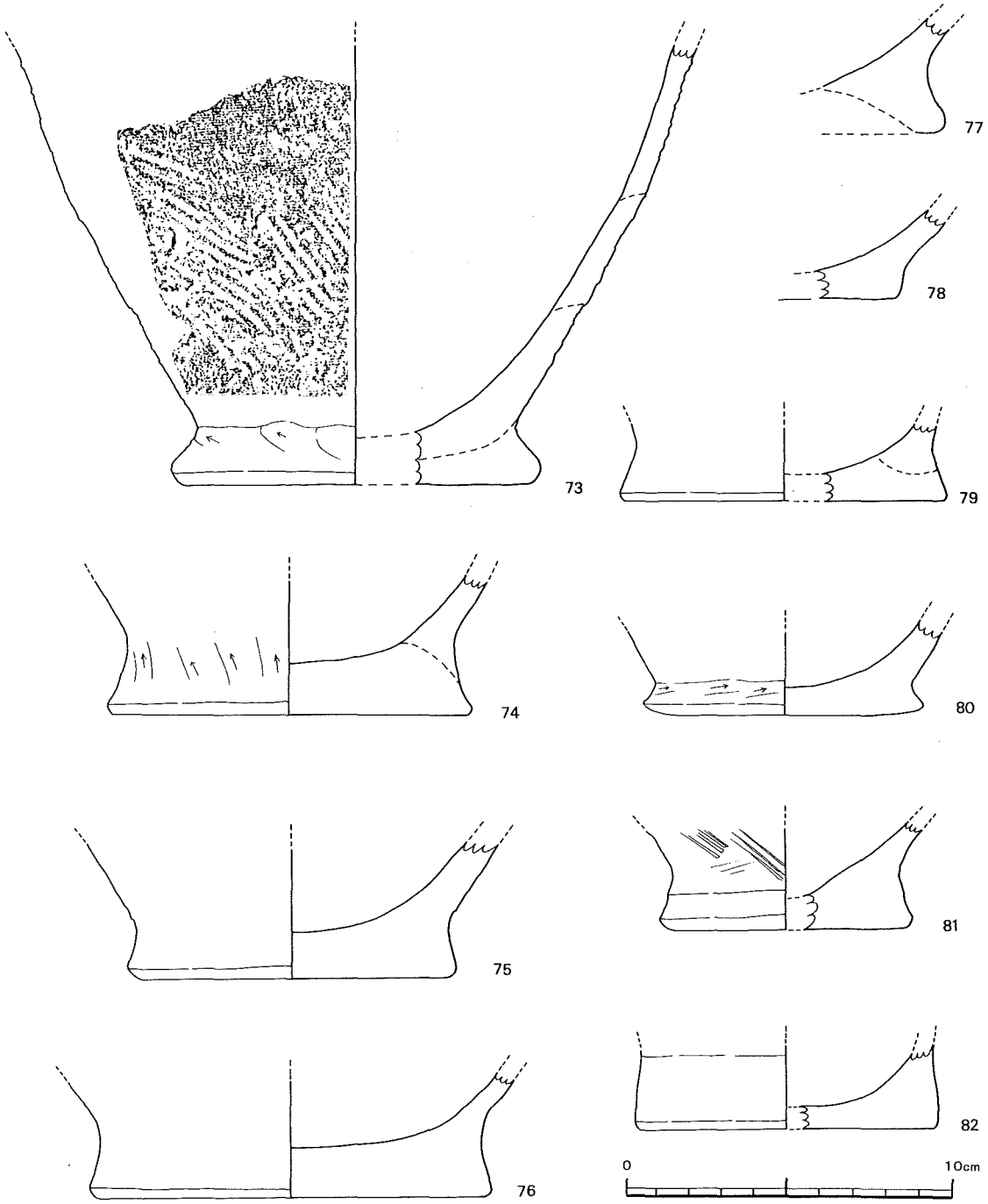
第19図　縄文時代 晩期土器④



第20図　縄文時代 晩期土器⑤

60·64は3枚の粘土板を器壁に対して垂直に,横位の沈線が施された上に貼りつけ,その中心は沈線の中心を通る。64の突起は60に比べ小さく丸く,中央が大きく両端は小さい。61～63·65～67はリボン状の装飾で,ともに屈曲部に取り付けている。61は横位の沈線が施された後に取り付けられ,装飾の中心は沈線上にある。粘土塊を両端に引っ張り中央を残しリボン状とする。67では単に横長の突起となる。

68は小型土器の口縁部から胴部にかけての復元実測である。口縁部の直径は復元で約10.5cmを測り,口縁部は端部で内傾し口縁部下でくびれ,胴部にかけて膨らむ形態をとる。胴部の膨らみには沈線による蓮葉状文様2つと横位の沈線が施され,上に横長の突起を貼りつけ,縦方向に3つの沈線を施し装飾とする。沈線で描かれた蓮葉状の文様の先端部分と突起の中心線はほぼ一致し,沈線と突起とで一つの装飾を表現する。



第21図　縄文時代 晩期土器⑥

69は器厚が変わる部分に横長の突起を貼りつけ,表面に縦方向の凹みをつくり装飾としている。70は両端がやや大きくなる横長の突起を胴部に貼りつけたもっとも小さい装飾である。71は条線の施された胴部に断面三角形の突起を貼りつける。胴部の内傾する部分に貼りつけ,他の装飾と違い単純な装飾である。

以上の装飾に共通する点は,①胴部の屈曲部や内傾する部分などの変換点に取り付けている,②沈線などの上に貼りつけられ,60や61そして68にみるように沈線と一体となり一つの装飾となる。また,65や67のように条線や沈線などがとぎれる部分との境目に貼りつけられる場合がみられる。

装飾は58や65にみるリボン状のもの(A),60や64のようなもの(B),68や69のような横長のもの(C),そして59や71のように不整形のもの(D)の四種がある。

72は口縁直下に刻目のある突帯を,口縁下約5cmに幅約1,0cmの突帯をもつ刻目突帯文土器であり,口縁部は直に内傾する。

第21図(73・78～82:3区3層,74:2区2層,75:5区2層,75:11区砂礫土,76:6区2層)

73のみが底部から胴部まで接合でき,他は底部片のみである。73は底径約11.3cmを測り胴部にかけて緩やかに立ち上がり胴部は残存部分で復元径約21cmを測る。底部は丸い粘土板二枚でできておりそれに粘土紐を巻き付けている。底部は一度くびれてそれから開いており,くびれ部分と粘土板の接合部分はほぼ一致する。外面は全体的に条線が荒く施されているが,底部ではなでにより丁寧に調整され,底面もなでによるなめらかな仕上げとなる。上げ底となるものは見られず,ほとんどが平底である。78や72などはくびれを見せず胴部にいたっており,調整も丁寧でとくに82では外面が丁寧に横位になでられている。

第22図(83～85・89・96・99・102:SD04,86～88・92～94,97:4区3層,91・98・104:5区3層,90・95・105:3区3層,101:2区2層,103:6区3層)

83・84は精製深鉢であり,胴部から口縁部までおよそ7cmを測り,胴部以下は失われているが緩く内傾している。84ではその様子がよくわかり,最大径は口縁部にあるものと思われ,83では復元径で約34,7cmを測る。85は精製浅鉢であり,玉縁状の太い口縁部をしている。口縁部径は約35cm,頸部では口縁部下約1,3cmで急激にくびれ径約31,8cmを測り,ふたたび胴部にかけ膨らみ,胴部に最大径があるものと思われる。86も同じ精製浅鉢で直径が約27,2cmを測り,頸部で急激にくびれ,胴部は再び膨らむ。口縁部が85よりも大きく,玉縁でも長楕円形の玉縁形態をとる。87～93は精製浅鉢の玉縁口縁である。87は最もしっかりした玉縁をもち,93のように口縁部内外面に溝をめぐらし,玉縁状にみせるものもみられる。また,90～91にみるように内面にのみ段をもつものもある。94～100は口縁部から胴部にかけて残りの良いものを取り上げた。94・95のように胴部が緩く広がるものと,97や98のように胴部が水平にのひろがるものとが見られる。99は胴部片であるが,約1,0cmの厚さである。

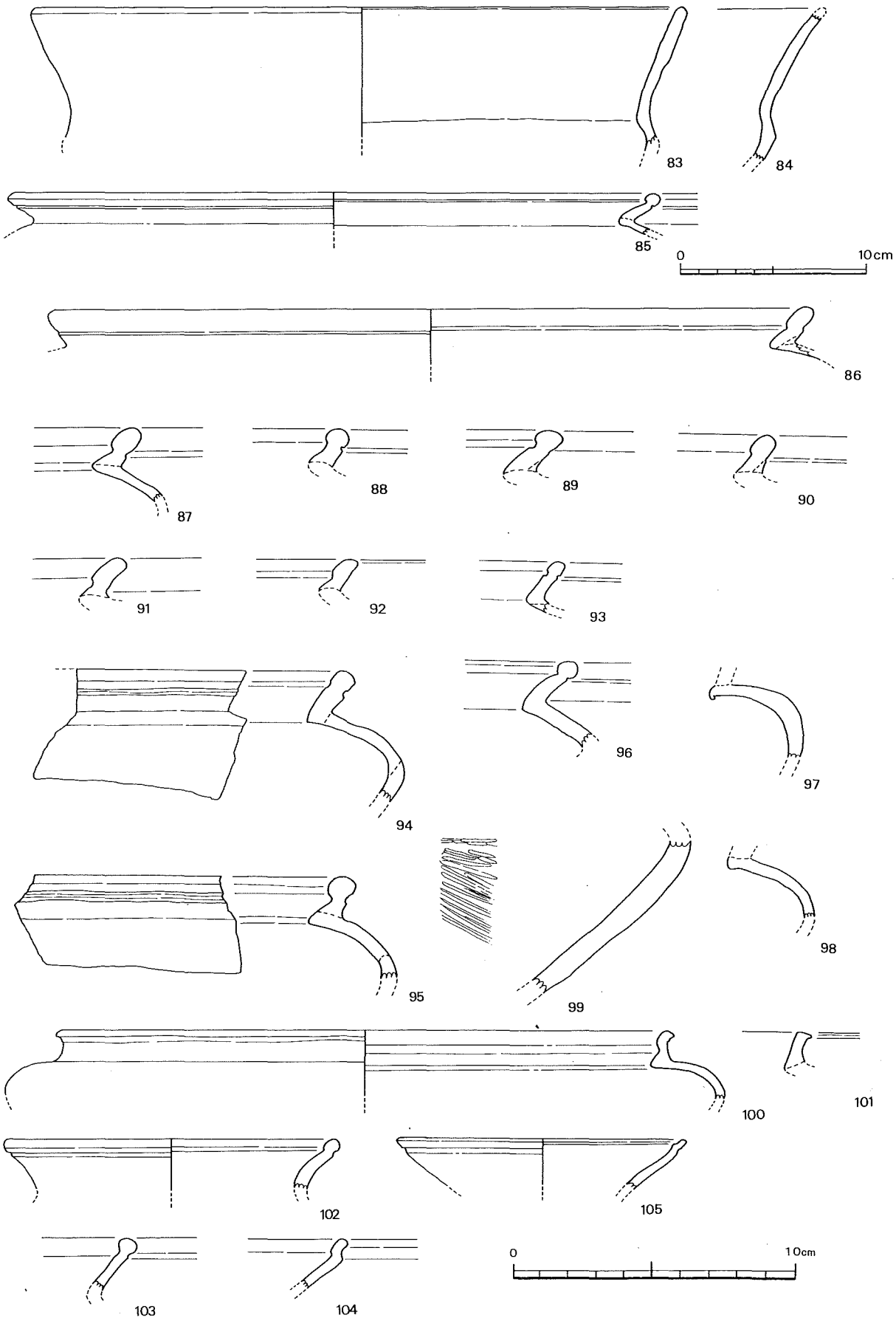
100は口縁部形態に特徴の見られる精製浅鉢で,簡略化された玉縁をもち,器壁も薄く仕上げ,85や86などの玉縁のしっかりしたものと比べると形態的にも小型である。101は玉縁口縁ではなく,断面方形の口縁部で端部が外側に引き延ばされている。102～105は小型浅鉢の口縁部で,105は口縁部直径約10,2cmを測る。玉縁口縁となるものは102のみで他は内外面に溝をめぐらす単純な口縁部をもつ。

第23図(106～115,117～120,122～126,128～131,136:SD04覆土,116:11区3層,121:2区3層,127:6区3層,132・133:2区3層,134:3区3層,135・137:7区2層)

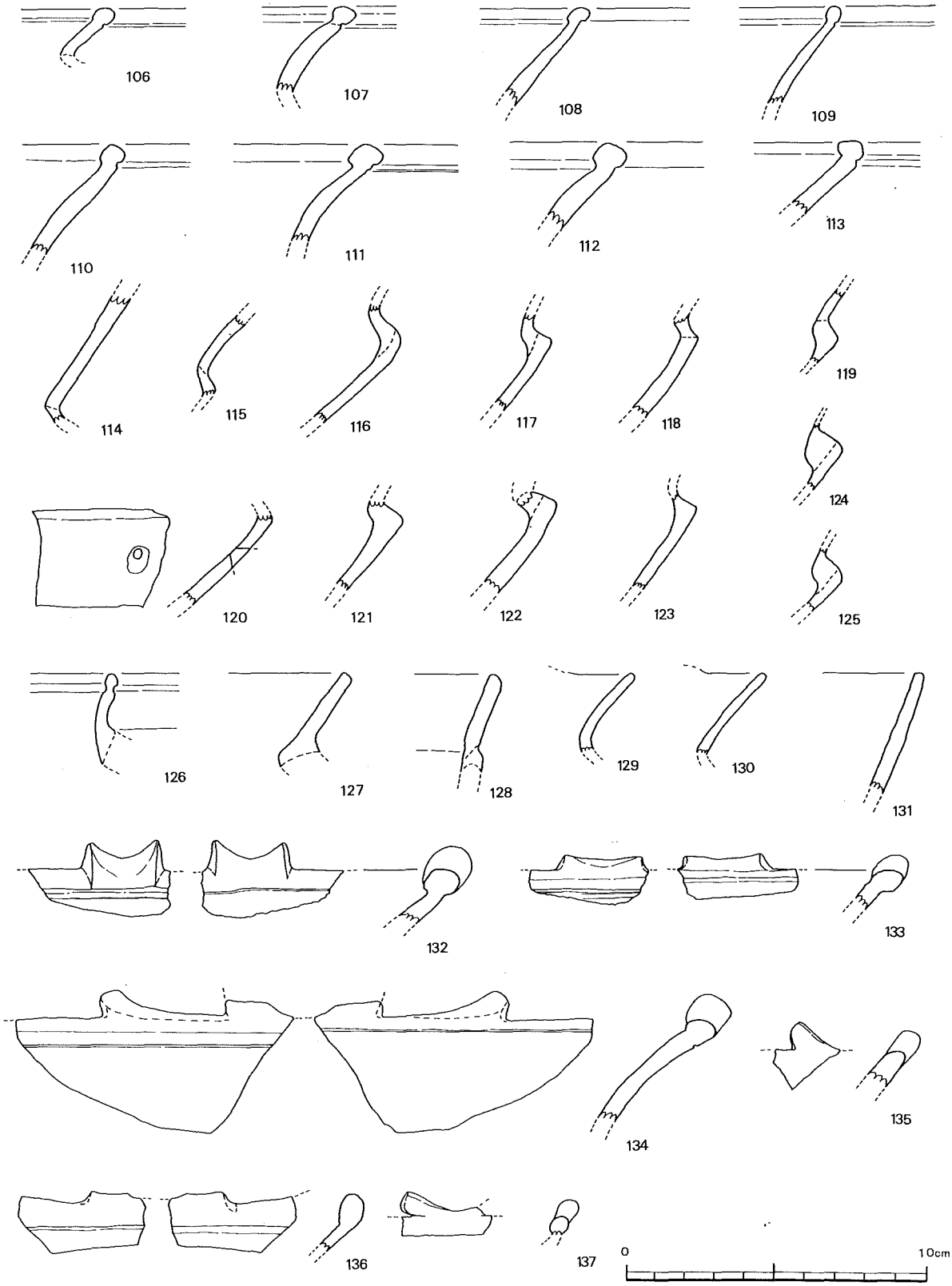
106～125までは玉縁口縁をもつ精製深鉢である。第22図の浅鉢よりも長くのびる口縁部に「く」の字にくびれる頸部をもつ。口縁部は,内外面に溝や段をめぐらし玉縁に似せるものから,粘土紐を巻き玉縁とするもの(106・107)がみられる。胴部や頸部の接合は接合面に浅く細い溝を施し,そのうえに取り付けている。また,119・124・125などは接合部に太い粘土紐をもちいており特徴的である。120では外側から補修孔を穿っている。

126～131については形態が不明なものを図示した。126は直立する口縁部に内外面に溝をめぐらした玉縁状の口縁形態をとる。胴部との接合部はほぼ直立する。127は106～125と同じ口縁部の傾斜となる。128はほぼ直立する口縁部で,下半に段を持っている。127は急激な屈曲を示さないが,緩やかに胴部がふくれる。130も同様である。131は直線的に広がる口縁部である。

132は典型的なリボン状の装飾で,粘土紐を巻いた玉縁口縁の上に装飾を貼りつけている。133はその小型のタイプである。134や136では鰭状の装飾のとなりに鰭とは違う装飾が繋がっている。



第22図　縄文時代 晩期土器⑦

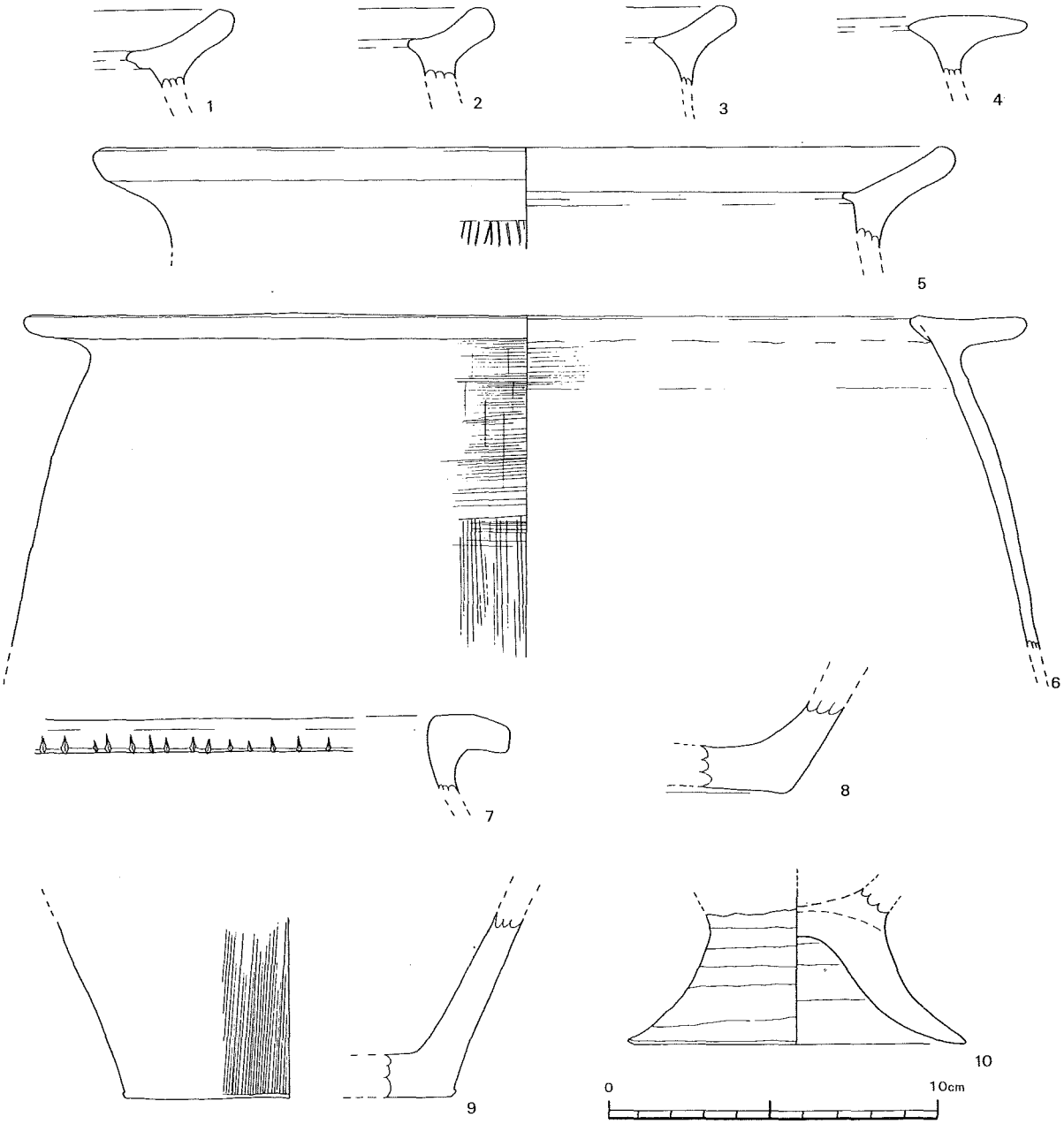


第23図　縄文時代 晩期土器⑧

2)弥生土器　(第24図1:7区3層,2:8区1層,3:10区砂礫土,4:2区表土,5:3区2層,6:6区2層,7:9区砂礫土,8:5区2層,9:1区2層,10:9区1層)

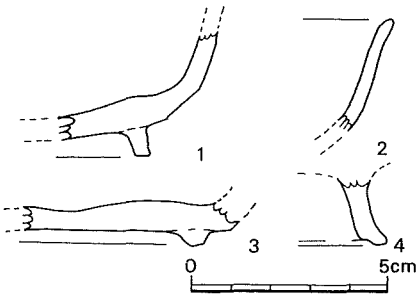
弥生土器の出土する割合は土師器などの古代の土器に比べ,極端に少ない。おそらく2層下面に集中すると思われるが,遺物の集中する地区もないために,不明な部分が多い。

1～3･5は甕口縁部片で口縁部上面が丸く窪む黒髪式の特徴をもつ。内外面とも横位に丁寧になでられる。5の復元径は約26cmを測り,胴部以下は縦方向の刷毛が見られ,口縁部は丁寧に横位になでられる。4は逆に口縁部上面が盛り上がるようになるが,表面の摩滅が激しく,調整は不鮮明である。6は甕で1/5程度が残り,残存高は約10cmを測る。7は刻目を施す厚い口縁部片で,刻みは口縁部側面下部を中心に施されている。8～9は底部片である。8はあげ底となり,9は平底となり,10は台付甕の脚部である。9は縦方向の刷毛を外面に施し,10は内外面ともに非常に丁寧になでられ,焼成は良好で硬質である。



第24図　弥生土器

3）土師器・須恵器



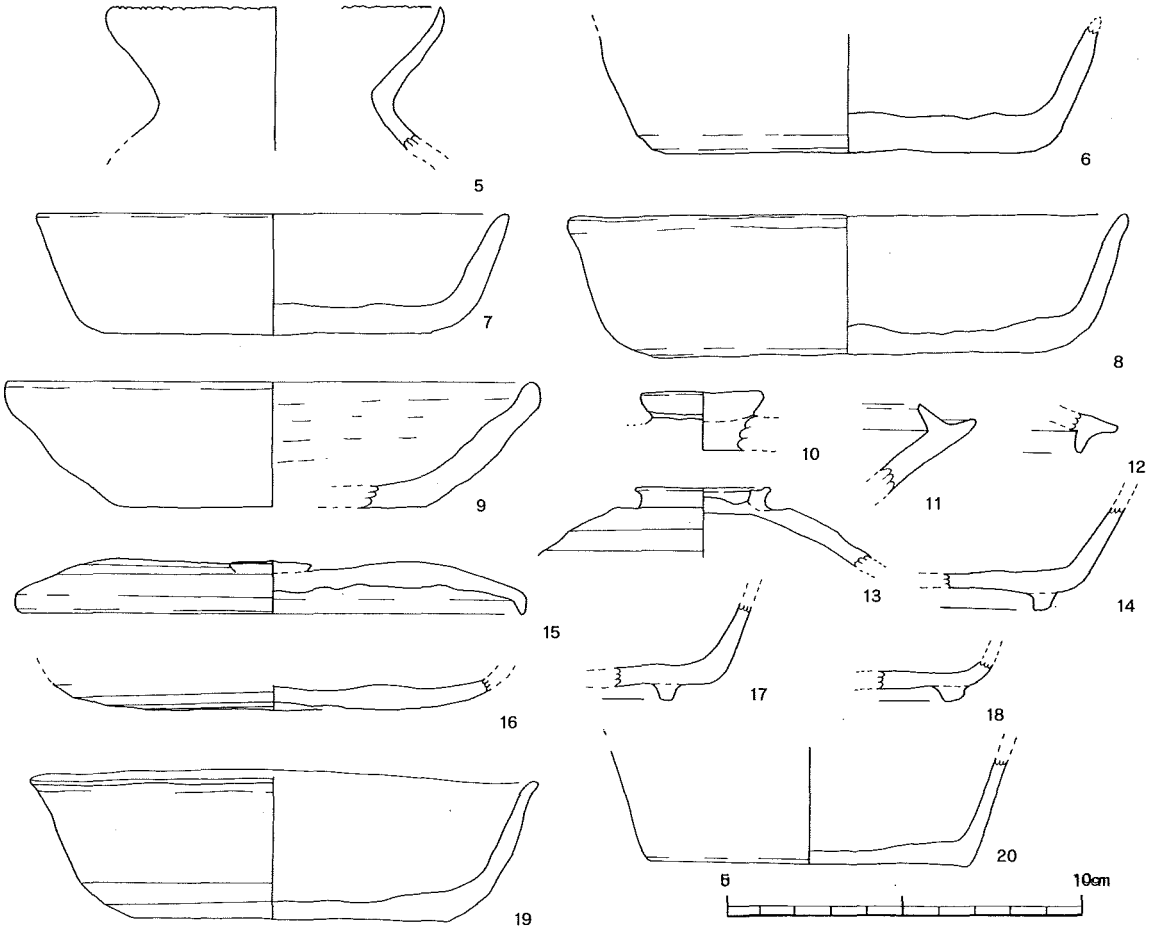
第25図　1区,SD01,出土遺物

Ⅰ　遺構出土遺物

第25図はSD01出土遺物である。多数の破片が出土しているが,4点のみが図化できた。1･2･4は須恵器高台付坏の高台部分である。出土須恵器中で高台がもっとも高いのが4で,高台底内側に浅い段を持つ。1の外面は回転を利用したヘラ削りが施され,内面は丁寧になでられている。3は内面のみを黒色処理した黒色土器A類である。

第26図はSD02出土遺物である。5～9が土師器で,10以下は須恵器である。

5は小形丸底壺の口縁部片で,口唇部上面に細かい刻目がほどこされる。6～9は坏であり,6と8とが完形に近く,7と9とは復元実測である。6～8はやや外反する口縁部を持つが,9の口縁部は緩い角度で外反する。また,6～8ともに外面下部に回転を利用したヘラ削りを施し,上部から内面にかけ丁寧になでる。9はヘラ削りを施さず,器壁は厚く,上から荒いなでを施している。10･15は扁平化した断面逆台形を呈するつまみの付く蓋である。10の色調は明赤褐色を呈し,焼成は不十分である。15は浅く扁平化し歪んだ形態となり,青灰色を呈し焼成がよい。11は造りがあらく立ち上がりも低く蓋との区別が難しい。12はかえりを持つ蓋である。11･12ともに焼成がよく,青灰色を呈する。13は輪状つまみをもつ蓋で,色調は乳白色の強い褐色で焼成は悪い。14･17･18は断面台形の低い高台をもち,高台の接合はは,坏底に粘土紐を直接接合するタイプである。16･19は坏片であり,16は底部までヘラ削りが施さ



第26図　8～9区 SD 出土遺物

19は完形品で平底を呈しており,胴部下半に回転利用のヘラ削りが施され,胴部上半から口縁部にかけ横方向の回転利用のなで調整が施される。色調は青灰色を基本とするが,口縁部付近から胴部上半の外面に紫の強い灰色の部分が輪状にみられる。20は壺底部で平底を呈し,器壁も薄く仕上げられ,胎土も細かく焼成も良好である。底面は回転利用のヘラ切りで,胴部外面は回転を利用した丁寧ななでが施されている。内面についても丁寧な調整がみられ,10～19と比べ調整や胎土・焼成が優れている。底部内面には自然釉がみられる。

Ⅱ　層位出土の土師器(第27図・第28図)

第27図(21～24,26・27:2～3区２層,25:８区２層,28・30・31・36・41:14～15区２層,29・33・34・38・39:10～12区1a層,37:3区表土,40:1区1層)

21～26は古墳時代前期に属する甕口縁部である。特に21は口唇端部を持ち上げており古い要素をもつ。胴部内面は削られ,口縁径約16,8cmを測る25では胴部にかけて薄くなっている。他は１次調査で検出された時期と同じころを主としている。27は直口する口縁で,丸底壷の口縁部と思われる。表面はやや赤みがかっており朱が塗られている。28は高坏脚部片であり,坏部との接合はソケット式と思われるが,摩滅がひどく残りが悪い。29は小型の壷の胴部～頸部である。最大径は約　cmを測る。内外面の調整が丁寧で胎土も精製されており焼成も良い。

30は竈の焚き口の鍔部分である。焚き口上部の丸くなっている部分と思われる。表面は軽くなでられており,明褐色を呈し焼きしまっている。

31～41は坏である。31では口唇部付近が外反しており,底部付近がなでにより締まっている。32では底部外面下部に削りが残り,他は内外面ともなでにより仕上げられる。35は器壁が厚く全体的に稚拙なつくりで,内外面とも荒いなでが施されている。直径約15cm,高さは約6cmを測り,口縁部はほぼ直立する。逆に36や37は削りが施されており器壁が薄い。削りの痕跡は底部付近に残るのみで丁寧になで消されている。36は底径約11,4cmm,37は底径約9,5cmを測る。38は口唇部にかけて器壁が薄くなり,底部付近外面に段がみられ,復元底径は約9,2cm高さ約3,6cmを測る。39は丸みをもつ口縁部をもち,底径は約5,3cm,高さ約3,9cmを測る。41は底部にヘラおこしの痕跡をもつ底径約5,8cmの小型坏で,口縁部は手捏ねと思われ口唇部にかけ薄くつくられる。

第28図(42・43・45～49・55～58:9～12区1a層,44:14区2層,50:15区1a層,51～54:13～15区2層,59:8区表土)

42～47は調整や形態は須恵器と思われるが非常に焼成が悪く明褐色を呈し土師質であるため,土師器と考えられる。42は輪状つまみをもつ蓋片であり,比較的器壁が薄い。43は端部を折り曲げた非常に浅く扁平な蓋である。44は底部外面全面に削りを残す高台付坏である。高台は直立し,断面は方形となる。

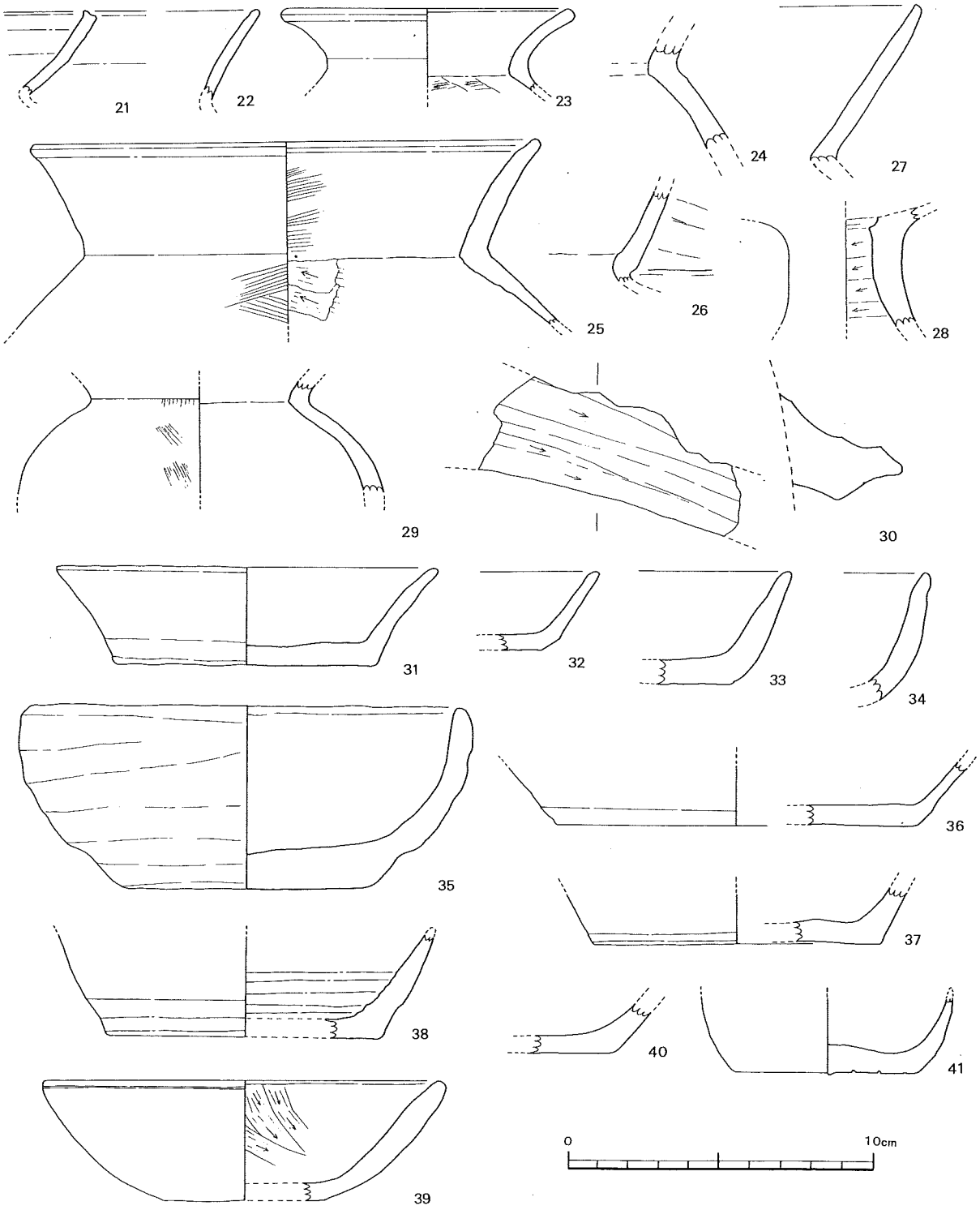
45の高台付坏は,坏部底面に粘土板をはり高台を作り出す接合法が観察できる。同じく高台断面が方形を呈する47でも同じ接合方法が断面観察できる。46は摩滅が激しく高台は丸くつぶれているが,大変低い高台である。47～49は底部外面にヘラ削りのみられる高台付坏で,48や49の高台は端部が外へ張り出している。接合法は坏底面に高台となる粘土紐を取り付け,丁寧になでて接合痕跡を消している。

50は内外面とも黒色処理している黒色土器B類で,外面には削りを残している。また内面には丁寧ななでをほどし,高台も比較的高い。

51～58は甕の口縁部で,直立する胴部にほぼ水平な口縁部がつくタイプ(51～54)と張りのある胴部から頸部にかけてややすぼまり口縁部が「く」の字に広がるタイプ(55～58)とがある。どちらのタイプでも内面に荒い削りが縦方向に施され,胴部に近づくほど器壁は薄く仕上げられてる。外面の調整は前者のタイプでは縦方向の刷毛目を施し,後者のタイプでは斜方向の刷毛目が施されている。

59は甑などの把手とおもわれ焼成がよく,表面はなで仕上げである。

51～58にかけての甕は層位ごとに形態を異にしている。2層出土のもには直立する胴部に口縁部が水平にのびるタイプがみられ,1b層以上では丸みを持つ胴部に対してやや開き気味の口縁部をもつタイプが主体を占めている。

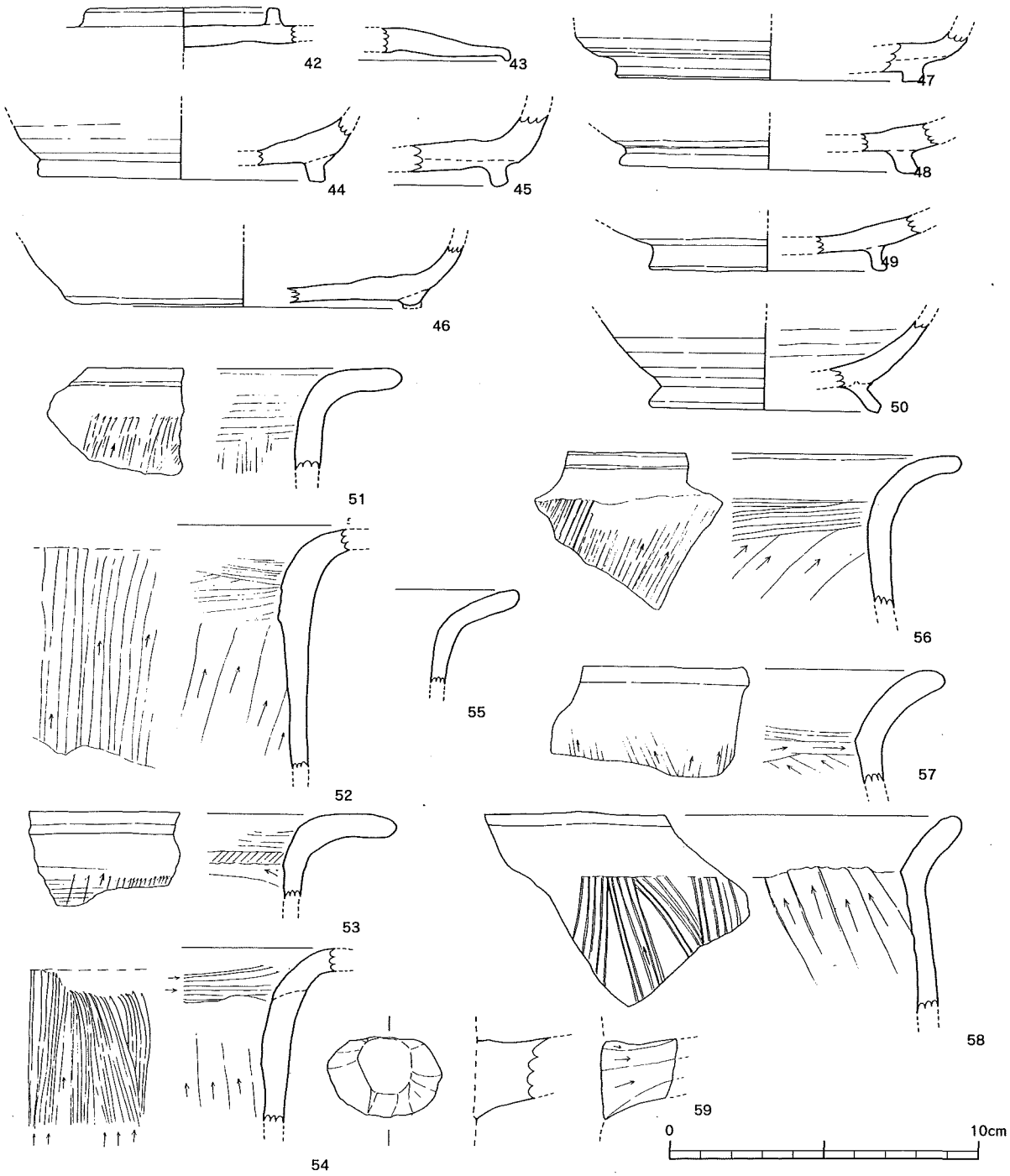


第27図　層位出土土師器①

Ⅲ　層位出土の須恵器(第29図・第30図)

第29図(60・63:10区２層,61・65・66:３区２層,62・68:15区2層,63:10区２層,64:9区2層,67:13区２層,69:３区1b層,70～81:9～11区1b層,82～93:９～10区1a層)

60～63,65・66は高台付坏で,高台部復元径は63が約10,7cm,62が9,1cm,61が7,4cm,60が9,8cmを測り,63が比較的大きい。60の口縁部は口唇部内側に段を持って外反し,底部内面中央が窪む。60～62の外面は回転を利用した横位のなで調整されているが,63のみは回転利用のヘラ削りがみられる。65・66は高台部分のみだが,比較的高い66では約1cm,低い60では0,5cmを測る。高台の形態は60・62・65・66のように端部が外側に開くタイプと,61・63のように断面逆台形となるタイプの二つがある。



第28図　層位出土土師器②

高台の取り付けは坏底部の平坦面に直接取り付けるやり方(A技法)と,60のように坏底部に段を設けてそれに巻くように取り付けるやり方(B技法)とがある。64はかえりをもつ小型の坏身であり,形態的には6世紀末から7世紀初頭と考えられる。しかし全体的に摩滅がひどく,流れこみによるものである。

67は甕口縁部,68は長頸壷口縁部であり,直径はともに約20cmを測る。67はやや小型の甕とみられ,頸部～口縁部の外面に灰釉がかかり,口唇部外面～内面にかけてなでにより丁寧に整えられ,頸部内面には胴部にかけてヘラ削りが施されている。68は二重口縁となり,口縁部内面に灰釉がかかり,外面の色調は赤紫色の強い褐色となり,内面は青灰色を呈しており,焼成は良い。

69は高坏の脚部であり,摩滅がひどく流れこみと考えられる。色調は全体的に青灰色を呈しており,内外面とも丁寧になでられる。坏部の底面中央に接合に伴う突起状の粘土塊がみられる。

72～75は坏蓋であり,72には扁平化した蓋に沈んだつまみがつく。調整は全面に回転利用のヘラ削りがみられ器壁の厚さがほぼ均等に調整されている。73の平面形は正円にならず長楕円形になり,左右で高さが違っており,形が歪んでいる。おなじように端部を折り返してかえりとしているが,外面のヘラ削りの間隔が広く,72よりも造りが粗雑である。74･75はかえりをもつ蓋であるが,径が72よりも小さくなり64と同じ頃の所産かとおもわれる。

70～71,76～81は高台付坏である。70は口縁部から口唇部部にかけてほぼ垂直にたちあがる形態をとる。76～79は高台部分のみであるが,75は比較的高くほぼ直立しており,70･71･77と同様に端部がやや外側に張り出している。78は断面方形の高台をもち,ほぼ直立している。70と79との高台内面には段がみられ,特徴的である[註1]。高台の取り付けは坏部底面平坦面に取り付けるやり方(A)と81のように底部に段を設けて粘土ひもを巻いていくやり方(B)とが1b層ではみられる。

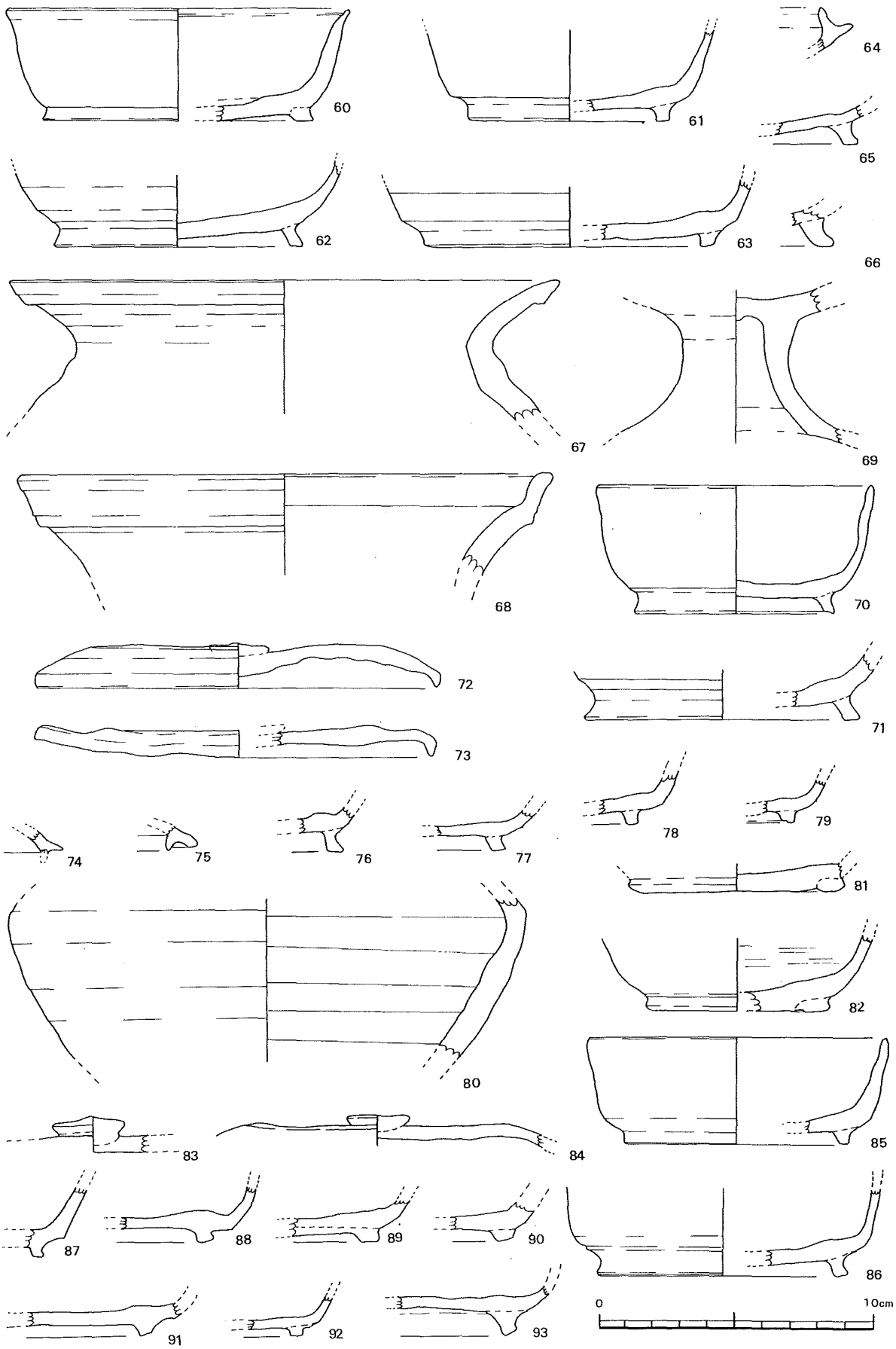
80は長頸壷の胴部片で内外面とも丁寧に回転を利用したなでが施されている。83･84はつまみをもつ坏蓋である。82･85～86は1a層出土の高台付坏である。比較的低い高台となっており,接合法には,89のように坏部底面に円盤状の高台を張り付けるやり方(C技法)がみられ,3種の高台接合方法が1a層では共存している。

第30図(94･98･101:10区1層,95･100:13～15区1層,96:6区表土,97:7区1層,99:3区1層,102:9区1層,103:8区表土)

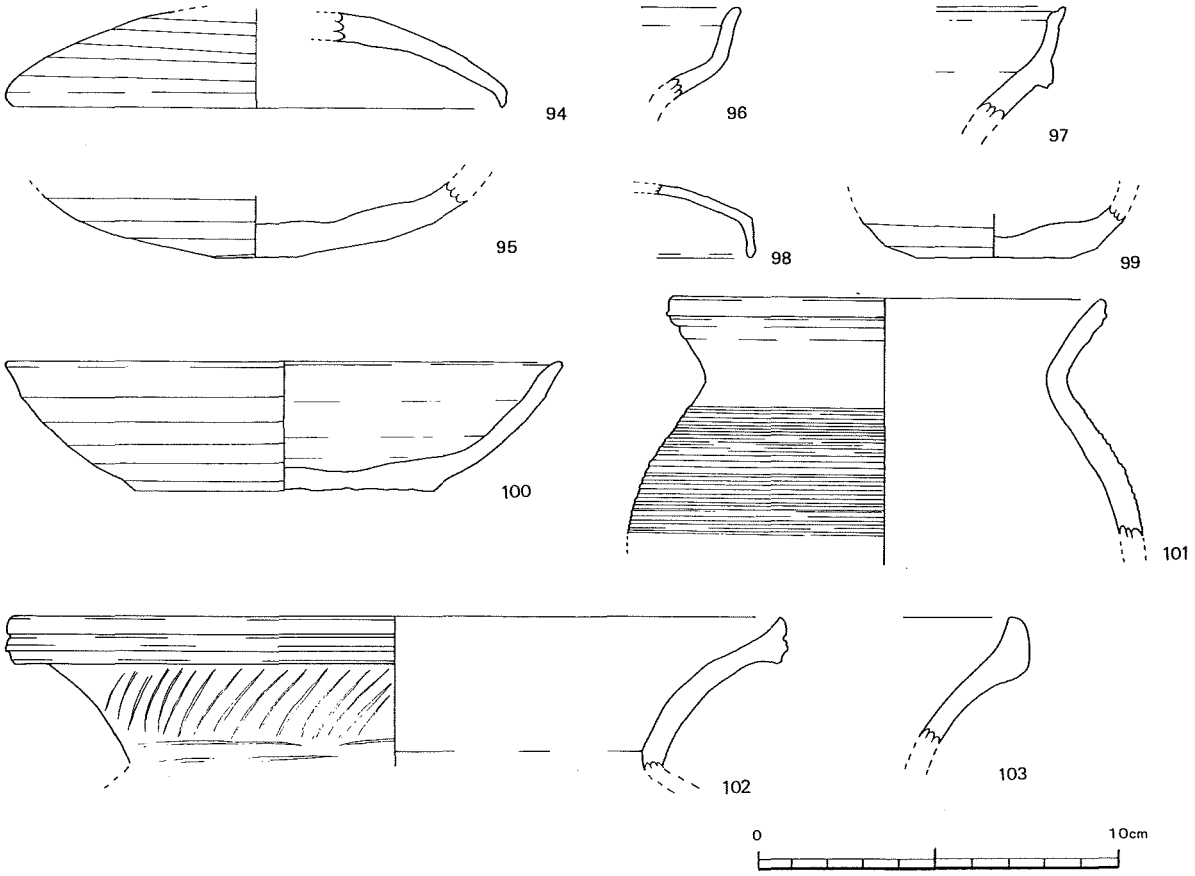
94は坏蓋であり,やや深みや丸みをもち7世紀代の産物である。95は坏身であるが,これも深みがあり丸く全体的に回転利用のヘラ削りが施されていることから7世紀代前半である。96･97･99は甕口縁部と底部である。形態的には口縁部が広く広がる発達したタイプで6世紀後半の年代が考えられる。図示できなかったが,甕胴部と思われる破片で波状文をもつものがある。

100は口縁部の開きがつよく,直径15,5cmをはかり,底部が完全に平底となる。外面はヘラ削りが丁寧に施され,内面には丁寧ななでが施されている。底面にはヘラおこしの痕跡がはっきりと残る。101は胴部に比べ口径が広い壷で,頸部以下にカキ目を施している。焼成は悪く,暗褐色をしている。102･103は甕の口縁部であり,直径は9で約22cmを測る。

註1　九州土器研究会「肥後の須恵器と瓦器」九州土器研究会発表資料(熊本)2000では荒尾産須恵器の特徴として考えられている。



第29図　層位出土の須恵器①



第30図　層位置出土の須恵器②

4）鉄製品

16は現存長約10ｃｍ，最大幅2.8ｃｍを測る鉄鎌である。先端部を欠損するが，刃部は直線上に延び，着柄部を折り返す。刃部が直線的なところに大きな特徴がある。鉄鎌は県下でも弥生時代を中心に出土例があるが，刃部は本例よりややカーブするものが多い。

5）中世以降の遺物

過去の調査により若干ながら中世関連遺物が出土している。過去の調査での出土遺物として東播系捏鉢・青磁碗・白磁の口禿皿・碁笥底の染付皿・青磁の綾花皿等で，14世紀～16世紀までの遺物が出土している。今回の調査では青磁として，1・2の綾花皿，4～6の鎬のない蓮弁紋碗の一群，7の細線蓮弁紋碗などがある。稜花皿については応永17年刻名塔基出土の例（亀井1981）から15世紀前後に比定されている。1は青灰色で光沢があり，2は明茶褐色で焼きがあまい。8は青磁碗の底部で高台内は中央を掻き取る蛇ノ目高台。胎土はざっくりしており釉薬は厚くかかる。15世初頭頃のものか。白磁は3の白磁皿Ⅸ類と白磁の端反碗が出土している。白磁の端反碗については16世紀代のものであろう。10は灰黄色の地で胎土は黄橙色を呈し，多くの細粒を混入している。内部に雑釉がかかる。底部は平底で，底部直上をヘラ撫でして底部を突出させている。体部に対し，底部は薄く造る。胎土から中国産の陶器鉢と考える。11は国産の瓦器で擂り目が認められる。体部下半に指頭による整形痕が顕著に認められる。

以上，中世陶磁器については中国産陶磁器を主体に出土しているが，概ね14世紀から16世紀までで捉えられる内容で，特定の時期に納まるものではない。これは，先述した過去の調査例からも踏襲される内容となっている。

12は滑石製石製品である。中央部から欠損し全容は掴めないが，上部の突起と下部の削りだした平坦部に特徴を持つ。ちょうどおろし金のような形態をしている。県下では多くの滑石製石製品が出土しているが，この手のものは初出のものであろう。

稗田原遺跡から至近距離にある畑中遺跡では，柱穴群とそれを取り囲むように溝が検出されているが，具体的な年代は把握されていない。遺物は13世紀～15世紀代のものを主体としており，稗田原遺跡出土の陶磁器より若干古い一群である。畑中遺跡の遺構・遺物等からなんらかの施設等があった可能性が高いが，文献的には比定されていない。これに対し本調査区からの出土した中世陶磁は出土状況等散漫的で明確な遺構等も確認されていないことから，調査区外に主体部を求める必要があろう。

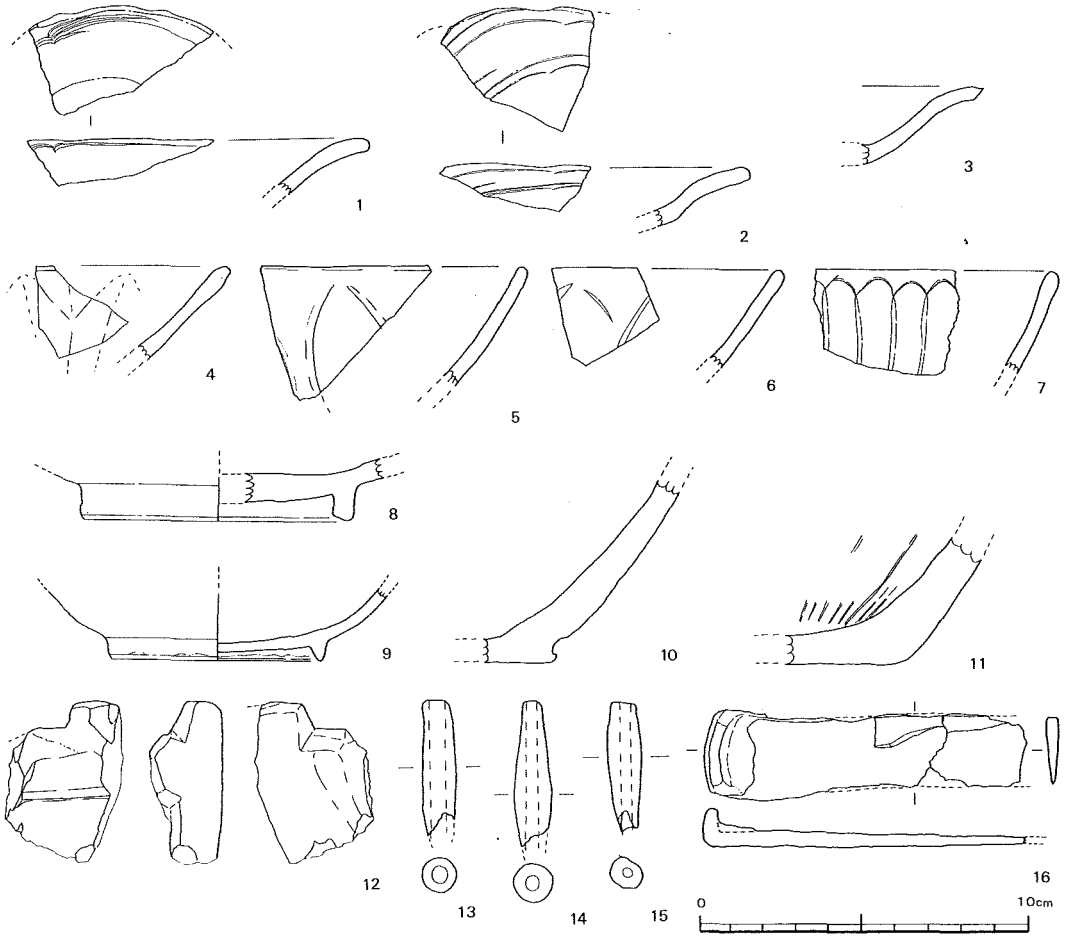
島原市を中心とする地域での中世遺跡の調査例としては，先述した畑中遺跡が主要遺跡であるが，他の遺跡でも少数ながら遺物が出土している。中世の島原の状況については今後の調査に負うところが大きいが，有明海の要所であるこの地域の重要性から，今後肥後地方との関連を含め注意を要する地域である。

【参考文献】

亀井明徳1981「熊本県城南町出土の青磁資料」『貿易陶磁研究No 1』日本貿易陶磁研究会

村川逸朗編1994『畑中遺跡』島原市埋蔵文化財調査報告書　第９集　島原市教育委員会

川口洋平・宇土靖之編1999『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書　第152集　長崎県教育委員会



第31図　中世陶磁器・鉄器・石製品

6） 石器

縄文晩期の石器を語るとき，縄文後期の石器組成と弥生前期の石器組成との変化にまず着目しなければならず，具体的にどのような変化がいつ頃からはじまり，次の弥生時代へと受け継がれていくのかを視野に入れながら石器の分析をする必要がある。また，縄文後期の石器組成・弥生時代の石器組成の変化点を晩期という時期に求めていくことにより，縄文と弥生の比較を進めていく重要なキーポイントがあるものと思われる。このことをふまえ，今回の調査による石器について説明をおこなう。

1～10は黒曜石製の石鏃で，ある程度緻密な加工をおこなっており，平基のものと脚を持つ物とがある。脚をもつものについては脚部が尖鋭に作り出される。主要剥離面を一部残すもの2・3と残さないものもあるが，過去の調査でも幾分緻密な加工をほどこしたものが多く，多くの晩期遺跡の中で出土する分厚く粗雑な石鏃のイメージはここでは見られない。主要剥離面を残すものについては，後期後葉まで主体を占める剥片鏃の加工技術の名残りとも考えられる。縄文晩期の石鏃は加工が粗く，分厚いものが一般的であるが時期的にどの時期から粗く分厚い石鏃に移行するのかについては判然としない。先述したように本遺跡の石鏃が通常の晩期の石鏃と相違することは，この地域における晩期前葉の段階と後葉の段階の石鏃が変化していることを示唆することかもしれない。今後，この期の石鏃の資料を追求する必要があろう。

剥片はすべて打面が自然打面であることを特徴とする。縄文晩期の剥片については，時期的にやや下るが，西彼町のケイマンゴー遺跡で分析をおこなった経緯がある（福田1980）。この分析によれば晩期の剥片は通常剥片上に礫面が付着し，打角が大きく，長幅比が2：1以上にはならない寸詰まりのものが多いとしている。本遺跡の剥片についてもこの結果と同様に自然面を残し，寸詰まりのものが大勢を占める。15の石核の観察からも，短かく打面側に最大厚をもつ剥片が剥離されたと考えられ，縄文晩期の遺跡から普遍的に出土する十郎川型石核に共通する。黒曜石を素材とする石器としては，石鏃で占められるのもこの時期の特徴といえよう。

16～23は石斧・収穫用石器と思われる一群である。16は安山岩を素材としたもので，長楕円形の横長剥片の周辺に加工を施し，一端にトロトロになるほどの摩滅痕が認められる。加工の在り方などから扁平打製石斧というより，横型のスクレイパーとして捉えた。このような石器に関し，過去の調査の中で石庖丁型石器として報告されているものと関連する物であろう（渡邊1999）。17も周辺加工石器で刃部に摩滅痕が観察される。上部が欠損するため扁平打製石斧として捉えたが，加工は16と同様周辺に簡略に加工を施す点，16と同様に収穫具の可能性もある。19についても扁平打製石斧状ではあるが，素材が片岩という加撃に対しもろい石材であることから収穫具「石庖丁形石器」として捉えたい。20～22は扁平打製石斧の一群である。すべて安山岩を素材とする。20は半欠しているが分銅形のもので，県下では晩期遺跡に散見される。23は結晶片岩製を素材にし，周辺加工を施す。先の収穫用の石器と同様のものであろうか。24は砂岩で方形に全体に磨きをかけている。土器の調整具などの研磨具の一種と思われ，縄文後期後葉ころから出土し始める。いわゆる磨研土器の出現と関係すると思われ表面の研磨具として捉える必要があろう。

25～29は砥石である。25・26は溝状遺構からの出土で砂岩を使用している。25は周辺を調整し，一面に3cm幅の一条の研ぎ面を有し，裏面は全体的に磨り面で構成される。磨り面を切って周辺加工がなされていることから，砥石として使用した後に別の機能を持たせたことが考えられる。26は中央に一本の磨り面を持ち，その周囲に求心状に溝状の磨り面で構成され，裏にも一部一本の溝状の磨り面と中央部に敲き痕が観察される。この2点の砥石は，棒状のものを研ぎ出すための砥石と考えられる。2点とも周囲に鉄分の付着が観察される。27は3面の研ぎ出し痕を持つ大型の砥石で，研ぎ面はU字状を呈する。蛤刃状の石斧の研磨のためのものか。28～35は小型の研磨具でほぼ円形を呈し厚みは薄い。土器の整形用のものと思われる。この他もさまざまな研磨痕が観察されるものがあり，過去の事例と同様に研磨具が多いことが特徴となっている。研磨具が多量に出土することについては，頻繁な刃部再生を必要とする作業が想定される。

41の石錘が1点出土している。石錘は西北九州で一般的に見られる大型のものとは異なり小振りで扁平である。石錘の出土は国見町筏遺跡で出土しており，やはり小型の石錘の一群が確認されている。先に述べたように通常西北九州で見られる石錘は大型のものであるが，大型の石錘の出土は外洋に面した地域で発達する傾向がある。九州以東の縄文時代の石錘は，土器片錘や切目石錘など非常に小型のものが主体をなしており，九州の大型石錘は一種特殊な感がする。島原半島の石錘は九州以東のものに比べやや大型ではあるものの，筏遺跡の例なども考慮すると外洋系の大型石錘に比べ小型である。このことは，環有明海の漁撈活動との関連から外洋系のものとの法量的相違が生まれてきているものと考えられる。干満の差の激しい有明海にあって，外洋的な漁撈活動というより内弯製の漁撈であり，そこに適応した漁撈技術が石錘の大小にも反映されたということができよう。

以上，出土石器の説明をおこなったが，石器組成として石鏃・磨石・石斧（扁平・磨製）・石庖丁形石器（スクレイパー）を主体とする石器群である。これは過去の調査でも同じ様な結果が得られていることから，この地域の当該期の石器組成として捉えることができるであろう。西北九州の沿岸部で発達した縄文後期前葉～中葉の漁撈文化に見られる石器組成が後期後葉の土器の変化と晩期という次の時代への変革期にあって大きく変貌していく過程がこの遺跡を含めた晩期の遺跡の石器に求められるであろう。

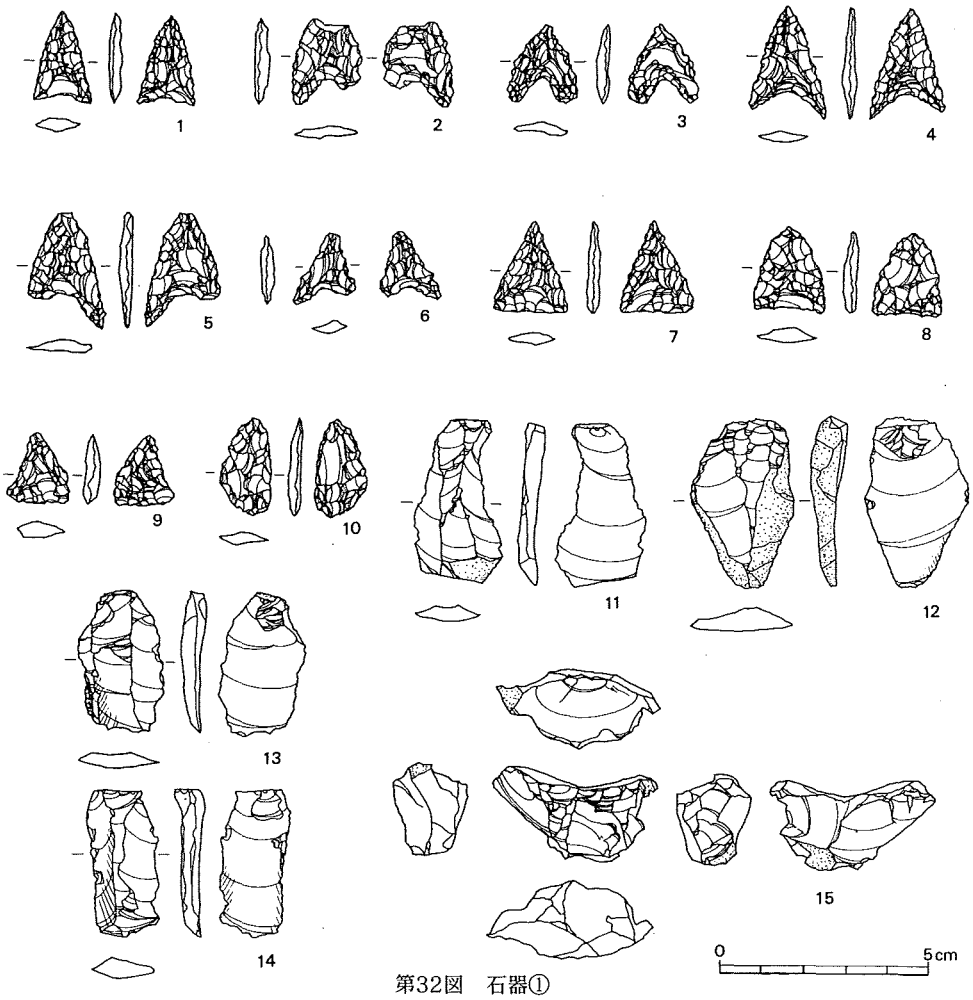
参考文献

福田一志1980「縄文時代の石器」『ケイマンゴー遺跡』長崎県文化財調査報告書　第52集

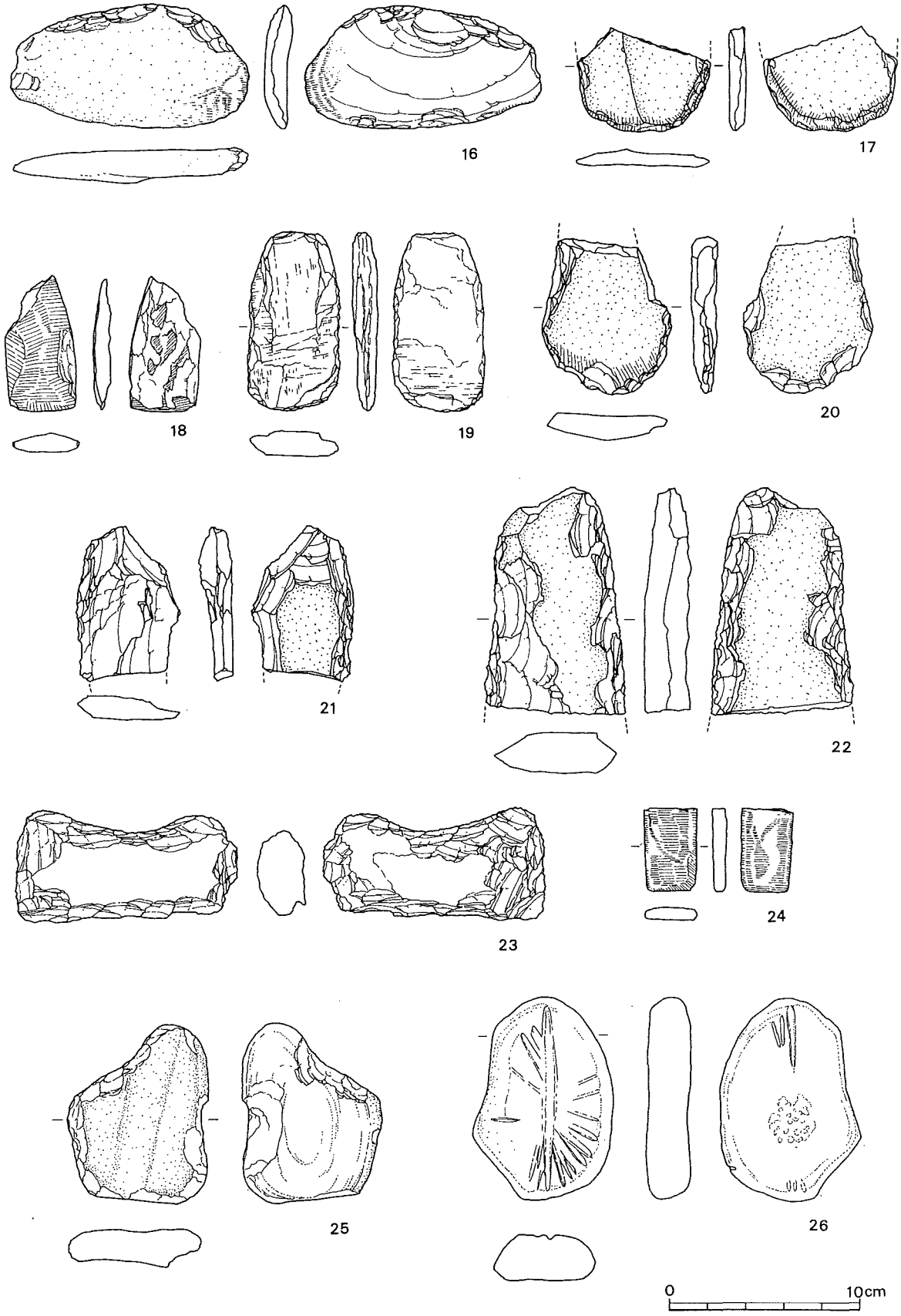
村川逸朗1998「Ⅳまとめ」『稗田原遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書　第 145集

渡邊康行1999「②縄文時代の遺物」『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書　第152 集

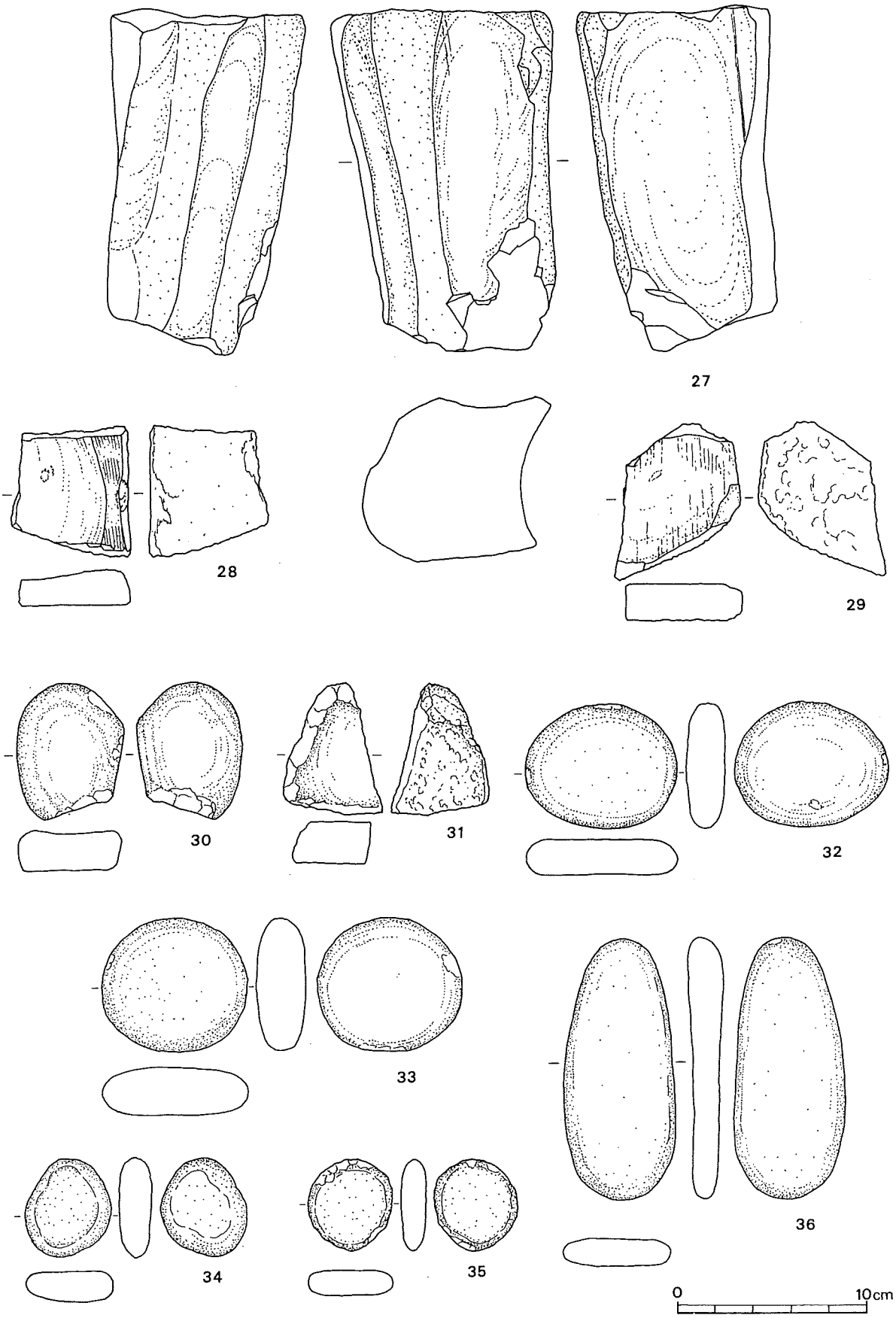
川口洋平・宇土靖之編1999『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書　第152集



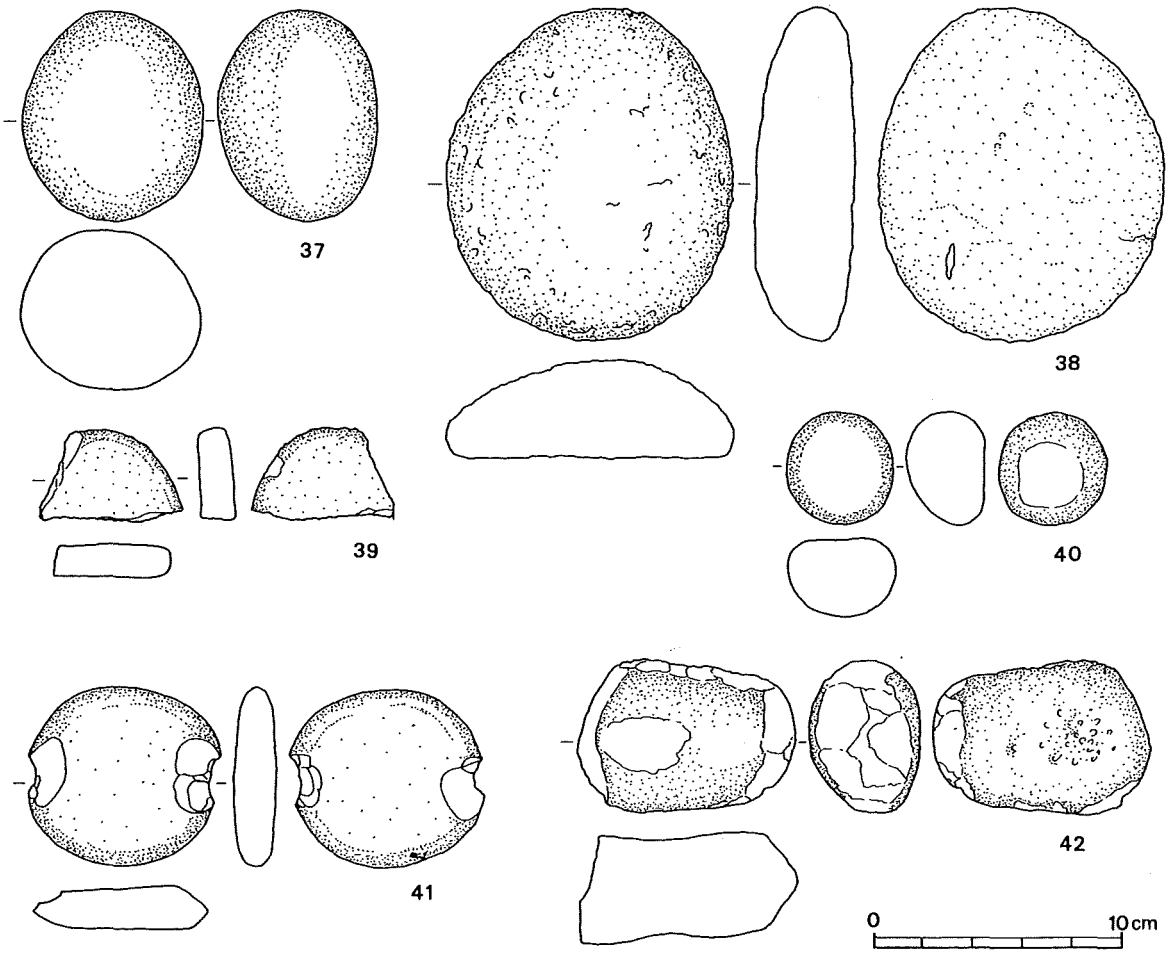
第32図　石器①



第33図　石器②



第34図　石器③



第35図　石器④

8,化学分析

長崎県、稗田原遺跡における放射性炭素年代測定

1　試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	4・5区,SD	炭化物	酸-アルカリ性-酸洗浄,石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

2　測定結果

試料名	^{14}C年代(年BP)	δ^{13}C(‰)	補正^{14}C年代(年BC)	暦年代(西暦)	測定No. Beta
No.1	3870±60	-28.8	3810±60	交点:cal BC2270,2260,2220 1σ:cal BC2330～2140 2σ:cal BC2460～2120,2100～2040	150398

1)　^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から、単純に現在(1950年AD)から何年前を計算した値。^{14}Cの半減期は国際慣例に従い5,568年を用いた。

2)　σ^{13}C測定値

試料の^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比(^{13}C／^{12}C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3)　補正^{14}C年代値

σ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4)　暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された補正曲線を使用した。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration"Stuiver et al,1998,Radiocarbon 40(3))により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代を意味する。1σ(68%確率)・σ(95%確率)は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

9,まとめ

1)土器について

Ⅰ　縄文晩期土器

今回調査したものも含め,これまでに稗田原で出土した晩期土器を整理し,遺跡内部での時期の変遷を追求する。過去の調査において縄文時代晩期土器が出土している地点は,標高38m～44mを測る第4次調査地点(①地点と仮称)と今回の調査区に隣接する1次から2次にかけての調査地点(②地点)である。②地点は標高約18m～28mの範囲またがり,縄文土器が出土する地点は標高24m以下に集中し,それ以上では縄文時代の包含層は火砕流などにより浸食されている。①地点で晩期土器が集中して出土しているのは,標高40mを中心とした7区である。①地点と②地点との標高差は約16mを測り,両者の距離は約400mを測る。(第3図参照)①地点は遺跡の上方に当たり,②地点は下方である。両地点で出土する晩期土器片を比較すると,若干の違いが見られる。指標となるのは刻目突帯文土器の有無,繊維痕土器の多少,粗製深鉢底部の形態,リボン装飾の多少などが挙げられる。

刻目突帯文土器は①地点では出土していないが,②地点で出土しており今回の調査区でも口縁部直下から突帯がとりつくタイプがある。(第20図72)繊維痕土器は①地点では多量に出土しているが,②地点ではほとんど見られない。粗製深鉢底部の形態は①地点では平底のものもみられるが,あげ底になるものが多数を占める。②地点では逆に平底のものが多くを占め(第21図),あげ底のものはほとんど見られない。また②地点で出土する土器底の底面は丁寧になでられ,なめらかな仕上げとなるが,①地点で出土する土器底面は網代などの繊維痕が残されている。今回の調査地点では粗製土器胴部付近を中心にリボンなどの装飾を持つものが多く(第20図),1次調査においても確認されている。①地点ではほとんどみられず,粗製土器の口縁部に鰭状やリボン状になった突起を取り付けているものがある。

二地点の土器の差は明らかになってきたかと思うが,その両者にある編年的位置はどのようなものなのか考えてみたい。縄文晩期土器研究は島原半島では早くから進められており,古田正隆の一連の調査により報告資料の面では揃っている[註1]。近年では晩期土器の良好な資料を出土しているのが,畑中遺跡[註2],国崎遺跡[註3],陣ノ内遺跡などがある。研究史は永嶋の整理[註4]に譲り,稗田原出土土器の特徴を整理する。

なかでも畑中は稗田原と地理的に近く,その関係は稗田原の前段階に位置づけられている[註3]。畑中出土土器の特徴は,粗製深鉢はタガ状口縁を持つタイプ(粗製深鉢A類:古門[註3])が中心を占め,土器底部はあげ底になるものが数点見られるが多くは平底である。刻目突帯文土器はみられず,鰭状やリボン状の装飾もほとんど見られない。畑中遺跡は古門により,稗田原遺跡の前段階としてとらえられ,①地点出土土器は畑中出土土器の要素により近い。このような点から両地点の時間的な推移は①から②へという流れが想定できるのではなかろうか。そして②地点では礫石原式[註5]の指標となってきた深鉢の口縁部片(第19図45·46)がみられ,刻目突帯文土器も見られることから,畑中遺跡の次の段階(礫石原式)の標準的資料を出土する地点と考えて良い。

註1　古田正隆『礫石原遺跡』百人委員会埋蔵文化財報告第7集1977ほか多数
2　村川編『畑中遺跡』長崎県島原市教育委員会1994
3　古門雅高編『国崎遺跡Ⅱ』長崎県南串山町教育委員会1995
4　正林・福田・永嶋編『陣ノ内遺跡』長崎県瑞穂町教育委員会1998
5　鏡山猛「島原市礫石原遺跡」九州考古学14九州考古学会（福岡）1962
福岡県教育委員会『石崎曲り田遺跡－Ⅲ－』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集1985
小池史哲「黒川式土器」『日本土器事典』雄山閣（東京）1996
6　村川編『稗田原遺跡Ⅱ』長崎県教育委員会1998

Ⅱ　２層出土の土師器・須恵器

今回出土した資料は2層出土のものと１層出土のものとに大きく分けることができる。出土資料の特徴は,①甕の口縁部の形態的特徴,②須恵器高台の形態的特徴,③同じく高台の接合法,④輪状つまみをもつ須恵器蓋の存在,主にこの四つが挙げられる。

①　2層出土甕口縁部の形態的特徴は,第28図51～54にみる口縁部と胴部とがほぼ直角に屈曲している点にある。ほぼ直立する胴部に対して口縁部は水平に開いていることが特徴である。また,53は口縁端部がやや反り返っている。このような形態をとるのは2層出土資料のみにみられる。これらに対して1b層や1a層中で出土した甕の口縁部は,やや膨らみ気味の胴部に対して緩やかに開く口縁部をもつことが特徴である。これらの甕を形態的にみると関東地方鬼高式に特徴的な長胴甕の口縁部に酷似しており[註1],同じ様な機能が想定できる。すなわち竈(移動式も含む)や甑とともに用いられる煮炊き具の一つとしての機能である。口縁部のみが多く出土する点も,胴部以下は被熱のためにもろくなり残存率が悪いものと考えられる。

②　１層中出土資料には高台内面に浅い段をつけているものがみられる。この特徴は2層に掘り込まれたSD01覆土中の高台片にもみられ,また11区1層でもみられる。２層中出土の高台にはみられない特徴である。

③　2層中出土高台の接合法にはＡ技法(坏底に直接高台を取り付ける)とＢ技法(坏底端部に段をつくりその段に高台を巻き付ける)がみられるのみであった。それに対して1層中出土の高台にはそれらの2技法に加え,新しくＣ技法が加わっている。Ｃ技法は坏底面に高台を作りつけた粘土板を貼り付ける接合法で,2層中にはみられない。

④　輪状つまみをもつ蓋はSD03や11区1層でみられ,擬宝珠状がもっとも扁平化したつまみをもつ蓋と共存している。SD03などの砂礫中にみられることから,先の②で示した高台内側に段をもつ高台付坏と1b層から供伴し始めると考えたい。

このように1層,2層出土土器の間には形態的にも技法的にも違いがある。2層の黒褐色土層は層位的に1層や砂礫堆積よりも古いために,両層位にはいくらかの時間的な差を考えて良いものと思われる。特に1層中の特徴である②と①の特徴は,第5次調査で検出された旧河道出土した一括性の強い資料にも同じ特徴がみられる[註2]。また,南串山町国崎遺跡でも同様に①の特徴を持つ甕片と②の特徴をもつ高台とがみられる[註3]。

そのなかでも実年代のキーとなるのが,①と②の特徴をもつ須恵器である;これらの特徴は有明海をはさんだ肥後荒尾に所在する須恵器の窯跡で発見される資料の多くにみられ,荒尾産須恵器という通称でよばれている[註4]。長崎県内でも川口により資料集成が行われ[註5],現在５遺跡で確認でされている。

今後はこれらの遺跡に見られる①～④の特徴を整理し,島原半島にひろがる古代の遺跡を中心に資料を収集し,今回層位的に確認された在り方を再検討し,その上島原半島における古代土器の編年的な枠組みを整理していかねばならないであろう。

註１　上野純司「鬼高式土器」『日本土器辞典』,雄山閣（東京）1996

２　川口編『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県教育委員会　1999

３　古門雅高『国崎遺跡Ⅱ』長崎県南串山町教育委員会　1995

４　九州土器研究会「肥後の須恵器と瓦器」九州土器研究会発表資料（熊本）2000

５　川口「長崎県出土の荒尾産須恵器について」西海ニュース第20号西海考古同人会（長崎）2000

2） 石器について

過去の調査を含めて縄文時代の土器は，黒川式土器を主体とし，その前後を若干含むが晩期前葉の遺跡として捉えられよう。この時期の石器組成をおさえることは即ち縄文と弥生の文化の比較を語る上で重要である。過去の５回の調査により稗田原遺跡の石器組成はある程度おさえられるものと思われ，ここでは島原半島の黒川段階の石器組成を提示することにより，その前後の時期との比較資料とすることを目的とする。まず，本遺跡の過去の調査により出土した石器について説明をおこなう。

過去の調査により出土した石器は，石鏃・石庖丁形石器（スクレイパー）・扁平打製石斧・砥石・小型磨石（小型円盤状石器）・磨石を中心とした組成を成している。縄文時代の遺跡にあって，石鏃の出土数が少ないのが大きな特徴である。かわって扁平打製石斧やスクレイパーの量が増える。長崎県下では扁平打製石斧は後期西平式土器段階頃に出土する石器で，この頃から石器組成の一部に組み入れられ，三万田式土器段階以降，縄文晩期まで磨製石斧以上に扁平打製石斧の量が多くなる傾向にある。これに対し石鏃は三万田式土器の段階まではある程度の量を確保しているが，黒川式土器段階以降では少なくなる傾向にある。これは，縄文的狩猟形態からの脱却と解してよいだろう。

扁平打製石斧は，周辺に産する安山岩を多様し，スクレイパーは，三角形の２側辺に刃部を設けるタイプが多い。村川は『稗田原遺跡Ⅱ』で２側辺加工の尖鋭なスクレイパーに対し，？付きながら穂積具として報告している。また，渡邊は『稗田原遺跡Ⅲ』の中で３点の緑色片岩製の周辺加工石器，あるいは刃部に摩耗痕のある石器に対して石庖丁形石器として報告している。石器の形態・加工は相違するが，両者とも収穫用の石器として捉えている。村川の指摘する石器は，一端を尖鋭にし，その周辺にのみ加工を加えるタイプのものである。収穫用の石器と考えられる石器は稗田原３次調査，今回の調査でも確認されている。下って弥生時代にこの手の石器を求めると，伊木力遺跡出土のものが類似資料として提示されよう。この時期のものは形態が方形に近くなることを特徴としており，より石庖丁あるいは鉄鎌に近い形態を有している。後期の段階でこのような石器が使用されるのも西北九州ならではといえよう。伊木力遺跡の石庖丁形石器の原型が稗田原遺跡の石庖丁形石器であるものと考えられる。

小型磨石は『肥賀太郎遺跡』の中で伴により「小型円盤状石器」として報告されている一群と同じものである（伴1990）。伴は，この石器について法量・石材・使用痕などを通して類似資料出土遺跡を提示し，縄文後期後葉～晩期にかけてのものと判断している。「磨消縄文系土器群から黒色研磨系土器群への移行期にあたる西平式土器・三万田式土器に認められる」とし，「この時代に種々に認められる遺跡の農耕的正確の一端を担う石器である可能性」をも示唆している。用途として，敲石・遊戯具・土器の研磨具などを挙げている。伴が指摘するように，その後の調査でもこの手の資料が増えつつあり，三万田式土器以降の遺跡に認められることを追認している。このことからもこの石器もまた後期後葉から晩期山の寺段階までの標識的石器になることは疑いのない所である。

砥石もまた縄文後期前葉～中葉以降多く出土する石器の一つである。特に軟質の砂岩を多様することに共通する。周辺の遺跡からの出土例としては，礫石原遺跡・肥賀太郎遺跡・朝日山遺跡・など縄文後期後葉から晩期にかけて多く出土する。特に本遺跡で出土した有溝砥石は特徴的であるが，この手の砥石は，肥賀太郎遺跡・朝日山遺跡，県北部では突帯文土器から弥生前期にかけて佐世保市の四反田遺跡・突帯文土器期を主体とする北松浦郡福島町の平野遺跡などでも散見できる。田平町里田原遺跡や芦辺町の原の辻遺跡などの弥生の遺跡では砥石面に残された溝の幅が大きくなり，ヤリ鉋等の研磨具と考えられる。

以上，本遺跡出土の扁平打製石斧・小型円盤状石器・砥石について通観したが，これらの石器が縄文時代後期後葉から出現し，晩期あるいは弥生時代にまで引き継がれる石器もあることを示唆した。これらの石器は縄文時代後期後葉までの狩猟的な石器を主体とするものからは大きな変化をなしているといえよう。一方，縄文後期後葉に出現し，晩期に消滅する石器がある。西平から三万田式土器期に出現する十字形石器と，剥片鏃である。

福岡県四箇遺跡はほぼ三万田式土器の時期に相当するものであるが，多量の剥片鏃・十字形石器が出土している。剥片鏃は縄文時代後期前葉に出現し，中葉に盛行することで知られる。また三万田式土器段階にも引き継がれ，以後消滅していくようである（註１）。十字形石器についても本遺跡の状況などをみると，少なくとも黒川段階には消滅するようである。このように，後期後葉に特徴的な石器が，三万田段階で消滅するものやそのまま引き継がれるもの，三万田段階で発達するものが晩期で消滅するものなど，いくつかのパターンがあるようである。石器群の変遷については詳細な調査をおこなっていないことから断言はさけたいが，大きな流れとして纏めてみた。ただし，本遺跡出土の石器を主体としていることから，石鏃・磨製石斧・石皿等については比較していない。

縄文後期前葉～中葉	石鋸・鋸歯尖頭器・石錘・剥片鋸歯鏃・石銛・骨角器・剥片鏃
縄文後期後葉三万田式	砥石・扁平打製石斧・小型円盤状石器・十字形石器・剥片鏃
縄文晩期黒川式	砥石・扁平打製石斧・小型円盤状石器・石庖丁形石器（スクレイパー）
縄文晩期山の寺式	砥石・扁平打製石斧・小型円盤状石器・石庖丁形石器（スクレイパー）

【参考・引用文献】

伴耕一郎1990「Ⅲ遺物　２，縄文時代の石器」『長崎県埋蔵文化財調査集報１３－肥賀太郎遺跡』長崎県文化財調査報告書　第97集

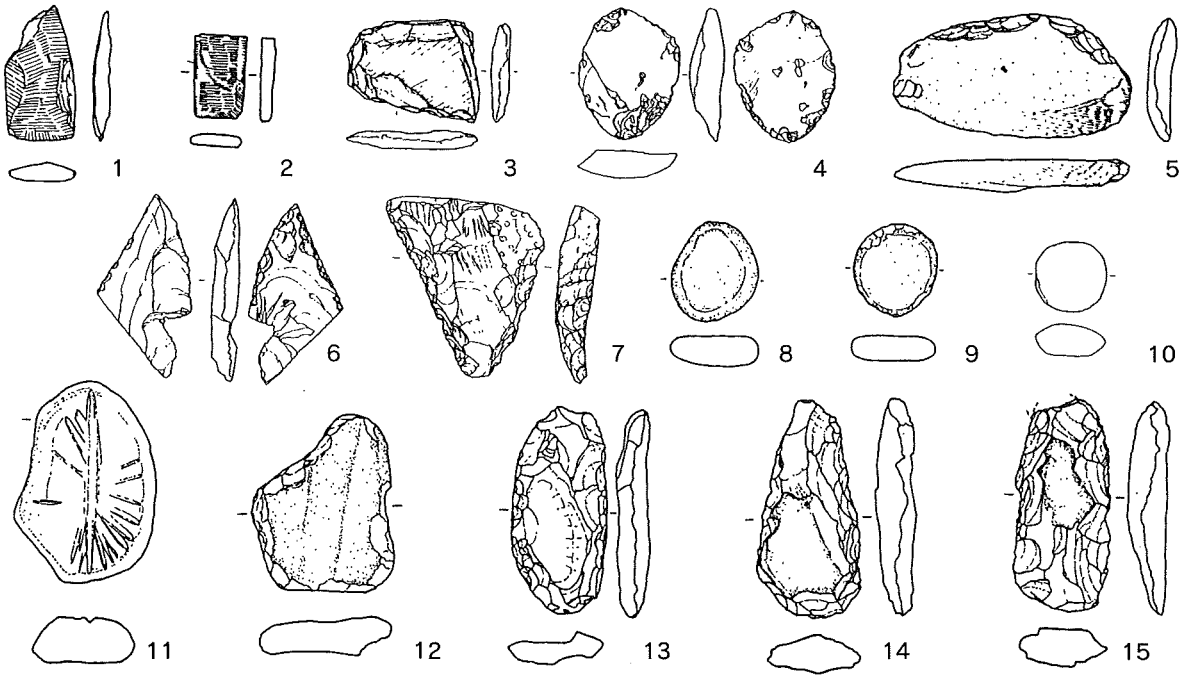
藤田・安楽編1981『朝日山遺跡』小浜町文化財調査報告書　第１集

久村貞夫1994『四反田遺跡』佐世保市教育委員会

渡邊康行1996「(2)礫石器」『伊木力遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書　第126集

村川逸朗編1997年『稗田原遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第136集

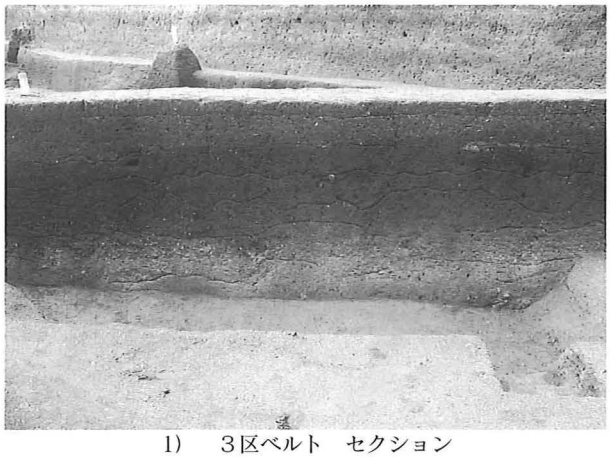
村川逸朗編1998年『稗田原遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第152集



1,石斧　2,磨石　3～7,石包丁形石器　8～10,小型円盤状石器　11・12,砥石　13～15,扁平打製石斧

第36図　縄文晩期前葉の石器組成（1～12は1／4,13～15 1／6）

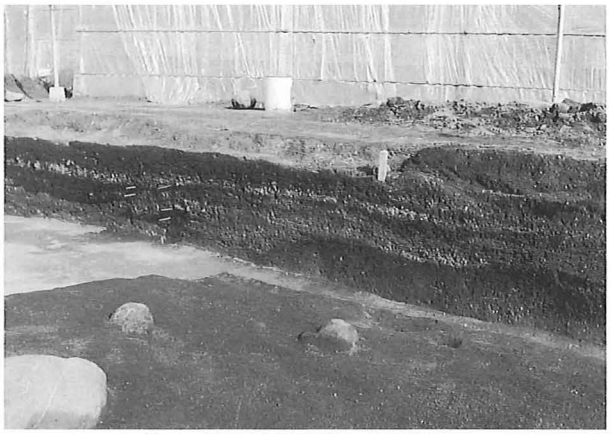
図　　版



1)　3区ベルト　セクション

5)　9区南壁　セクション

2)　7区南壁　セクション

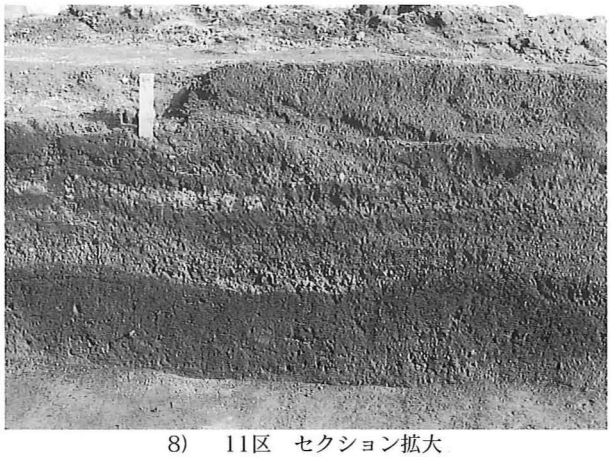


6)　10・11区南壁　セクション

3)　8区南壁　セクション

7)　10区　セクション拡大

4)　12区南壁　セクション

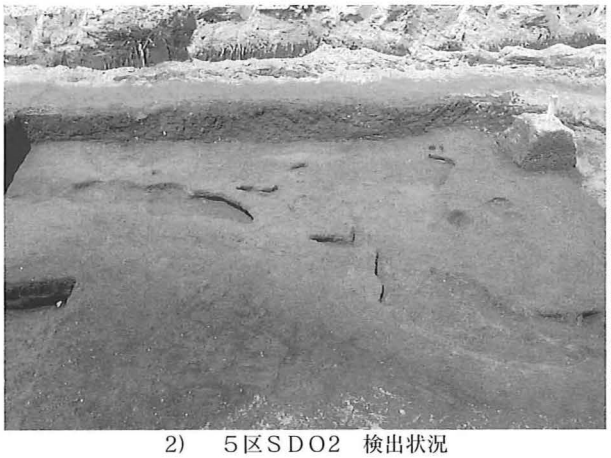


8)　11区　セクション拡大

図版２

1)　１区ＳＤＯ１　検出状況

5)　８区ＳＤＯ３　土師器杯　出土状況



2)　５区ＳＤＯ２　検出状況

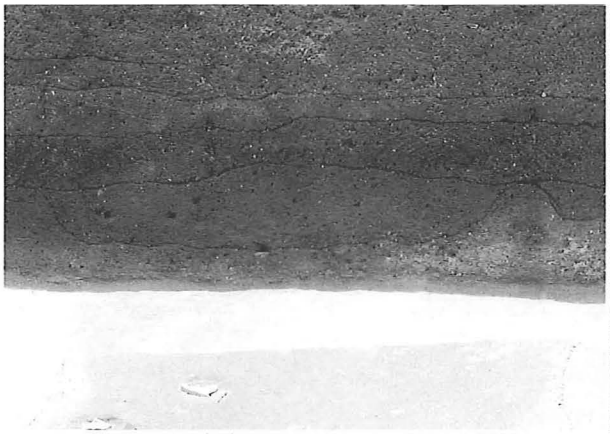
6)　９区ＳＤＯ３　須恵器　出土状況

3)　７・８区ＳＤＯ３　検出状況

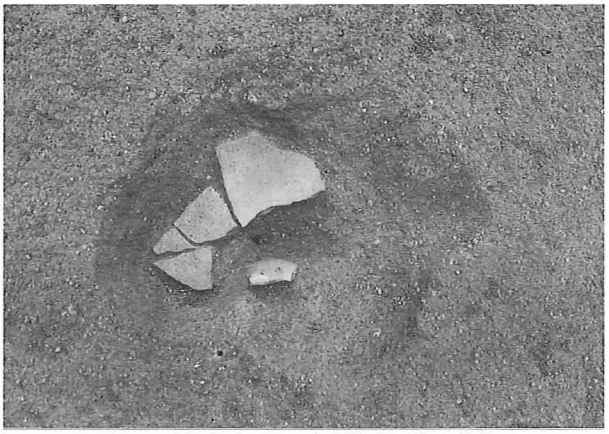
7)　10区ＳＤＯ３　検出面

4)　８区ＳＤＯ３　検出状況

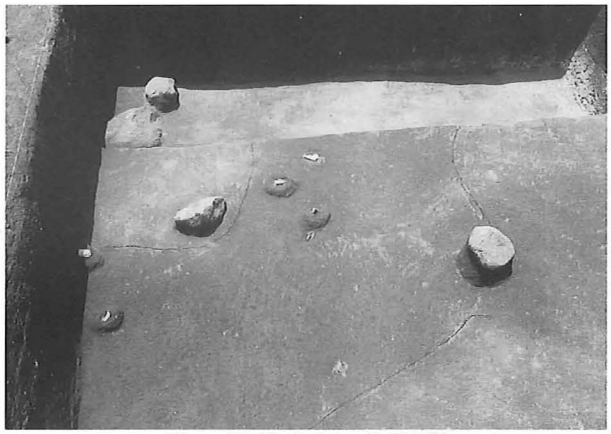
8)　10区ＳＤＯ３　検出状況



1)　６区南壁 セクション・ＳＤＯ４　断面



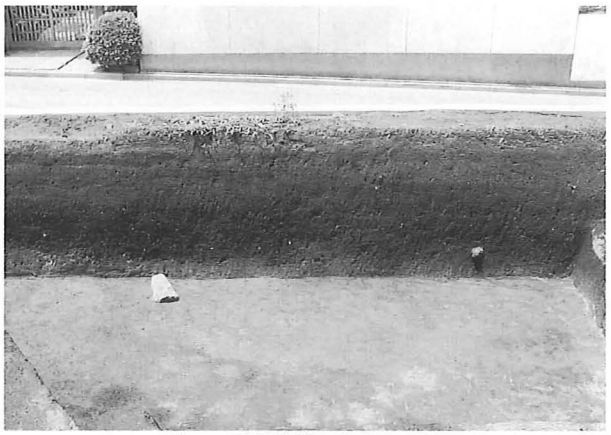
5)　２区Ｐｉｔ１　土器片方　出土状況



2)　６区ＳＤＯ４　検出状況

6)　４区　3層　出土状況

3)　６区ＳＤＯ４　遺物検出状況

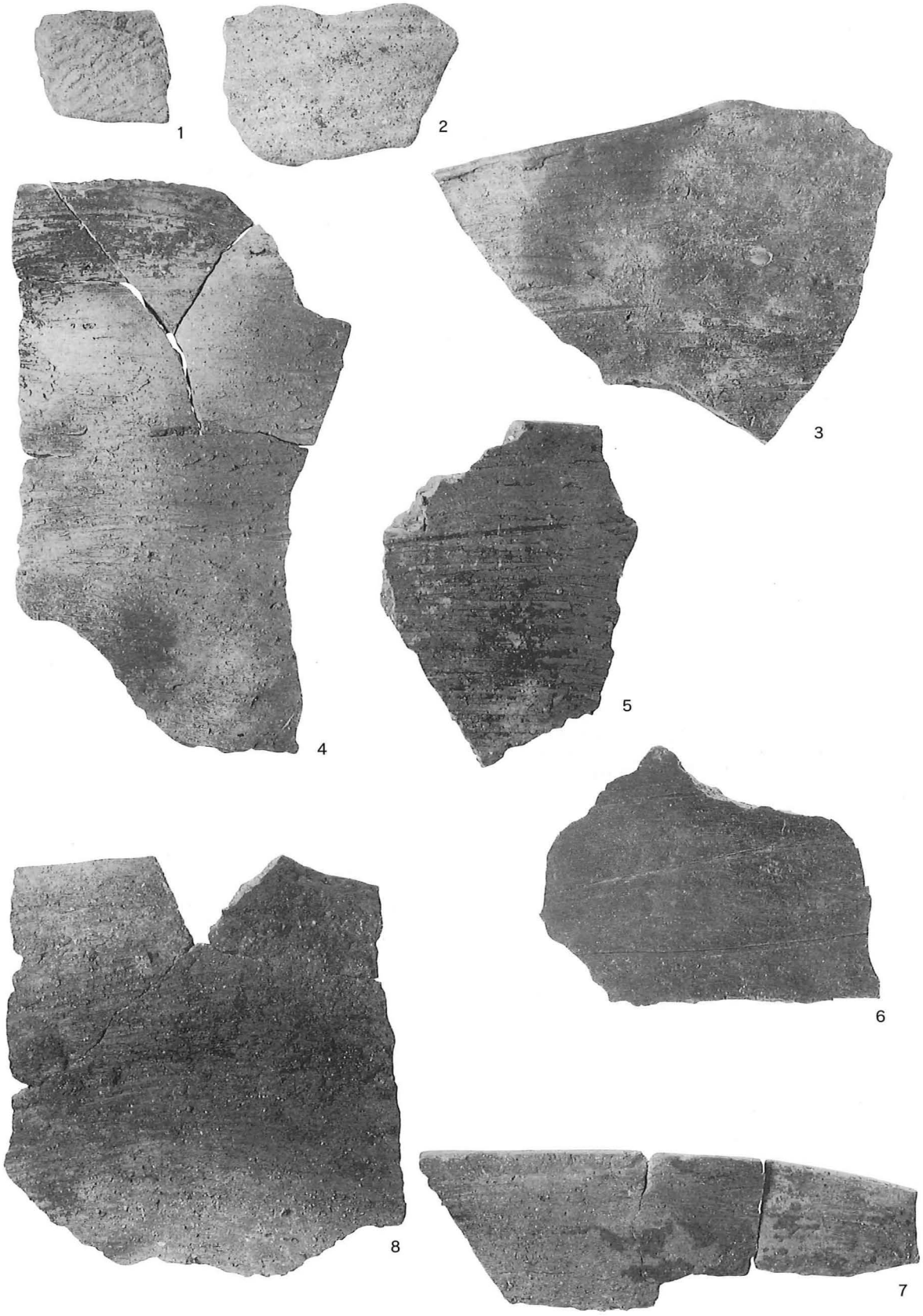


7)　15区地壁　セクション

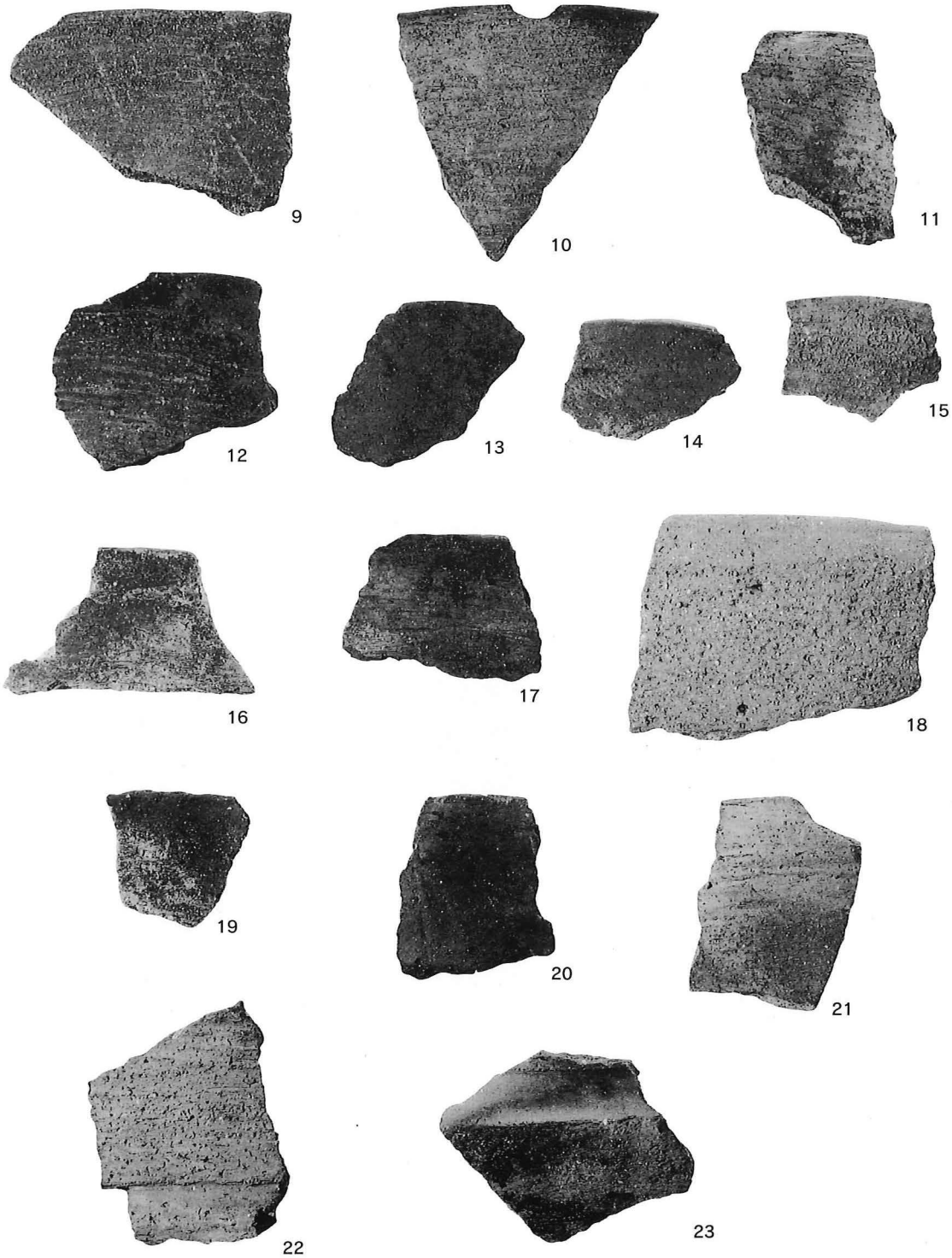
4)　４・５区ＳＤＯ４　検出状況

8)　13～15区Ｐｉｔ群　検出状況

図版４

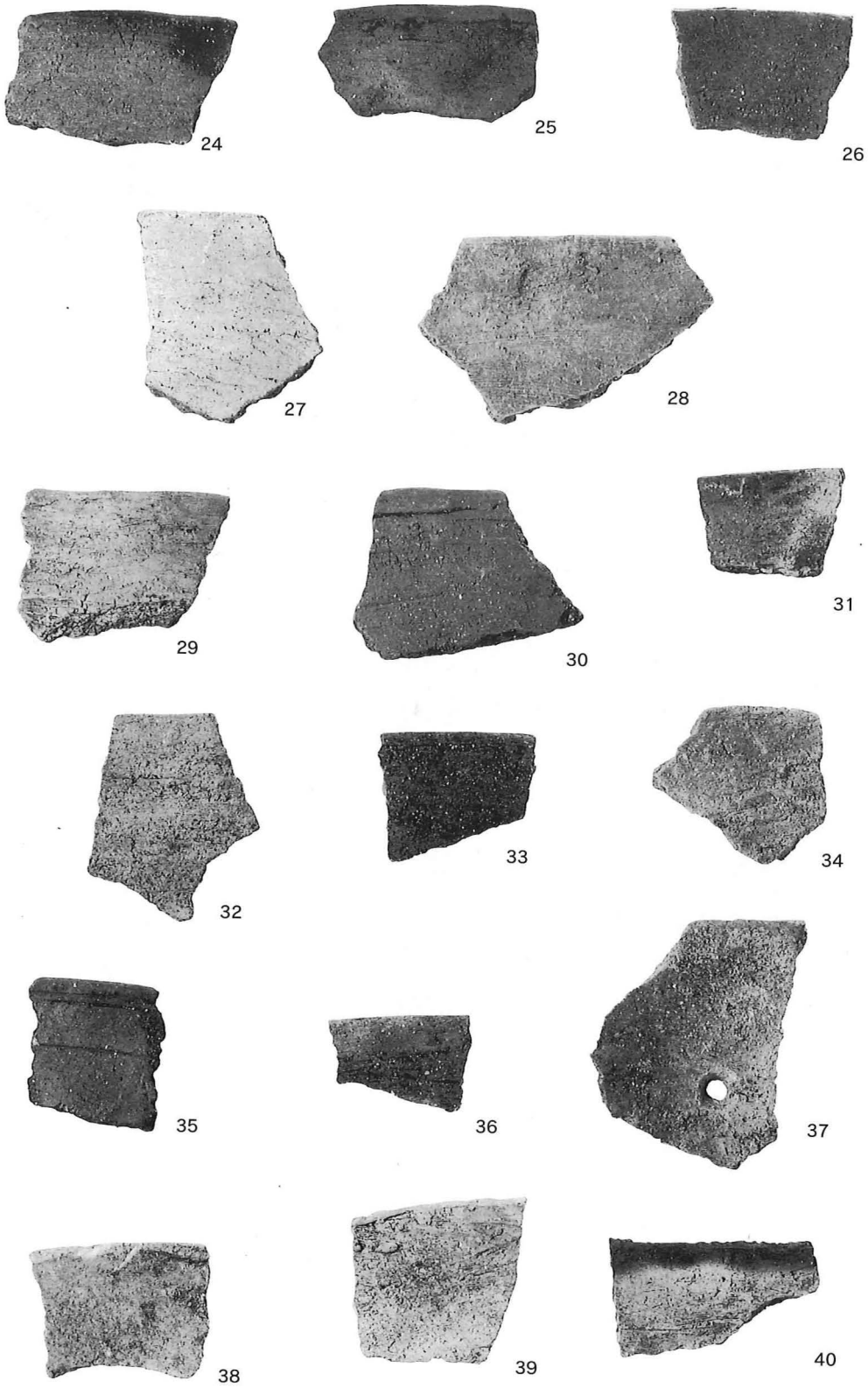


縄文時代 晩期土器①

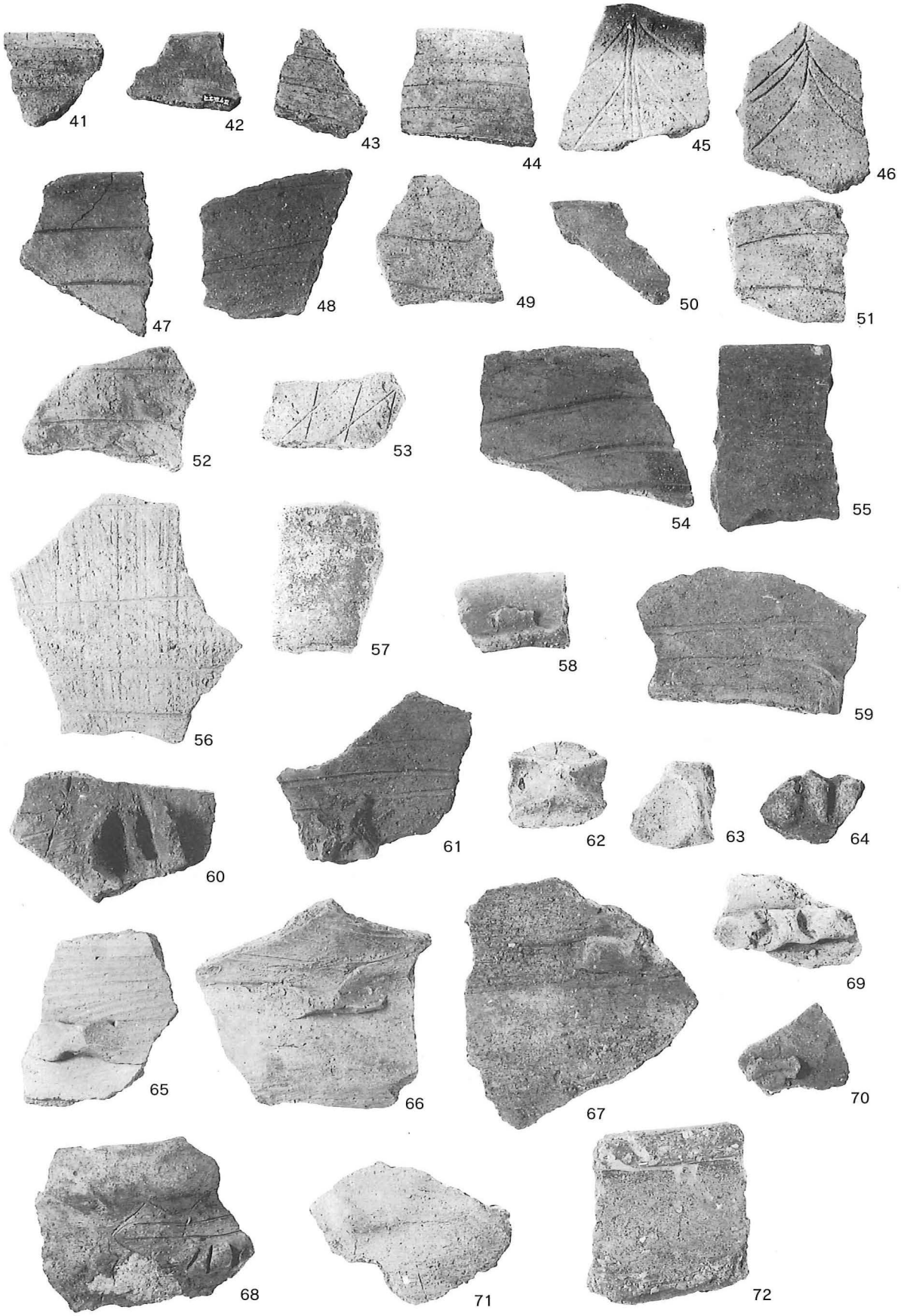


縄文時代 晩期土器②

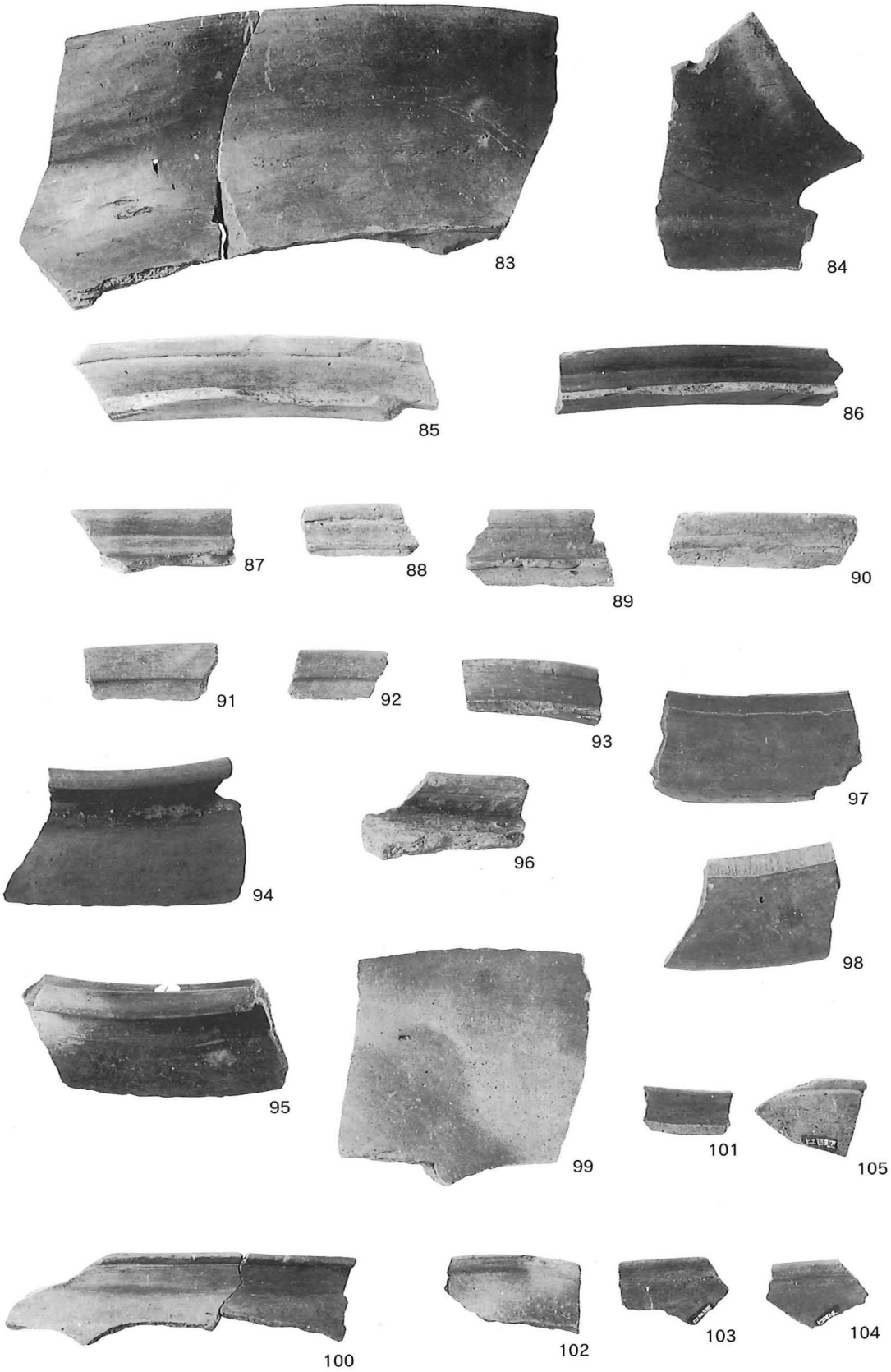
図版６



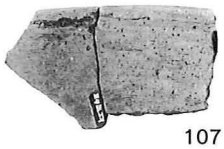
縄文時代　晩期土器③


41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72

図版８


83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
97
94
96
98
95
99
101
105
100
102
103
104

106

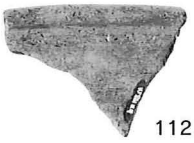

107

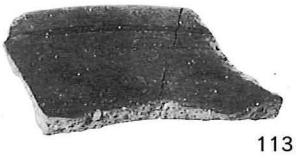
108

109

110

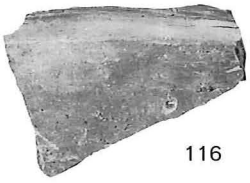
111


112

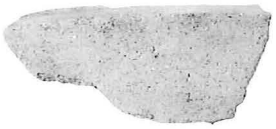

113

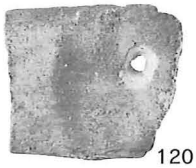
114

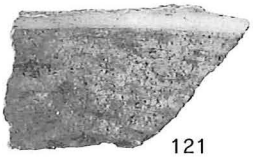
115

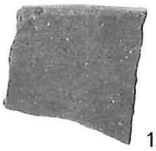

116

117


118


120


121


122

123

119

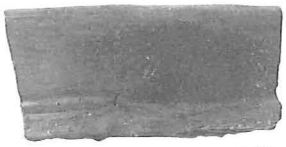
124

125

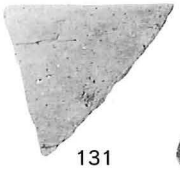
130

126

127

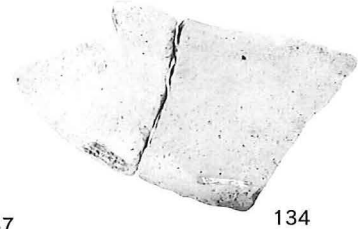

128

129

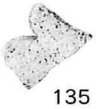

131

132

133

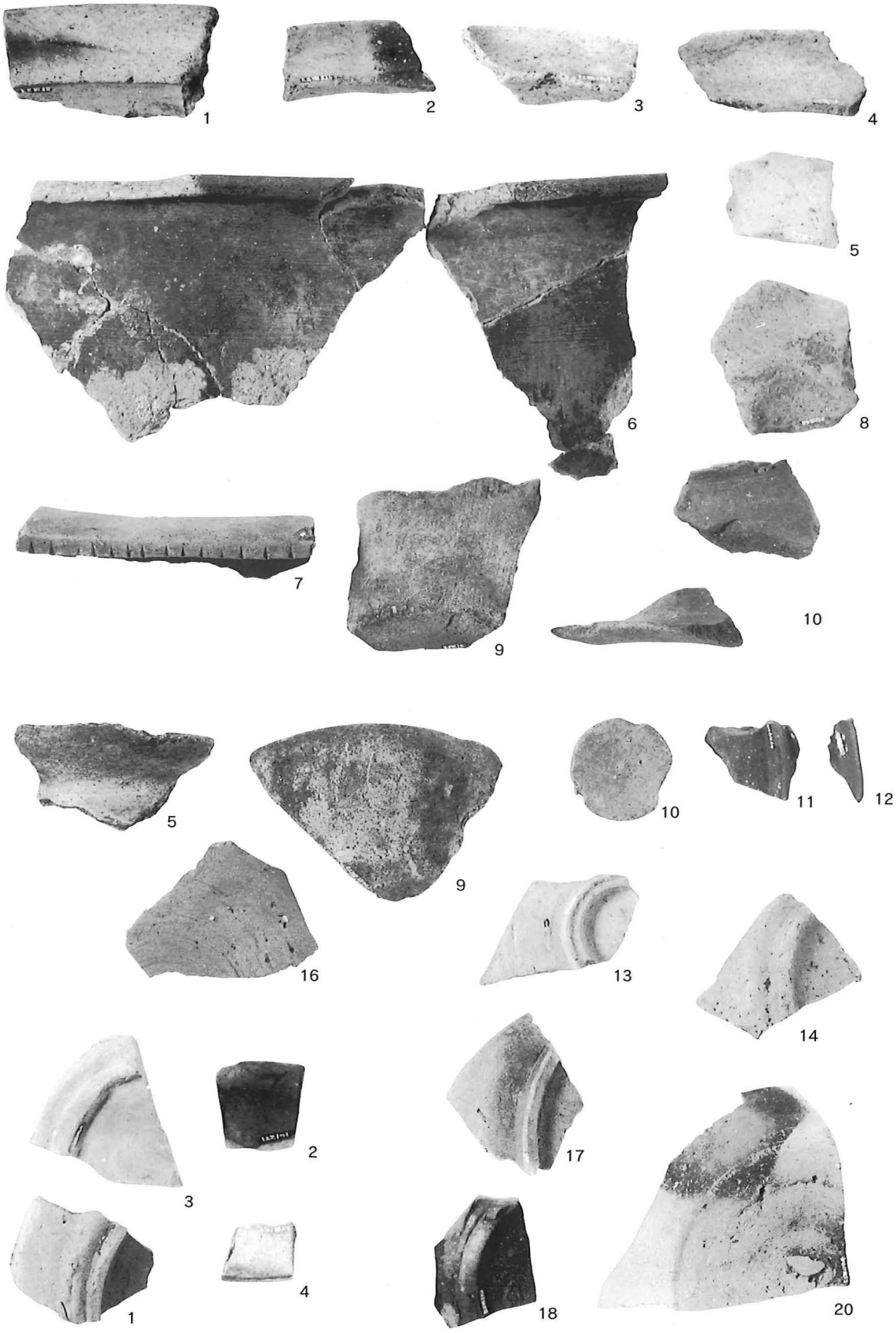

134

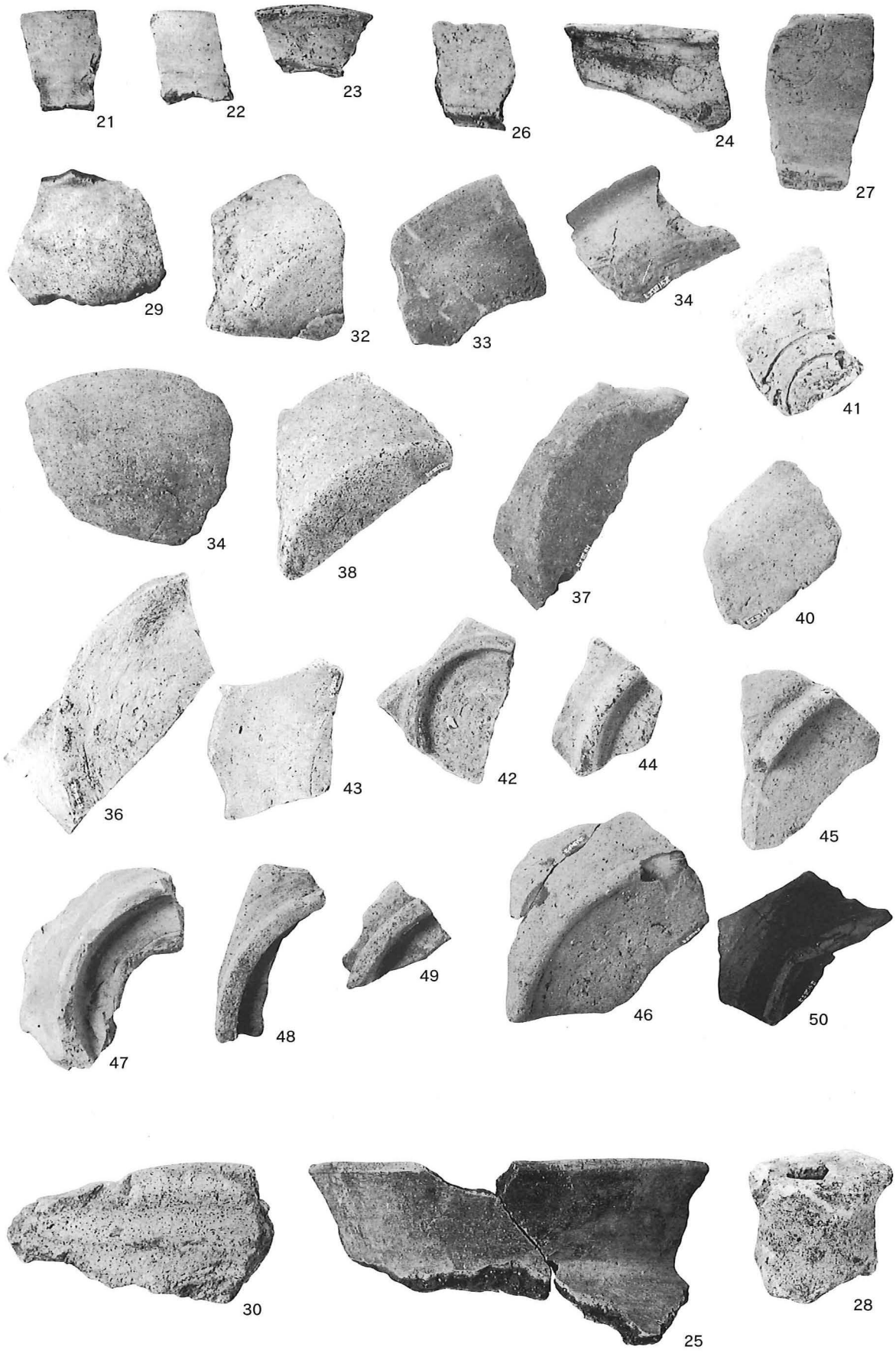
136


135

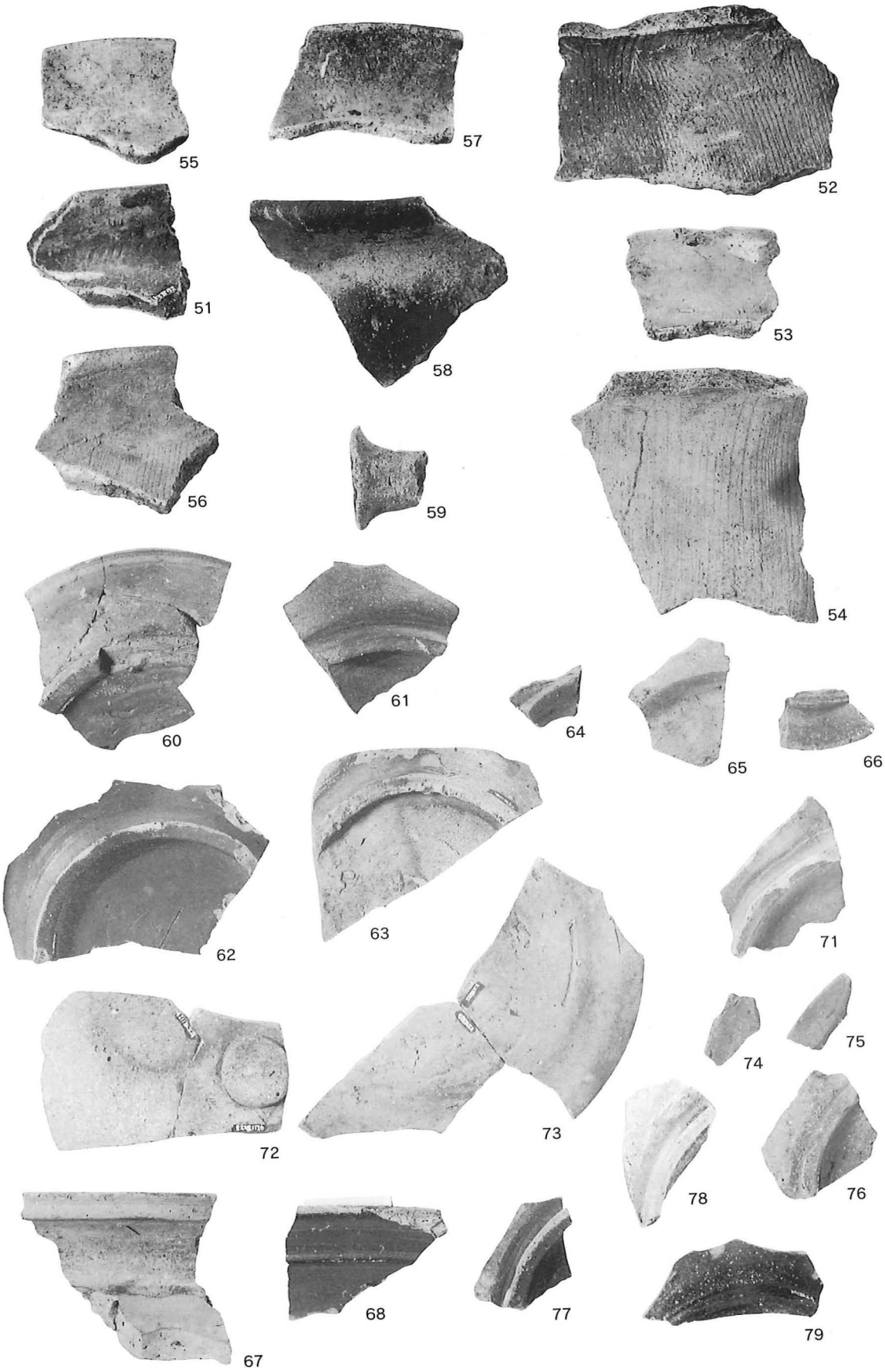
137

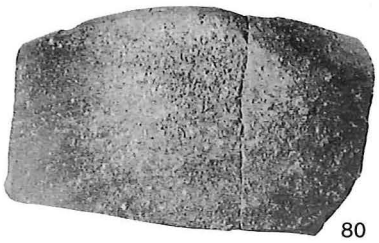
図版10




21
22
23
26
24
27
29
32
33
34
41
34
38
37
40
36
43
42
44
45
47
48
49
46
50
30
25
28

図版12

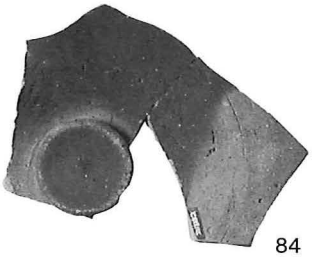

55
57
52
51
58
53
56
59
54
60
61
64
65
66
62
63
71
72
73
74
75
78
76
67
68
77
79


80

81

82

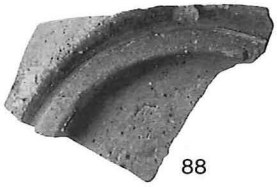
83


84

85

86

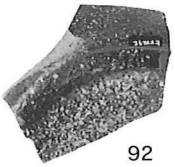
87


88

89

90

91


92

93

97

94

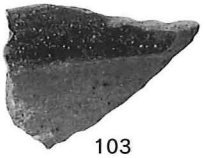
98

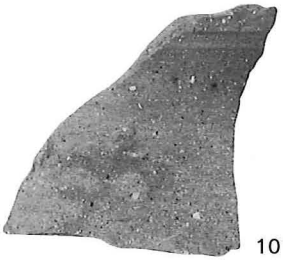
99

96

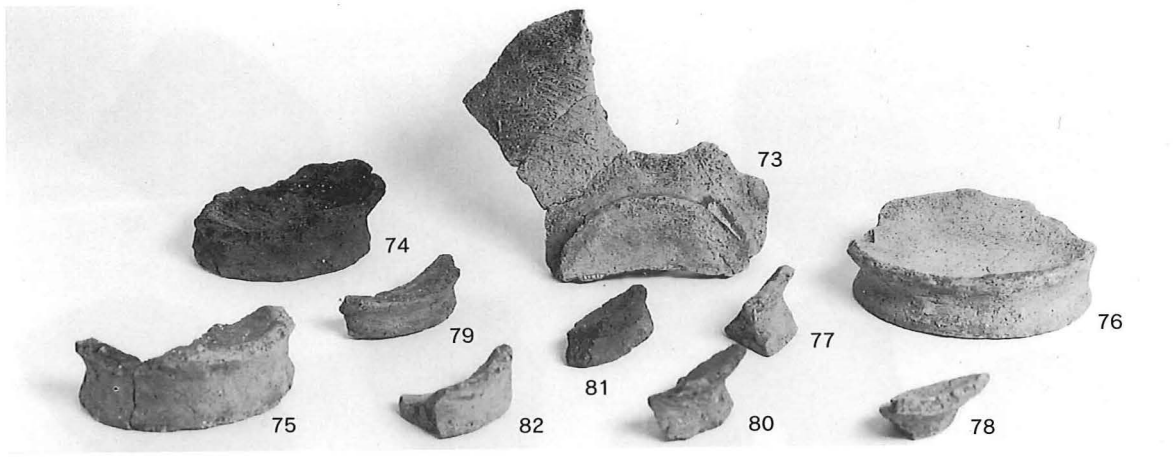
95

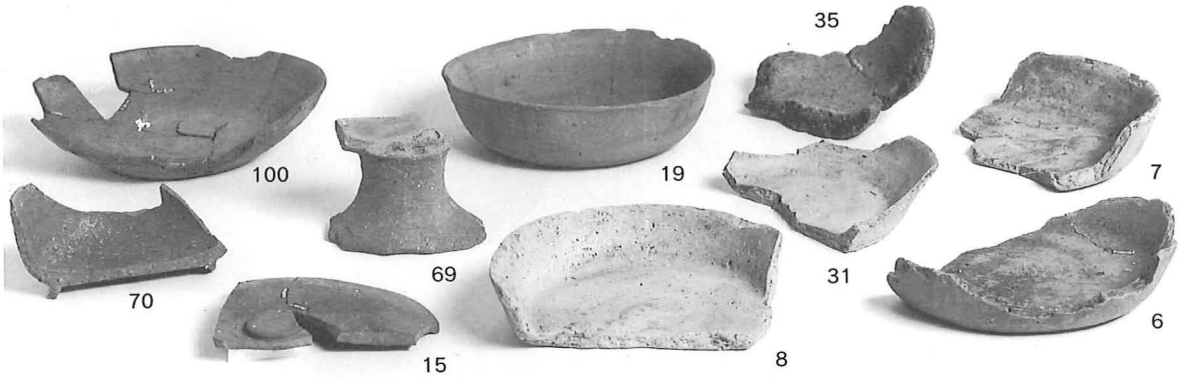
102

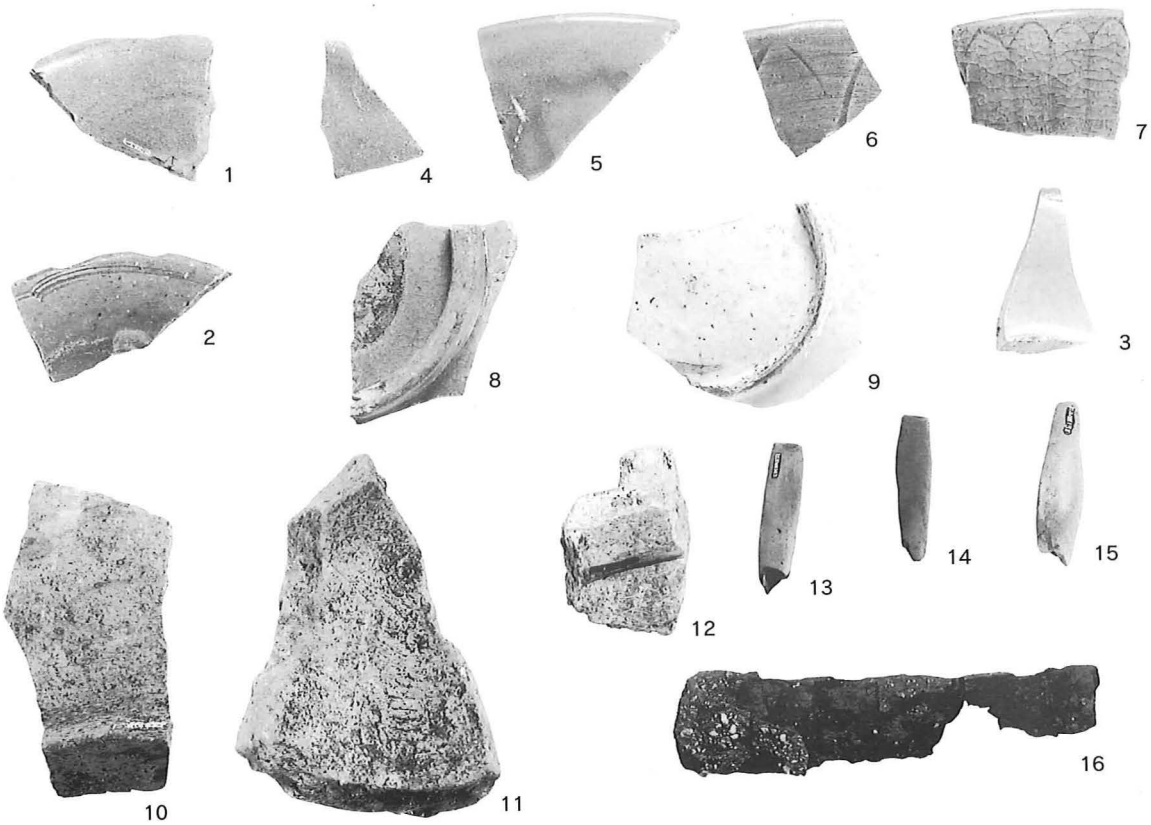

103

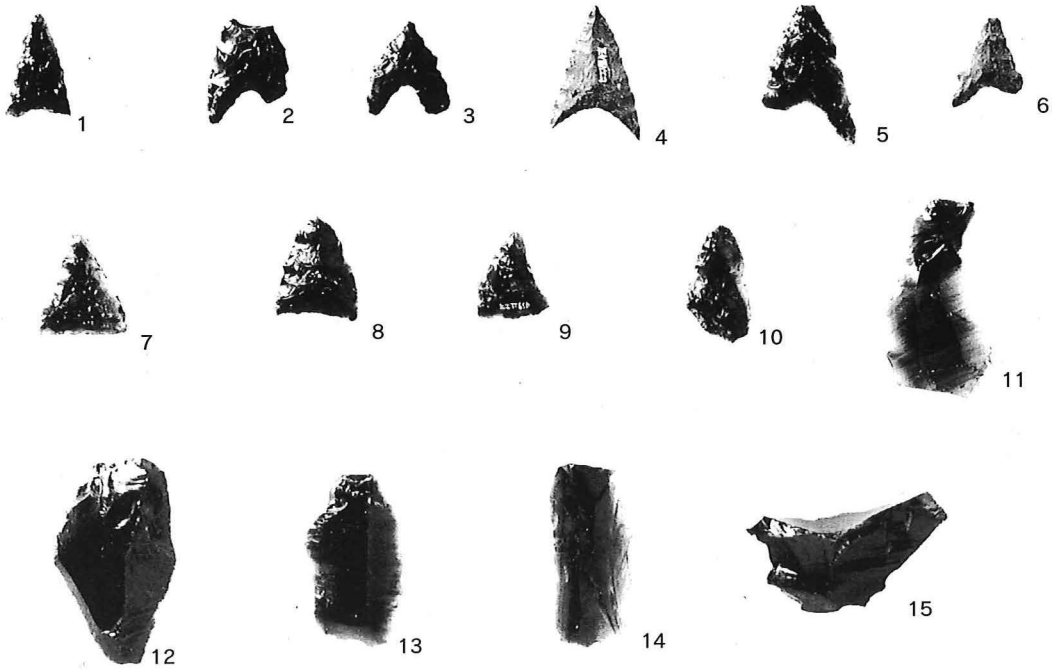

101

図版14


73
74
76
79
77
81
75
82
80
78

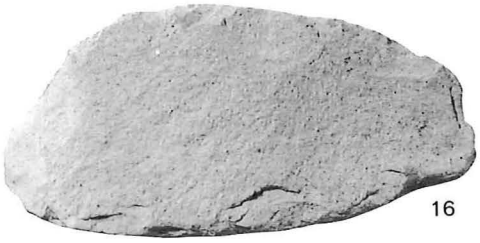

35
100
19
7
69
31
70
6
15
8


1
4
5
6
7
2
8
9
3
12
13
14
15
10
11
16



石器① 上段 石鏃　下段 砥石

図版16

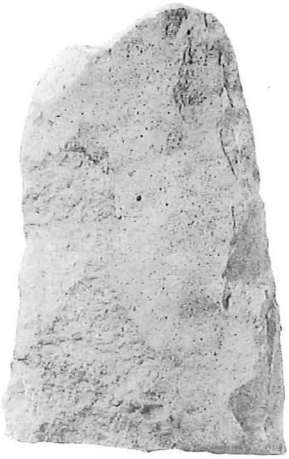

16

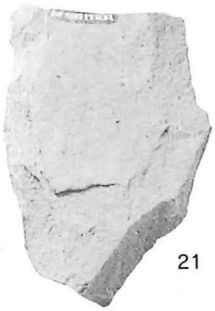
17

18

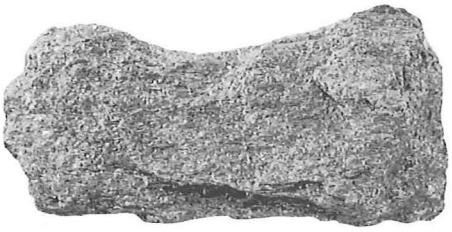
19

20


22


21

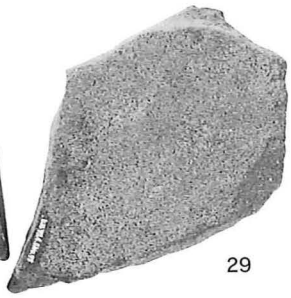
24


23

25

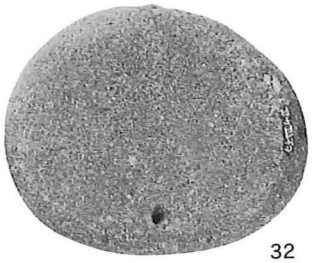
26

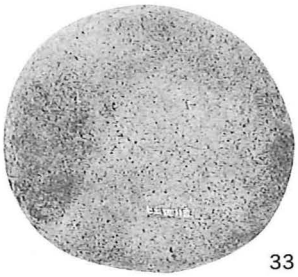
28


29

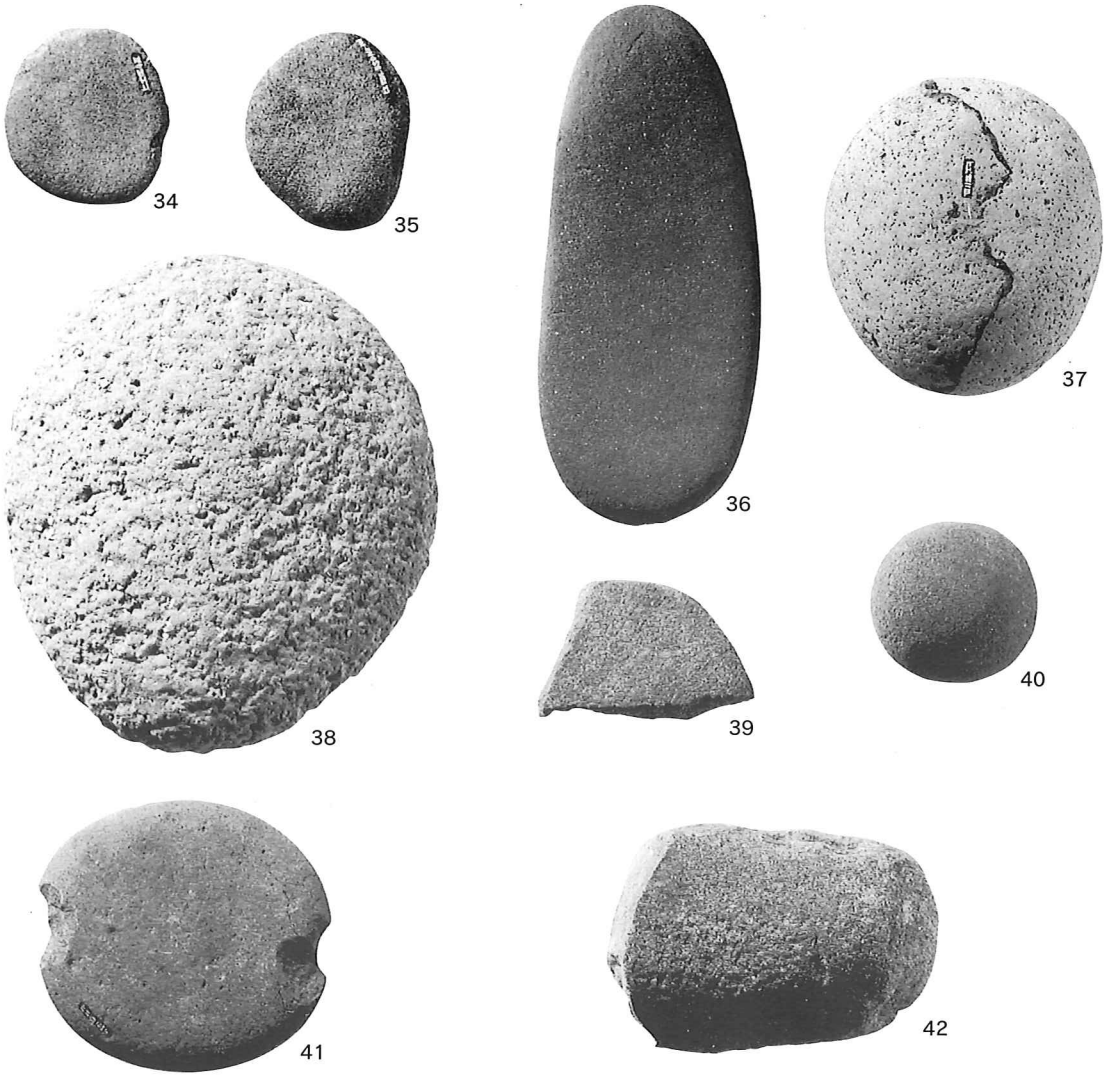
30

31


32


33

石器②



石器③

報告書抄録

ふりがな	ひえだばる
書名	稗田原遺跡Ⅴ
副書名	
巻次	
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第161集
編著者名	福田一志・竹中哲朗
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	長崎市江戸町2-13
発行年月日	2001年 3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひえだばるいせき 稗田原遺跡	しまばらしひえだちょう 島原市稗田町	3	92-74	32° 48′ 24″	130° 21′ 10″	平成12年 5/8～6/3	650㎡	道路拡幅

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
生活跡	縄文時代 古墳時代 古代 中世 近世	溝4条 柱穴多数	縄文土器(早期・晩期) 石器(石鏃・打製石斧・磨製石斧・敲石・磨石・砥石など) 古式土師器 古代の土師器・須恵器	

長崎県文化財調査報告書　第161集

稗田原遺跡Ⅴ

平成13年3月31日

発　　行　長崎県教育委員会

長崎市江戸町2-13

印　　刷　平和堂オフセット印刷㈲

長崎市出島町5番11号